

3 訪問団員報告書

レクサンド訪問報告書

副団長 高谷 茂

私のレクサンド訪問は、まず沿道でのレクサンド市民の小旗を振っての歓迎から始まりました。市庁舎前には大勢のレクサンド市民が集まり、大きな拍手で迎えて頂きました。迎えてくれた市民の皆様と入った市庁舎の議場で行われた歓迎セレモニーは、簡素でしたが懐かしい人達に囲まれた心温まるもので、私にとって初めてのレクサンド訪問でしたが、そんなことを全く感じない、これまでの交流の深さを実感させるものでした。

こうして始まった交流事業ですが、今回大勢の訪問団を受け入れるためにレクサンド市が用意していたプログラムは実に素晴らしいものでした。レクサンドという街を充分に見てもらふこと、できるだけ多くのレクサンド市民と交流ができること、さらにこれからのレクサンド市と当別町の交流のあり方に大きな方向性を与えることなど、明確なメッセージを持っていたと思います。それは姉妹都市提携50周年を見据えて、レクサンドの若い世代に当別町との交流に関心をもってもらふためのプログラムが適所に組み込まれていたことです。例えば、歓迎夕食会は、レクサンド高校のレストラン課の学生達の手作りディナー、アトラクションも高校生達によるミニコンサートでした。翌日の昼食を兼ねたレクサンド成人学校での若者との交流、記念式典には多くの小さな子供達が式に参加していました。私達はこのメッセージをしっかりと受けとめ、当別町側も真剣に50周年を目指した体制作りに取り組まなければならないと感じて帰ってきました。私だけでなく、多くの訪問団の人達も同様に感じられたものと思います。まずは30周年を1つの契機として当別の若い世代に交流に関心をもってもらふ準備を進めなければならないと思います。

更に、今回は大人数ということもありましたが、通訳として同行して頂いた伊藤伸哉さん以外に、カイ・レイニウス夫妻、森ステファン氏、現地の八幡敬子さんの他に数人の日本人女性の通訳としてのご協力があり、より私達の気持ちレクサンド市民に伝わったことと思います。お世話頂いた方々に改めて感謝したいと思います。

最後に、この訪問を一層意義のあるものにして頂いた、渡邊在スウェーデン大使に対して、心からお礼を申し上げたいと思います。ストックホルムアーランダ空港ホテルの歓迎訪問に始まり、25周年記念式典夕食会の夫人同伴の参加など、レクサンド市に出向いての心使いに改めて感謝申し上げたいと思います。スウェーデン最後の夜には、訪問団全員を公邸に招待して心のこもった夕食会を催していただき、すばらしい思い出ができました。私達が続けてきた姉妹都市の交流が日本とスウェーデンの関係においても十分に評価されていることを感じて大変うれしく誇らしく思いました。

訪問団全員が無事で、交流を十分に深めることのできた、実りある25周年事業であったと思います。お世話になったすべての人に心より感謝申し上げます。

副団長 山 田 明

1987 年 10 月、当別町とレクサンド市が姉妹都市提携をレクサンド市庁舎にて、当時の配野町長とベッテル・ダニエルズ市長で調印が交わされて以来、今年で 25 周年を迎えることとなりました。その記念事業として、当別町と当別レクサンド都市交流協会が連携し、昨年より訪問団派遣事業を進めて参りました。

今回の訪問の目的は、提携 25 周年を記念して開催される記念式典の他、各種の記念事業や関連事業に参加して、両市町の友好親善に貢献すること、又グループ別研修として、企業・農業・学校・福祉に分けて、在スウェーデン日本大使館と連携した視察研修を行い、見聞を広め、国際感覚豊かな人材の育成に寄与することでありました。

今年の 7 月に一般公募 22 名を含む当別町民による 38 名の訪問団が、泉亭町長を訪問団長として結成されました。今回の訪問団は、今迄の派遣事業では行われなかった勉強会を長時間かけて実施し、国際交流の歴史を学ぶ等、事前の準備に万全を期して参りました。9 月 5 日の訪問団の出発式・壮行会には、早朝にもかかわらず、多くの方々に参加・見送りを頂き感激いたしました。当日は当別町を 5 時 30 分に出発し、新千歳空港を 7 時に成田空港に向けて出発し、コペンハーゲン空港を経由して、時差 7 時間のストックホルムのアーランダ空港に 19 時 20 分に到着、当別町を出発してから約 20 時間を要して空港内のスカイシティホテルに宿泊しました。

翌日は早朝より在スウェーデン日本大使の渡邊大使とカイ・レイニウス前参事官夫妻の歓迎訪問を受けた後、一路レクサンド市へ向けて、250km程バスで北上しました。バスの車窓から観るダーラナ地方の風景は本当に当別町に似ていると痛感しました。

午後 3 時、レクサンド市街へ入る橋を渡ると、多くのレクサンド市民の心暖まる出迎えを受け、市庁舎の議場にて歓迎セレモニーが催され、両市町の記念品の交換を行いました。

その後、歓迎の夕食会場であるレクサンド高校にて、高校生たちが作った手料理をご馳走になり、地元高校生によるバンド演奏を聴き、心が癒されました。

その後ホテルとホームステイ先へと別れて宿泊しましたが、私が宿泊したダレカリアホテルは、レクサンド市街より 15 分位の観光地に在り、シリアン湖を一望できる歴史あるホテルでありました。シリアン湖は今から 3 億年ほど前に隕石が衝突してできた湖であり、森林の生命の源であるとのことで、翌朝ホテルから見えた、晴天に恵まれたシリアン湖の風景は、正に絶景でありました。

3 日目はグループに分かれての研修で、私たちは企業研修班で午前中はトーモクヒューズとレクサンドパンの工場を視察研修後、レクサンド成人学校で陶芸穴窯の開窯式に出席し、一般公募の辻野道子さんによるお茶の会を見学しました。

午後からは、姉妹都市提携の記念行事の一環であるレクサンド経営者協会主催による、レクサンド市の企業の物産展示会に出席し、その後、私達の訪問の目的の一つである企業家懇談会に臨みました。レクサンド市側は、経営者協会会長のペーテル・ヨン会長、ダーラナ地方の商工会議所会長のルイス女史を始め 8 名、当別町側は当別町長他 8 名で懇談いたしました。当別町とレクサンド市の経済交流として、「両者のネットワークの構築を図るには」というテーマで行いました。2 時間弱の限られた時間ではありましたが、双方の意見交換に於い

て、輸出入のルールや文化の違いがあるが、お互いに福祉や教育を学び合いながら、起業家精神の養成や若い後継者の育成を目指して、今後のビジネスに結びつく様に検討しようとの結論に達しました。

4日目は、午前中、レクサンド市内にある日本公園で交流 25 周年の桜の記念植樹を行い、午後より、シリアン湖の特設会場にて、多くのレクサンド市民の参加による 25 周年記念式典が盛大に催されました。式典には在スウェーデン日本大使の渡邊大使夫妻や、在札幌スウェーデン名誉領事の加藤夫妻が来賓として出席され、終始和やかな雰囲気の中に終了しました。その後、レクサンド市街の記念パレードとモスコゲンホテルでの記念夕食会に参加し、多くの方々の歓迎を受けました。又、夕食会の余興の一つとして、一般公募参加の大畑富雄さんが詩吟を披露し、レクサンド市民の大喝采を受けました。

5日目は、晴天に恵まれたのですが、非常に寒く、地方によっては気温がマイナスになったそうです。この日は、レクサンド市滞在が最後であり、午前中はパークゴルフ大会参加のグループとシリアン湖施設の研修グループに分かれて行動し、午後からはパークゴルフ場内に 25 周年記念として、当別町民有志により寄贈された「四阿」の贈呈式に参加しました。

その後、シリアン湖を遊覧する船上レストランにて、お別れパーティーが催され、夕方の 5 時にホームステイファミリーや、各団体の方々、又多くのレクサンド市民の見送りの中、バスにてストックホルムへ向けて出発し、4 日間に渡って行われたレクサンド市での姉妹都市提携 25 周年記念の行事を終了しました。

6日目は、ストックホルム市内を 4 グループにわかれて視察研修を行い、私達のグループは在スウェーデン日本大使館を表敬訪問し、渡邊大使、ストックホルムの日本商工会の西尾会長と、当別町とスウェーデン・レクサンド市の今後の交流について懇談して参りました。又、その後、渡邊大使の計らいにより、午後 5 時より大使公邸で夕食レセプションに招かれ、そのご好意に感激し、心暖まる一時を過ごさせて頂きました。

7日目は、帰国に向けて早朝 8 時にアランダ空港へ移動しコペンハーゲンを経由して、翌朝 9 時 30 分に成田空港へ到着。入国手続き後、羽田空港へ移動し、午後 4 時 30 分ようやく当別町へ着きました。到着時も又、出発の時と同じく多くの方々の出迎えを受けたことに感謝申し上げます。

今回の訪問事業に際し、私なりに 2 つの目的をもって参加致しました。

一つは、当別レクサンド協会の会長として、今後両市町の交流をどのように進めるべきかということと、もう一つは提携 25 周年を迎え、経済交流のあり方をどの様にすべきかということとであります。前者についてはニーゴード議長やリリエベリィ市長が話されていたように、両市町の心と心の繋がりを大切にして、若い世代へと承継していくことが大切であると感じました。後者については、経営者協会のペーテル・ヨーン会長が話されていたのですが、25 周年目にしてようやく同じテーブルについたことは成果であり、これから流通システムや輸出入のルール、又デザインやアイデアを出し合いながら、人材の交流も含めた交流を進めたいと考えます。

終わりになりますが、今回の訪問事業に際して、レクサンド市側では 3 年前より準備していたそうです。リリエベリィ市長、ニーゴード議長を始めレクサンド市民の皆様、又ホームステイファミリーの方々から感謝申し上げますと共に、訪問団の副団長として、訪問団の皆様のご団体行動に対する協力にお礼申し上げます、当別町・レクサンド姉妹都市提携 25 周年記念訪問の報告と致します。

当別町・レクサンド市

姉妹都市提携25周年の重さと未来

～提携25周年記念訪問報告～

訪問団員 山内 秀治

泉亭町長をはじめ高谷議長や町議会議員、当別・レクサンド都市交流協会の関係者、各種機関・団体の代表の方、一般公募の方々など38名と、加藤在札幌スウェーデン名誉領事をはじめレイニウス前駐日スウェーデン大使館参事官や東海大学、スウェーデンハウス・トモクヒュース社関係者など32名の総勢70名という大訪問団で、9月5日(水)から12日(水)まで7泊8日の訪問を行った。

タイトではあるが中身の濃い充実した訪問日程、内容であった。リリエベリイレクサンド市長をはじめ渡邊スウェーデン大使や、関係の皆さん、レクサンド市民の方々から温かいおもてなしをいただいた。天候も、厳しい残暑の続く北海道を脱出し、私の大好きな秋の気配漂う中で訪問で快適に過ごすことができた。

福祉国家や持続発展国家を目指しているスウェーデンの予算の使われ方や文化、教育、国民性等の一端に触れることができた。そのような国の考え方が、自然や安全を大切に、急がない、あわてない、あくせくしないという、安定した公平で質素な気質を国民性として植え付けているのではないかと想像した。収入の多寡による傾斜配分負担に基づく、実質的な平等社会の一面を見ることができた。他に、時間にはアバウトな印象を強く持った。まさに時間がゆっくりと流れている社会風潮を感じた。食事なども、パーツで出されるおかずやデザートなどは、体に合わせているのか巨大であった。また、食物のレパートリーが、パン、バター、チーズ、ハム、ミートボール、サーモン、野菜、果物等と限定されていることには、日本の方が和洋取り混ぜた多様なメニューがあることを強く感じた。また、日本の生活感覚や技術を高める各種の機器・道具の便利性やデザイン性は一見無駄かなと思われる面もあるが、それは日本の生活文化観の高さであり日本の誇りとして思うことができた。しかし、日本の高度な科学技術は生活に活かされているが、環境や食品への配慮、生活面での合理性などを徹底して追求している持続発展国家を目指す考えや高福祉という面ではスウェーデンを見習うところがあると強く感じた。改めて、人間の生き方の在り様について考えさせられた。

教育については、小・中学校のほとんどが小中一貫制度であることや、学校選択制であること、1学級の定員も上限25人までで教員は同じ学校に終身務めていることができること、授業料や給食費などの保護者が負担する教育経費は大学まで無料であることなど、高福祉による保障が教育まで及んでいることを感じた。教育内容は、学校ごとの特色ある教育活動が重視され、私が視察した小学校は環境教育に重点を置いた野外学習の時数を教育課程に多く取り入れていた。体験的な学習を通して、生活や活動に活かす学力を身に付けていることを想像したが、それが日常の学習指導にどのように活かされているのかについては具体的にみることはできなかった。子どもたちが生き生きと体験学習している様子を見て、教育の質の高さを感じた。また、一部ではあったが、教育にも、持続発展国家を実現するための活動が取り入れられていることを見ることができた。

このように、スウェーデンの国民的気質や文化、教育等に触れ、日本との比較でそのよさをたくさん見ることができた。反面、日本のよさも見ることもできた。このように、国同士にはそれぞれがもつ文化や教育等のよさがあるので、やはり交流しお互いのよさを学び、活かして

いくことの大切さを改めて感じた。

消費税25%という、スウェーデンの高負担高福祉の考え方や仕組みが、高齢者の増加により今後財源的にかなりきつくなることが課題となっていることも教えられた。日本を含め高齢化社会への対応は共通の課題であることを感じた。

目をレクサンド市と当別町の提携・交流について向ける。

両市町の25年間のこれまでの長い歴史の中で培われてきた交流の成果を、今回の訪問で次のようなところに見ることができた。

- 国旗日の丸を持つての多数のレクサンド市民の出迎え
- スウェーデンハウス調の建築様式の建物
- 記念植樹し成長した桜
- 日本庭園や石灯籠、あずまや
- 焼き釜と日本風陶器
- 出迎えの方々のゆかた姿や下駄ばき姿
- パークゴルフ場とパークゴルフに興じる人たちの増加
- 国旗日の丸の赤と白でライトアップしてた街の中心にかかる橋の欄干に取り付けられたたくさんの歓迎ライト 等々

特に、この交流が日本の国レベルや道・県レベルで高く評価されていることを、2009年に受賞した総務大臣賞はもとより、25周年記念の式典の高橋北海道知事のメッセージやダラナ県知事の挨拶、渡邊大使の挨拶、大使との懇談、大使のレセプションなどから強く感じた。

経済・産業交流(スウェーデンハウスやトーモクヒュース社等との関係)を基盤として、人的交流や文化・スポーツ交流等の25年の足跡をたくさんの成果としてみる事ができた。教育面においても、交換留学などが進められ、この取組もレクサンド市の方々に受け入れられてきた。今回の訪問を通して、これらの足跡にじかに触れ、両市町が四半世紀の歴史を築く重い交流を進められてきたことに、これまでこの提携・交流に携われてこられた関係者に心から敬意の念を抱いた。

当別町においても、この交流の成果物が街づくりに活かされていることをしっかりと認識し、今後は、これまで積み上げてきたこの提携・交流を基盤として、これらを一層充実したものにしていくために、企業誘致を含めた経済・産業交流や農業技術交流、人的交流、文化・スポーツ交流、教育交流などをどのように進めていくのかを模索し、実現していかなければならないと感じている。また、両市町の首長の挨拶にもたびたび述べられた提携・交流を一層充実していくための次の世代への橋渡しや、この事業に関わる関係機関や団体の増加を工夫していく必要があると感じている。

今回の訪問は、両市町の交流の歴史の重みを知り、今後の提携・交流を充実させていく課題を共有し、その課題を解明しながら両市町のつながりを未来にまで発展させていくことを確認し・決意し合う重要な訪問であった。

長年の提携・交流を中心となって進めてこられ、今回も団長として団員とともに大きな成果を上げられた泉亭町長、大変お疲れ様でした。また、コーディネーター役としてご苦労いただいた当別町国際交流連絡員の八幡さん、通訳の伊藤さんや森さん、様々な配慮、リード、ナビゲーター等でご苦労された役場の事務局の皆さんや協会事務局の茂又さん、日本旅行の南雲さん、訪問団の皆さん、お疲れ様でした。また、種々のご芳志をいただいた方々や、この事業に携わってくださったたくさんの方々、心からお礼を申し上げます。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念事業参加報告書

訪問団員 神 林 俊 一

私は、この度当別町農業委員会を代表して、姉妹都市であるスウェーデン王国レクサンド市との25年の長きに亘る交流の節目として開催される記念式典等に参加するため訪問団に参加することになりました。

これまで25年間において経済・福祉・スポーツ・文化・教育などで親密な相互交流があり特に5年前の姉妹都市提携20周年の際は、レクサンド市より約70名の訪問団を迎え、3日間にわたり盛大に当別町で記念行事を開催したことは記憶に新しいものであります。しかし、限られた時間の中での交流ということでレクサンド訪問団との直接の談話時間も少なく、さほどレクサンド市の知識を得ることもできませんでした。

従って、今回の初めての訪問に当たっては不安も大きく、また、体調面でも膝の持病もあることから他の訪問団のメンバーに迷惑をかけることとなるのではと二重の不安を抱えながらの参加決意でした。

そのような思いの中でスウェーデンに対するイメージとしては福祉政策が先進的な国家であり、環境政策にも優れた政策を持ち自然を大切にし、共存している国であるという程度でありましたが、事前に訪問団に対するレクチャーが数度開催されたことは事前入力として役には立ちました。

9月5日出発当日、朝早くからたくさんの方々の見送りを受けバスに乗り込み、千歳から飛行機を乗り継ぎ、約13時間程度を要してスウェーデン・ストックホルムに到着し初めての長旅でもあり、年齢のせいか疲労を感じました。

翌日、ストックホルムを立ちバスでレクサンド市に向い、昼食を挟み約5時間後市庁舎に到着しました。この間、車窓からの風景は事前にレクチャーを受けたとおり、緑の空間が広がる環境であり当別とはスケールの違う広大さを目の当たりにし、レクサンド市が近くなるにつれ、本町スウェーデンヒルズと同じように色が統一された建物が見られてきました。

市庁舎ではリリエベリィ市長他議会関係、職員などをはじめ多くの市民の皆様のお出迎えを受け、日本語でのメッセージ他皆さんの笑顔には深い感動を受け、今も強く印象に残っております。

9月7日はレクサンド市での交流と研修日程であり、私は農業研修班に所属し、農業学校の訪問、農業者との懇談、じゃがいも農家現地視察などに参加しました。スウェーデンの農業形態と北海道・当別町の農業形態を比較して、栽培される作物の違い、気候、土質、農業機械などに相違はあることは想定しておりましたが、気候的には寒冷地ということからやはり酪農が中心であり乳製品は豊富で、作物は小麦、馬鈴薯、菜種、燕麦などが栽培されているよう

でその点では本町と同様の作物栽培もあることを知りました。

日本は食料自給率40パーセント前後で、殆どの食物は輸入に頼らざるを得ない現状を考えると、スウェーデンは食料自給率120パーセントとのことで、特に小麦を含む穀物類は100パーセント以上であり、その他砂糖類、乳製品、卵類、イモ類は高い数値を示しております。自分たちの食料は自国で賄うという精神が根付いていると感じられました。

また、農地であります。土地は殆ど国有地・県有地で、そこで農業者の方々は農作物を栽培するという方法なので、従って日本のように農業委員会という組織はありません。わずかな私有農地なので売買、賃貸などの異動も殆ど発生しないとのことでした。

北欧人は背の高い人種ということは聞いておりましたが、体格に合わせて作られるのか分かりませんが、農業用のトラクターほかの機械も大きく驚きました。

9月8日は過去に造成された「日本庭園」で両市町代表者による桜の記念植樹に参加し、この桜の樹が永遠の友情の証として順調に生育し、やがて素晴らしい花が咲き、思い出の記念樹となるようお願い見届けました。

夜は25周年記念パレードのイベントで前述のとおり膝に持病を抱えての参加で、団員の皆さんに迷惑をかけるのではと不安もありましたが、レクサンド市民の温かい歓迎の中、法被を着て約300メートル程度無事に行進することができ安堵しました。

9月9日レクサンド市ともお別れの日になりましたが、まさしく水と緑に囲まれた美しい町を象徴するような、シリアン湖の観光施策研修そして船上でのお別れパーティーと、かつて経験したことのないイベントが開催され、市民の皆様と最後の交流の時間を過ごしましたが、とにかく大勢の皆さんが参加して別れの言葉を交わす時間は特に記憶に残るものでありました。滞在時間を通して私たちのために様々なプログラムを編成し楽しい交流ができたことに改めて感謝したいと思いますし、私の生涯において強く思い出として残る訪問でありました。

言葉は通じなくても姉妹都市の関係は深く、強い絆があり、皆さんが親子、兄弟、姉妹のように接していただき、25年間の交流の蓄積は大切な財産であると感じました。今後も有意義な交流を継続すべきと思いますし、次の記念行事は30周年となるわけですが、今回の経験を生かし協力出来ればと考えております。

訪問中を通して泉亭団長をはじめ訪問団の皆様にご大変お世話になり、無事に当別に戻ることができたことに感謝を申し上げ報告いたします。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問にあたって

訪問団員 臼 杵 英 男

9月5日から12日まで、姉妹都市提携25周年を記念し、議会側からの参加者の一人としてスウェーデンを訪問しました。

当別を出発する5日は早朝であるにも関わらず、大変多くのお見送りを頂きました事をまずは御礼を申し上げます。千歳から成田へ、コペンハーゲンで乗り継ぎ、夜ストックホルムへようやく到着。長旅の割には食欲旺盛で、遅い夕食を食べてぐっすりと眠りにつきました。

9月6日

いよいよレクサンド市に入る予定。出発前にわざわざ渡邊在スウェーデン日本大使がご挨拶に来られ、レクサンドに向け出発しました。途中のバスの窓からは、一步ストックホルムの街を外れると森林が延々と続いていました。レクサンドに近づくにつれ、段々と畑地も多く見られるようになってきました。レクサンドに到着し、街の手前にある橋を渡ると多くの市民の方々が日の丸の旗を振って笑顔で迎えていただきました。現地の新聞にも一面トップで大きく写真と共に掲載されました。レクサンド市庁舎議場に於いて歓迎のセレモニーがあり、夜は夕食会を開いていただき本当に温かい歓迎を受けました。

9月7日

参加者が4グループに分かれ、それぞれのテーマで視察・研修を行い、私は老人福祉施設等の研修を行いました。議会でも福祉の分野は担当の立場ですので、興味深く研修いたしました。内容については各グループの報告の中で出てきますのでここでは触れませんが、福祉に従事される方々の意識の高さと熱意は立派であると思いました。昼頃に分散して研修されていた方々とレクサンド成人学校に集まり、設置された陶芸穴窯の開窯式参加の後、再度各グループに分かれ、私は家庭訪問のグループで一般家庭の様子を見せていただきました。決して派手ではなく、古くからある物を個性的に現代的にアレンジしながら大切に使い、生活をエンジョイしていると感じました。夜はスウェーデンで盛んなアイスホッケー場で食事をしながら、レクサンドのチームの試合を見せてもらいました。レクサンドのチームはとても強いチームとの事でしたが、この日は残念ながら負けてしまいました。

9月8日

シリアン湖近くの日本公園に於いて、桜の記念植樹とスウェーデン在住日本人の方々の着物ショーが行われ、レクサンドの方々との交流が行われました。午後よりシリアン湖の特設会場に於いて姉妹都市提携25周年の記念式典が行われました。寒い日で途中雨も降りましたが、レクサンドの方々、渡邊在スウェーデン日本大使や多くの来賓も出席され盛大に行われました。夜は、レクサンド教会より街中の市民の集まっている会場までパレードをしました。会場で一人の少年に用意していた記念バッチを渡すと大変喜んで私にハグしてきました。その時大変感動したのを思い出します。モスコゲンホテルで記念夕食会を行い、大いに親睦を

深めました。

9月9日

パークゴルフ大会が行われ、レクサンドの方々を交えてチームを組み参加をしました。今回の優勝者はレクサンド市民の方で大変喜んでいました。パークゴルフ場にはあずまやが作られ、その贈呈式が行われました。シリアン湖の歴史ある船の船上でお別れパーティが行われ、レクサンドの方々と最後の交流をしました。この日はその後、バスでストックホルムまで移動しました。

9月10日

今日もストックホルムに於いて、参加者それぞれが4グループに分かれ、市内の視察研修を行いました。私達は町長と共に日本大使館に出向き、当別町の今後の経済交流等を含む意見交換や今回お世話になった御礼等を申し上げに行き、昼食時に全員集合し、夕方ご招待をいただいた大使公邸に出向き、日本大使のレセプションに参加し、大変お世話になりました。あの時、久しぶりにご飯を口にして、皆さん大変喜んでいました。

9月11日

ホテルからアーランダ空港に行き、ストックホルムを後にしてコペンハーゲンを経由し、12日朝成田に到着。夕方当別町に戻ってきましたが、またまた、大勢の方々がお出迎えをして下さいました。本当にありがとうございました。

今回の姉妹都市提携25周年記念の訪問につきましては、レクサンド市滞在中の4日間の間、市民の皆様方による盛りだくさんの歓迎イベントや在スウェーデン日本大使をはじめとする関係者の皆様方に大変お世話になりました事、そして訪問の企画から実行までお世話になった方々に深く感謝いたします。5年後に当別町で行われる事になっている記念事業の際には、今回お世話になった感謝の気持ちをお返ししなければと思います。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年事業に参加して

訪問団員 市川 正

当別町とレクサンド市の姉妹都市提携25周年記念事業が開催されるに当たり、当別町議会より訪問団員として指名を戴き、その責任の重さを感じていたところではありますが、其の後、早速訪問に関してのミーティング等が出発迄5回も開催され、訪問団員38名は出発に際し、万全を期し取り進めて参りました。私も初めての訪問であります。

いよいよ出発当日。(9月5日早朝 AM5時)総合体育館前にて多くの町民と役場及び関係職員にお集まり戴き、結団式・壮行会を行った後、多くの皆さんのお見送りを受け AM5:30に出発し千歳空港へと向かいました。千歳発 AM7:50成田へ～成田発～コペンハーゲンへ～コペンハーゲン発～ストックホルムへ。

いよいよ PM7:20にストックホルム空港へ到着した。長い飛行時間と時差が7時間余りあるため、若干疲れた気もした。ストックホルム泊である。

(2日目)ストックホルムより、バスでいよいよレクサンド市へ移動。4時間余りで待望のレクサンド市内へバスは入る。沿道には大勢の市民に小旗を振って出迎えて戴き感激し、胸が熱くなる思いでありました。続いてレクサンド市庁舎議場に於いて歓迎セレモニーが開催され、ウルリカ・リリエベリィ市長、ラッセ・ニーゴード議長、議員、関係機関等多くの皆様方の盛大なる歓迎を戴きました事は訪問団員として大きく感銘致した折であります。今夕はレクサンド高校での歓迎夕食会において、高校生の手がけた料理で親交を深めました。今夜はレクサンド泊である。

(3日目)各自、各班に分かれて AM7:40よりグループ研修であります。4班に分かれて A班 企業研修、B班 農業研修、C班 学校研修、D班 福祉研修でAM8:00に現地に到着しました。私は農業研修班でありましたので、じゃがいも農家など、麦作、酪農家の視察をし、其の後レクサンドの公立農業高校を研修しました。特に、乳製品については加工し、豚、羊等も加工製品にして全量レクサンド市で消費量を全量出荷販売しているとの事であった。尚又、園芸施設、野菜施設の建物は市よりバイオ熱の供給を受け、更に全施設コンピューターで管理されている。現地視察後、高校舎内で場所を変え、公立農業高校教授、他に農業団体幹部と農業に関する問題について懇談し有意義な研修となった。今夜はグループで行動し、アイスホッケー観戦をしたが、さすがアイスホッケーが盛んなスウェーデン王国の強豪な選手の公式試合であった。今夜はレクサンド泊である。

(4日目)訪問団最大の目的である姉妹都市提携25周年記念式典の日である。AM9:30出発し、日本庭園での桜の記念植樹と合わせて日本着物ショーと進み、PM1:30よりシリア

ン湖特設会場に於いて在スウェーデン日本大使の渡邊大使を迎え、ダーラナ県知事、レクサンド市長など多くの関係者の他、大勢のレクサンド市民が出席のもと盛大に開催されたのであります。その後、祝賀ケーキパーティーも同会場で終わりましたが、素晴らしい25周年記念式典だったと思います。其の後は会場を移し、レクサンド教会でのコンサート又、25周年記念パレードと進み、最後の夕食会も大歓迎を受けながら進み、ホテルに到着したのは午前0時を廻っていた。今夜は最後のレクサンド泊である。

(5日目)出発8:30、今日はグループに分かれた行動である。私はパークゴルフ交流に参加したが、なかなか思う様に進まず終わった。東屋贈呈式では全員集合をする。以後、移動しレクサンド市最後の船上レストランでシリアン湖を眺めながらのお別れパーティーに参加し、多くの歓迎と名残り惜しむ市民と次の5年後は当別町で再会する事を約束し、心温まるレクサンド市民が見えなくなるまで手を振ってレクサンドを後にし、ストックホルムへと向かいました。PM8:00過ぎホテル着、ストックホルム泊。

(6日目)出発9:00、今日もグループ4班に分かれて視察研修。私はスウェーデン日本大使館へ表敬訪問に伺いました。その後、昼食には全員集合し視察しました。PM5:00からは日本大使公邸での日本大使のレセプションが一般的には考えられませんが招待を受け、和やかな中で開催され大使館関係者の皆様に厚く御礼を申し上げたいと存じます。今夜はスウェーデン王国最後の夜であり、ストックホルム泊である。

(7日目)今日は帰国の日。AM8:30アーランダ空港へ。PM12:20ストックホルム初～コペンハーゲン空港へ PM3:50コペンハーゲン発～機内泊。

(8日目)成田空港着 AM9:35～羽田空港発 PM1:15～千歳着 PM2:45～当別着 PM4:45。訪問団全員揃って元気で帰町し、総合体育館前には、出発と同じく大勢の町民・関係者、役場職員の出迎えを受けましてお礼を申し上げます。

訪問団員38名全員が健康で事故もトラブルも何ひとつなく予定通り当別町レクサンド市姉妹都市提携25周年記念事業の大役を十分に果して来たと考えております。今後更に30周年に向け若い青少年の交流も深めていく必要があると思いますし、特に経済交流を関係機関の協力を得て進めていくべきと強く感じたところであります。

今回の姉妹都市交流25周年訪問に際し、大変な御協力を戴きました関係機関の皆さんと多くの町民の皆さんのご理解を戴き、参加させて戴きました事に心より厚く感謝を申し上げますと共に泉亭訪問団長を始め関係事務局職員皆さんの適切な取り計らいに併せて御礼を申し上げます当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年公式訪問の報告と致します。

姉妹都市提携25周年記念レクサンド市を訪問して

訪問団員 竹田 和雄

スウェーデン王国レクサンド市と姉妹都市提携25周年の記念式典事業に際し、ウルリカ・リリエベリイ市長及びラッセ・ニーゴード議長から招待状を頂き、特別表彰者として訪問団に加わり、レクサンド市を再度訪問し、式典に於いて盾の授与に欲することは、私にとりまして身に余る光栄なことで御座いました。

9月5日総合体育館前での壮行会に、早朝から町民の皆さんに見送り頂き、5時に新千歳空港に向かう。7時50分新千歳空港発・成田・コペンハーゲン空港を經由してストックホルム空港に。予定どおり6日午後19時20分に到着しました。空港には、連絡員の八幡敬子さんが迎えにこられ、私も24年前レクサンド市に訪問した時から通訳として大変お世話になって来ましたので懐かしく、その日は訪問団全員が空港ホテルに宿泊しました。

翌日は、朝から快晴で10時には、ニーゴード議長さんが二階造りの立派なバスで迎えにこられた。ハイウェイを走る北欧の景観は、北海道の草木と良く似ている。ダーラナ地方に入ると豊富な森林に囲まれ、湖が数多くあり豊かな水と自然に恵まれた素晴らしい景観である。

途中レストランで食事を取り、2時間30分あまりでレクサンド市に着くことが出来た。市街地に入る手前にシリアン湖に掛かる大橋を渡ると沢山の市民が沿道に日の丸の小旗を振って迎えて頂き、また庁舎前に着くと同じように大勢の市民が迎えてくれる。市庁舎も25周年に合わせてきれいに改装されていた。

庁舎内議場で歓迎セレモニーが行われる。リリエベリイ市長の歓迎の挨拶があり、訪問団長である泉亭町長からの挨拶。又両議長の挨拶など和やかな雰囲気であった。その後、それぞれ宿泊先に向かい。私は案内されたトーモクヒルトンゲストハウスは、「トーモクヒュース」の所有で岡崎社長と女性従業員が迎えてくれた。泉亭町長・私と他4名が宿泊したが、管理人はおられないようだ。朝食はパンとハム・チーズ。果物がキッチンに運ばれているだけで、従業員は誰もいないので、みんなで食事の準備をした。また、サウナも設置されていたが、風呂の浴槽があり何よりくつろぐ事ができた。

9月7日も朝から快晴である。今日の日程は、教育行事班・農業交流班・福祉行事班・商業、経済交流班の4つのグループに分かれ、部門ごとの研修である。私は農業の研修で麦と馬鈴薯を耕作している大規模の農業を営んでいる農家の研修をする。144ヘクタールを営営する農業法人会社を訪ね、社長夫人と他従業員2名で営営している麦が100ヘクタールで40ヘクタールが馬鈴薯を耕作していると言う。

夜には、前市長ボー・ペッテルソン様の自宅に、泉亭町長・高谷議長・私と・高田随行員の4人が前市長の住宅に特別案内されました。レクサンド市街からシリアン湖を挟んで対岸にあり、車で15分ほどで着き、湖の見える素晴らしい所である。8年前日本庭園開園式に訪れたときにも、私は前市長の住宅を訪問した事がありますが、すこし前に住宅が完成したとの事で

あったが、100年以上もたった古い家を壊してきて、すべて市長自身が建てた家と聞いて驚きましたが、2度目に訪問したときは玄関を増築したと言っていた。今回の訪問では、自宅の横に来客用の宿泊できる家を建てておられ、小さな家だがペチカも立派に造られ内装も工事の途中であった。

9月8日は、庭園に入る入口から日本庭園までの約150メートル余りの当別ロードに当別から寄贈した3メートルもある大きな桜の木を提携25周年と合わせて25本記念の植樹が行われた。日本庭園開園式の頃の公園とは、見違えるほど整備され、シリアン湖が目前に広がる素晴らしい日本庭園になっていた。

8年前日本庭園開園に訪問した5人の皆さんで「しだれ白樺」を記念植樹した木も立派に成長していたので感銘いたしました。

午後1時30分から、シリアン湖畔野外特設会場で25周年記念式典が開会され、どこからともなくチャーチボートに乗った10人程のバイオリン奏者が船着き場で演奏が始まり大勢の市民が集まり式典会場を埋め尽くした。リリエベリィ市長の式辞と泉亭町長の挨拶のあと、25年前姉妹都市締結に署名された、故配野元町長・泉亭町長と私が、渡邊芳樹在スウェーデン日本大使・リリエベリィ市長・ラーシュ・ヴァリエ駐日スウェーデン大使と記された盾を授与され、私までが、レクサンド市から盾を頂くことは、思いもよらない事で、本当にありがたく恐縮に思った次第であります。

9月9日レクサンド最後の日であり、シリアン湖周辺の施設研修班とパークゴルフ班に分かれ、パークゴルフ大会が始まる。レクサンドの皆さんもパークゴルフが上達している。優勝・準優勝はスウェーデンの方々であった。

午後からは、パークゴルフ場に建設された、当別から寄贈した「あずま屋」の贈呈式が行われた。午後3時から、シリアン湖の船上レストランによる別れのパーティーでシリアン湖周辺の景色を眺めながら素晴らしい企画でのお別れパーティーであった。思い出深い提携25周年事業のすべてが終わり、夕方ストックホルムに向かい9月10日は、スウェーデン日本大使館との連携事業に参加し、日本大使館を表敬訪問し、その後日本大使公邸に訪問団全員が招かれ、渡邊大使とのレセプションに多大なご配慮を賜り感激いたしました。今回の訪問を通して姉妹都市としての更なる絆が深まる事を期待しています。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年訪問団派遣事業報告

訪問団員 川 村 義 宏

レクサンドを訪問するにあたって、5回の事前研修を受けたものの、心配だった英語は、iPhone を購入して翻訳ソフトに頼る。農業班の班長に指名されたので、スウェーデンの農業の情報を、必死でネット検索するも、多少の不安を胸に当別を出発しました。

案の定、初日ストックホルムのホテルで、初めてスウェーデン・クローナでマクドナルドのコーラを買うも、12クローナを20クローナとヒアリングミスという始末でした。

レクサンドの人たち

二日目の農業研修、400年この地で営農しているイモ小麦農家のオールハンスさんは、背の高い人で2m位ありそうな人でした。奥さんとその妹さん3人で長い時間対応してくれましたが天気が良いので、少し気の毒と思い、「忙しいでしょうから社長だけでもいいですよ」と言いましたが、「大丈夫部気にしなくてもいい」とおらかな人柄でした。ただ次に行った麦畑に来た彼の若い友人が、半そでです〜といたのは、驚きました。当日は大変寒く自分はジャンパーを着ていたのです。バイキングと呼ばれていたころのスウェーデン人は、皆2m位身長があつたそうです。170cmの自分は、トイレでつま先立ちでした、また寒さに強いのは、当たり前か？と感じました。

200年の歴史をもつ、酪農業のエリクソン牧場では、20歳くらいの、かわいい娘さんがアイスクリームを作っていて、試食をさせてくれました。その後、お兄さんと本人が牛舎の中で、経営について説明をしてくれました。ミルク・パーラーは最新のものでしたが、牛舎や農機具は新しいものはありません。むしろ北海道の酪農家の方が施設はりっぱではないかと感じました。ちなみに、お兄さんにはガールフレンドがいるそうですが、娘さんにはボーイフレンドはいないそうです。ここに農家の嫁問題はない？

その後の農業高校は立派な施設ばかりでしたが、そこに来たCOOPのバックルンド会長は、ただのおじいちゃんにしか見えない人でしたが、組合を彼の代で何倍もの事業規模にし、地域の地産地消と組合員の連帯・協調を完全に成し遂げた偉大なリーダーでした。もう少しお話を聞きたかったのですが、時間が足りませんでした。残念でした。

ただ後から聞くと、スウェーデンの人々は伝統的に干渉は嫌うけれど、目標・目的があると、しっかり協力しあう民族性があるようです。

その夜は、冬の格闘技アイスホッケーの観戦でした。寒いので60クローナ程でブルーのレクサンドチームのトレーナーを買いましたが、喫煙所で赤いユニホームの相手チーム・サポーター2人と会いました。通訳の森ステファンから、サポーターが揉めることもあると聞いていたので、すこしばかりでしたが、「日本からきた」と言うと、ニヤツとして去って行き、ほっとしました。190cm・100kgは軽く超えていて坊主頭。試合中の彼の応援は、本当にレクサンドチー

ムにつかみかからんほどの大迫力でした。

食べ物

初日の夕食は、舌ビラメのソテー？美味しかったが、次の日からは、サーモンとイモの連続。そして、味付けも日に日に塩辛くなった。最終日のストックホルムのレストランのパンは本当にしょっぱく、少々閉口しました。後日聞くところ、スウェーデン料理は味付けが濃いそうです。肉は、ホテルの朝食でハムやソーセージがあり、これは普通に美味しい物でした。ただし、レクサンドで食べたイモやパンは地場産の物でした。

9月8日、桜の記念植樹や記念式典でした。昼のすこし前、町長さんに誘われて入った日本人会の皆さんが居た家で、酪農家のお母さんが牛の初乳で作ったプリンのような物を食べさせてくれました。自分が子供の頃から食べていた牛乳豆腐と同じ発想で、農家はどこの国も自分が作った生産物を無駄にしない思いを持っていると感じました。

自然・環境

レクサンドは森林の中に農地があり、木材を使ったバイオマスで市全体を地域暖房しています。そして、スウェーデンハウスで使われているレンガ色の塗料は近くの鉱山で昔から取れていたそうで、スウェーデンハウスはまさしくスウェーデンの自然が作った家だとわかりました。

3日目、自然博物館の様な所での説明で、シリアン湖が隕石の落下により出来た事を知り、おどろきました。また、この周辺はヘラ鹿が生息しているが、日本のように農作物の被害は無く、何故なら、狩猟する人が沢山いるからと言うことでした。スポーツハンティングというものがあるいは文化の差か？たしかに急峻な山がないので、鹿を追い易いと思いました。当別では、頭を悩ましているのに……。

森と湖にかこまれたスウェーデンそしてレクサンドのみなさんへ

森を大切にそして自然の恵みを最大に利活用、街にはゲームセンターもパチンコ屋さんも無い。その代わりに、大きくきれいなキャンプ場、食べ物の見た目は良くないが、地場産がほとんどで、輸入と思われるものは、わずか。必然か意志か？

後で、わざわざ杖をつけて畑まで来てくれた、やさしく歳を重ねた、イモ農家オールハンスさんのおじちゃん、そしてケーキパーティーで出会った、80歳を超えた仲の良い元学校の先生御夫婦。自分は、今回の訪問で多くのあるべき姿と目指すところを得る事が出来ました。レクサンドの皆さん本当にありがとうございました。

あ！！それから、帰って来てからすぐ、買って1カ月もたたない自分のiPhoneが壊れました。スウェーデンに合わなかったのか？本当の所は、現代のテクノロジーについていけない自分のせいだと思います。交換に1週間かかり、大変でした。

レクサンドを訪問して

訪問団員 辻野 浩

2012年9月5日から12日までレクサンド市をメインにスウェーデン王国を訪問しました。レクサンド市に到着し、バスを市庁舎近くに止め約40名が200m程歩いて市庁舎の中に入りましたが、多数の市民の方々に迎えて頂きました。この時は姉妹交流の伝統を感じました。その中には懐かしい方の顔も。10数年前にお会いした時に子供だった子に赤ちゃんがいたりして時が経ったことを思いました。

さて、われわれが泊まったのは美しいシリアン湖を望むダレカリアホテル。いつか自分の子供たちにこの景色を見せたいと思います。この地方はシリアン湖を中心に伝統文化と古き良きスウェーデンをかたくなに守っている地方と聞きました。

さて、今回の視察先の中で一番印象に残ったのは起業家を育成する専門学校でした。ここは例えて言うとベンチャー起業家を養成する市立専門学校で2000年の開校です。生徒数は120名でスウェーデン各地から来ます。特に先生と呼ばれる常勤職員はいなく、カリキュラム作成や研修受け入れ企業との調整を行うコーディネーターがいます。学生達はそれぞれ自分で自分なりの課題を打ち立て、それに向かって自分で学習します。この学校は24時間開いている・といわれています。生徒たちが好きな時間に勉強したり、議論や打ち合わせができます。3人の生徒と話しましたが、極めて目的意識が明確でモチベーションが高く、この学校の設立趣旨がそっくりそのまま生徒達に伝わっている感じです。

段々、レクサンド市の戦略の一つが見えて来ました。つまり、若者の育成です。レクサンド高校、芸術家を育成する国民学校、そしてこの起業家育成専門学校を結びつけ見えてくるものは若者育成戦略です。スウェーデンと言うと私たちは福祉ばかりに目を取られがちですが、福祉の分野で日本よりかなり進んでいる事は勿論の事、レクサンド市は20年前くらいからその次の課題を若者育成に定めて力を注いで来たのです。当別はすごい町と姉妹都市交流をしているもんだと改めてというか、初めて認識しました。

レクサンドではいろいろな体験をしたのですが、ここであえて姉妹交流がなぜ25年続いたのかを私なりに考えてみました。レクサンド市議会のニーゴード議長は交流の場面で、必ず日本語で「がんばれ！」と大きな声で言いますが、時々、絶妙なタイミングで「わかりました！」とか言うものですから、私達を含めてその場にいる人達を大いに笑わせてくれます。いつも冗談めいているそんなニー・ゴードさんですが、実はこの人こそ当別とレクサンドの姉妹都市交流のキーマンの1人なんだそうです。

彼はレクサンドと当別との姉妹交流に非常に力を入れていて、レクサンド側の方々を強力に引っ張っていると聞きました。姉妹交流が続いた理由の一つは今まで当別町とレクサンド市側の双方に交流を推進する交流積極派の方々がいたということではないかと思えます。

もう一つ。これは現実的に一番大きな理由だと思えますが、トーモクヒュースの存在です。

今回の一連の記念行事の実施に関しては登窯の製作、記念樹である桜の輸送、地元家具屋さんの日本への進出支援など、姉妹都市交流に対して陰日向でいろんな支援をされていてその貢献がレクサンド側から高く評価されていることがわかりました。経済面の結びつきは紛れもなく姉妹交流が続いた理由だと思いますが、今後は日本やスウェーデンで経済が急成長することはあまり考えられませんから、25年間に培われた市民交流がその力を発揮する時代が訪れると思います。「小さくて多様なビジネス交流」、「草の根市民交流」、「次世代育成」等が次の姉妹交流のテーマになるのではないのでしょうか？

この他、スウェーデンに行ってみて考えさせられたことは女性の社会進出でした。レクサンド市長のウルリカさんを始め、ダーラナ州知事、隣町の市長さん、高校の校長先生などの要職を女性が勤めていました。この点は、日本も見習うべきと思いました。

逆に日本の良いところ。それは日本文化の人気です。「寿司」「俳句」「盆栽」「アニメ」「ポップス」「柔道」「お茶」「着物」「村上春樹小説」などが目立ち、日本文化がある意味ブームになっているのではないかと思います。「シンプルさ」や「かわいさ」、「ヘルシーさ」などの面に於いて日本文化が高く評価されている気がしました。しかし裏を返せば「相撲」じゃないですが、うかうかすると日本人がその良さを忘れて、外国でその文化が新しい形で花開くのではないかと思います。「日本人、がんばらなきゃ！」といったところです。

今回、ストックホルムで在スウェーデン日本大使公邸で晚餐会に招かれ、その場で、若い書記官の方々とお話しできたり、執事をしている海外の方ともお話しでき、公式訪問でなければできない貴重な体験ができました。大使は当別とレクサンドとの交流を高く評価していましたが、今、私たちは当別に戻って早速、いろいろと振り返りをし、次に向かって考え始めています。

当別のような小さな町で大人たちが世界を考え、できることから行動していくことは次世代の子供たちの指標になると思います。気負うことはないのですが、今回、渡航させていだいた責任の幾ばくかを徐々に社会還元できたら良いなと思っています。

このような機会を与えて頂き、大変ありがとうございました！

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加して

訪問団員 杉野秀雄

2007年の6月に、当別町とレクサンド市の姉妹都市提携20周年記念事業として、レクサンド市から74名の訪問団をお迎えして5年、この度は、25周年記念事業として当別町から38名の訪問団を派遣することになり、私は「当別町・レクサンド市25周年記念訪問団」の一員として参加致しました。私は初めてのスウェーデン、初めてのレクサンドの訪問について、私の雑感をご報告させていただきます。

初日 9月5日

9月5日訪問団の出発の日を迎えました。出発に先立って結団式が当別町の総合体育館の前庭で午前5時から行われる予定です。朝3時に起きて準備し、家を出ました。

結団式を行う当別町総合体育館の前には、まだ朝の暗いうちだと云うのに多くの町民の方がお見送りに来ておりました。訪問団を代表して泉亭団長のご挨拶があり、お見送りの人を代表して当別・レクサンド都市交流協会の佐藤副会長の激励の言葉を受けて訪問団は出発です。

これだけ多くの町民の皆様のお見送りを受けて、この訪問団は当別町とレクサンド市の交流の大きな責任を負っていることを改めてひしひしと感じる結団式、お見送りでした。

新千歳空港を7時50分に出発し、成田、コペンハーゲンを経てストックホルムのアーランダ空港に到着したのは現地時間で午後7時過ぎ、日本時間では6日の午前2時を過ぎておりました。

長旅の後で団員の皆様はお疲れかと思いましたが、皆様お元気で、今日の宿泊先のアーランダ空港に隣接したラディソン・ブル・スカイシティホテルでの夕食に出た、海老マヨのようなエビ料理、舌ヒラメのムニエル、芋の料理をパクパクと美味しく頂き、特に舌ヒラメのムニエルは大変美味しかったです。

2日目 9月6日

6日の出発の朝、駐瑞日本大使の渡邊大使が公務ご多忙の中、早朝にも関わりませず、お出下さり、歓迎の言葉頂きました。「当別町とレクサンド市の姉妹都市提携は25年もの長きに亘って濃密な交流を続けており、特に町民、市民レベルの交流がしっかりと行われているのは、他の姉妹都市提携をしている団体には見られない稀有な実態であり、その交流を高く評価すると共に、今後もより一層両都市の交流を深められることを期待する。」とのお言葉を頂き、訪問団として一層その責任を感じたところです。

アーランダ空港のホテルからレクサンド市へは、バスで移動です。沿道は緑がいっぱい、何か北海道の道路を走っているのかなと勘違いするような景色でした。スウェーデンの沿道や山の樹木が松(パイン)やシラカバで北海道と似ているため、景色も似て見えるのではないかと思いました。また、走っている間、信号を見ることがほとんどありませんでした。交差点を見るとロータリー交差点になっているようで、優先でない車は優先車両が通り過ぎるまで、キチンと一時停止しており、ロータリー交差点に馴染みのない私は少しハラハラしながら交差点を見ておりましたが、信号のない交差点を何の問題もなく通行しているのを見て、少し感心致しました。

また、途中にサーラという町がありましたが、この町がスウェーデンヒルズの中に唯一あったお店「SALA」(今はパスタの店「Ari」)の名前の町なのかと、何となく懐かしく思いながら通り過ぎました。

ダーラナ地方に入ると、緑の景色の中に、スウェーデンの住宅が点在して見えます。赤い壁に白い窓枠、オレンジの屋根瓦のスウェーデンの住宅は、スウェーデンヒルズに帰ってきたのかと見間違ふほどその風景はヒルズに似ておりました。世界で一番大きなダーラhest(ダーラナの馬)がある人口2万人程の工業の町アーヴェスタで昼食です。アーヴェスタのダーラhestは想像以上に大きく、下から見上げると天を突くように青空の中に聳え立っておりました。(アーヴェスタのダーラhestは1989年に設置されたコンクリート製のhestで、高さ13m、重量67トン。)

アーランダ空港のホテルを出てから5時間、いよいよレクサンドの市内に入ります。橋のたもとには、日の丸の旗を持った人々が訪問団のバスを出迎えておりました。どの人も満面に笑みを浮かべて、日の丸を振り、手を挙げて私たちを歓迎してくれます。ああ、レクサンドに着いたのだとの思いと、レクサンドの人々の優しい笑顔と、身体全体から歓迎の気持ちが満ち溢れた出迎いで、初めてのレクサンド市訪問であるのに何故か当別に帰ってきたようなホッとした気持ちになりました。

市庁舎の前には、ウルリカ・リリエベリ市長、ラッセ・ニーゴード議長をはじめ前市長のポー・ペッテルソンさんやマリア・パルク校長、レーナ・リエンさん等沢山の人が満面の笑みで、日の丸の旗を振って出迎えてくれました。皆の温かく優しい笑顔は忘れられません。

市庁舎の議場で訪問団の歓迎セレモニーが、ニーゴード議長の司会で進められ、リリエベリ市長の歓迎のご挨拶、泉亭町長の挨拶が和やかな雰囲気の中交わされ、通訳はスウェーデンハウスの森ステファン氏が行いました。

歓迎セレモニーの後は一旦各自の宿泊場所に入り、それから歓迎夕食会の会場であるレクサンド高校へ向かいました。レクサンド高校では、調理やホテル科(?)の生徒たちが、料理を作り、給仕をしてくれました。構内のレストランも町場のレストランと変わらない素晴らしいもので、料理も、生徒の給仕もプロのように素晴らしいものでした。また、食事中には、生徒達がバンド演奏も披露してくれ、食事を十分に楽しむことができました。レクサンド高校生の手作りによる、それは素晴らしい思い出に残る夕食会でした。

3日目 9月7日

3日目の朝を迎えました。レクサンドの秋空は抜けるような青さで、今日も私たちを歓迎しております。今日はグループ研修2つと公式行事の「陶芸穴窯の開窯式」があります。私のグループ研修は「学校研修」と「ワールド・カフェ」への参加です。イエルデ小学校では野外教育を見学させて頂きました。(詳細は班報告)そこでは、子供たちが自然の中で遊びながら自然の仕組みや自然を大事にすることの大切さを学んでいること、また、それに対して高校生のお兄ちゃん達がサポートしているのを見て、私たちの子供のころの子供社会を見るような気が致しました。また、別のグループは野原で炊事をしており、4、5人のグループで料理を作っておりました。私たちも彼らの作った食事をご馳走になりました。

11時半からレクサンド成人学校で日本の陶芸の穴窯の開窯式が行われ、説明してくれたのは、昨年、スウェーデン交流センターで行った「スローライフ・イン・ダーラナ」の講演で来道したレクサンド成人学校の陶芸の先生マッツ・スベンソン氏で、再会を喜び合いました。この開窯式では、団員の辻野道子さんがお茶のお点前を披露致しました。野外の斜面で椅子に座ってお点前で大変難しかったであろうと思いますが、大変落ち着いたお点前で、茶道の持つ静謐さがレクサンドの方にも味わって頂けたのではないかと思います。半東役として団員の坂本さん、島田さんとハンナさんがお手伝いしておりました。ハンナさんは、今年の3月にレクサンド高校と当別高校の交換留学の企画で当別に来た生徒で、久しぶりに元気な顔を見て嬉しく思いました。

午後からは、私はレクサンド高校で催された「ワールド・カフェ」に参加致しました。東海大学の川崎教授や学生さんが進行役を務め、訪問団員とレクサンドの高校生の「ワールド・カフェ」は言葉が十分通じない面はありましたが、楽しい話し合いができたと思います。レクサンド高校生の中に、この10月にスウェーデン交流センターに研修に来るレクサンド高校の生徒2名(リネア・ホーグベリストロム、マティルダ・ロス・テンの女子2名)の内の一人マティルダがいました。なかなかシャイな子でしたが、10月の来道が楽しみです。

夕食は宿泊先のダレカリア・ホテルでフォークダンスショーを披露してくれるダンスのメンバーやレクサンド高校のマリア・パルク校長とご一緒しました。夕食の後、レストランの隣のホールでフォークダンスショーの観賞です。観賞だけかと思っていたら、皆踊りの輪の中に引き込まれ、皆でフォークダンスを踊りました。フォークダンスのメンバーは、男性5名、女性7名の計12名です。楽師はアコーディオン、バイオリンの男性2名で、皆さんの年齢は50歳～70歳かと思いますが、大変親切で、楽しいメンバーでした。翌日の25周年記念式典の時にダンスパフォーマンスを披露してくれたのもこのメンバーでした。

4日目 9月8日

今日も天気は快晴です。今日の予定は、桜の記念植樹、姉妹都市提携25周年記念式典、記念パレード、記念夕食会と盛沢山であり、今回訪問のメインの日であります。

レクサンド教会の敷地に25周年を記念して、25本の桜の木が当別町より寄贈され、その記念植樹がレクサンドのリリエベリィ市長、ニーゴード議長、ラウトマン牧師、当別町の泉亭町長、高谷議長、加藤在札幌名誉領事の6人で行われました。介添えはレクサンドの若者が行いましたが、4人のうち3人が今年の3月に当別に研修にきたハンナ、アルフレッド、フリーダの3人でしたので、レクサンド市の気遣いを大変うれしく思いました。日本庭園では、スウェーデン在住の日本人女性たちのグループ「さくら」による歌の披露、着物ショーが行われました。

会場を船着場のシリアン湖特設会場に移して、姉妹都市提携25周年記念式典が執り行われました。記念式典が始まるので椅子に着席した時、今まで晴れていた空から突然雨がパラパラと降ってきました。今まであんなによい天気だったのにと思っていると、レクサンドの世話役の方がさっと雨具を配りだしました。開いてみるとポンチョが入っておりました。ああ、レクサンドの方は、雨が降った場合の用意もきちんと準備して頂いていたのかと感謝の気持ちで一杯です。泉亭町長はご挨拶の中で、この雨を「この時のために、天は感激の涙を流した」と表現されましたが、本当に感激の涙だったのか、この雨は直ぐに止み、式典は無事に進行致しました。

式典の後はレクサンド教会に移動し、教会でのコンサートです。教会の中の高い2階席にはパイプオルガンがあり、その前に聖歌隊の場所がありました。パイプオルガンの演奏や聖歌隊の合唱は素晴らしいものでした。また、演奏に合わせて礼拝堂の中では、さまざまな民族衣装を着た方が入場して来ました。これは人生に中のイベントにおける民族衣装で、生まれてから死ぬまでのことを紹介しているとのこと。神父さんのマントや結婚式での民族衣装を紹介してくれましたが、分るのは結婚式の衣装ぐらいでした。しかし、レクサンドの方々が私たちに色々な物をお見せしたいという気持ちが伝わってくるパフォーマンスでした。

コンサートの後は、教会から公園まで「25周年記念パレード」です。訪問団員は当別町の法被を着て、片手に提灯、もう一方の手にはスウェーデンの旗を持って行進です。私たちが行進していると、道を歩いている市民の方々が手を振ってくれます。訪問団員は手に持った提灯や旗をレクサンドの方にプレゼントしたり、25周年の記念バッチをプレゼントしながら、あちらでも、こちらでも市民交流の実践です。レクサンドの皆さんはみんな優しい笑顔で迎えてくれました。

パレード終了後は、モスコージェンホテルで「25周年記念夕食会」です。ニーゴード議長の司会で賑やかに夕食会が進められ、日本との交流を考えているレクサンド市の近くのガグネフの市長さんや、若い世代を代表してレクサンドブレットの社長さん、レクサンドのアイスホッケーの監督のご挨拶がありました。ニーゴード議長からは、この両市の交流は、今後、しっかりと若い世代に引き継がれていかなければならないとお話がありました。あちらでも、こちらでも酒を酌み交わし、楽しそうな話の輪ができております。賑やかで、楽しい夕食会はあっという間に過ぎ、ホテルに戻ってきた時は11時を過ぎておりました。

5日目 9月9日

さあ、今日はレクサンドでの最後の日です。今日もよい天気です。レクサンドでは、記念式典の時、ほんの少し「感激の雨」が降りましたが、あとは良い天気が続きました。本当に天も両都市の交流を喜んで天気にしてくれたことと思います。今日の午前中はグループ行動、午後は「あずまや贈呈式」、船上レストランでの「お別れパーティ」でストックホルムへ向かいます。

私はグループ行動で「シリアン湖観光施策研修」に参加致しました。手染めテキスタイル工房のヨブスはお休みの日であったようですが、責任者の奥様であるオーサ・ヨブスさんが工房についての説明して下さいました。30mの染め機が2台あり、60mの布を型紙(今はシルクスクリーン)によって1色ずつ染めていきます。10色の染をするためには、10枚の型紙と染の工程が必要であり、色数が多くなればなるほど工程が多くなるとの説明でした。また、型紙を取り付けるには正確に取り付けることが必要であり、多色になればなるほど、その少しの狂いが作品の良し悪しに影響するとの説明を受けました。また、ヨブスの評価が高いのはその染色技術とデザイン性にあり、団員の皆さんは店内のヨブスの作品に熱心に見ておりました。私も、ヨブスの小作品を少し購入致しました。

シリアンスネスの自然博物館では展示されているオオカミや熊の剥製を見ながら、ダーラナの動物や植物の説明を受けました。息を切らしながら登った博物館の展望台から見たシリアン湖の景色は、息をのむような素晴らしいものでした。

午後は、25周年を記念して当別町がレクサンド市にパークゴルフ場の近くに日本の「東屋」を贈呈いたしましたので、その贈呈式です。「東屋」は少し小高い所に立っており、散歩に来た方や、パークゴルフをした後に、チョット休憩するにはとても良い所です。

贈呈式を終え、いよいよレクサンド市での最後、船上レストランでの「お別れパーティ」です。記念式典を行った船着場から「グスタス・バーサⅡ世号」に乗って、シリアン湖を遊覧しながらお別れパーティーです。船上から見た、シリアン湖の中腹に建つスウェーデンの住宅の中で、ひときわ大きく美しく見えたのは、私たちがレクサンドにいる間宿泊した「ダレカリア・ホテル」でした。さあ、お別れの時です。船着き場には多くのレクサンドの皆さんがお集まりです。あちらこちらで、団員とレクサンドの方々がお別れをしています。3泊4日のレクサンド滞在でしたが、お互いに別れがたく、またの再会を約してお別れをしてきました。

特に印象に残っているのは、別れがとても悲しそうで、目から大粒の涙を流しながらお別れをしているご婦人がおりました。バスが出る時もまだ、目にハンカチを当てながら、手を振ってお見送りをしておりました。あの方はどなたなのでしょうと尋ねたら、「たぶん市長のウルリカ・カリエベリイさんのお母さんではないですか。あの方は公職にお付きになっている時、このレクサンド市と当別町の交流に尽力された方で、今回はホストファミリーも引き受けていたと思いますよ・・・」とのことでした。

最後に、ウルリカさんのお母さんの涙に、都市間交流はこのように一人ひとりの熱い思いと活動が、二人、三人・・・と積み重なって今日があることをしみじみと感じさせられました。都市

間交流、国際交流をしっかりと進めていくことが、訪問団員としての責任である感を強くしてレクサンドを後にしました。

6日目 9月10日

スウェーデン最後の日は、ストックホルムです。午前中は、学校行事班はテッパン幼稚園の視察、午後は、ストックホルム市庁舎、王宮、ノーベル博物館の見学、そして最後に日本大使館公邸で渡邊日本大使のお取り計らいによるレセプションです。

テッパン幼稚園はストックホルムの街中のビルにある幼稚園で、ビルの前に人工芝を敷いた小さな庭があり、園児たちはそこで遊んでおりました。日本の幼稚園の庭ではお馴染みのブランコ、滑り台やジャングルジム等のものは一切なく、何もない所で園児たちが遊んでいたのが、印象的でした。ちなみに「テッパン」とは「小さな庭」の意味とのこと。幼稚園については、まだ、お若い女性の校長先生が説明して下さいました。スウェーデンは小・中・高6・3・3制で日本と同じように見えますが、小中は一貫であることが大きく違います。また、幼稚園は1歳～5歳まで、6歳の園児は小学校に入るための予備校のようなもので、小学校へ入る準備をするそうです。校長先生のお話の中で特に印象に残っているのは、1歳の園児であっても自分でものを決めたり、選択することを徹底しているとのこと、言葉がわからなくても、絵や身振りで十分できるとのことでした。他の事でも個や自主性を尊重するということが徹底しており、教育者としてしっかりした哲学のもとに幼稚園を経営していることが印象的でした。

午後は、ノーベル賞の晩餐会が開かれる市庁舎やノーベル博物館、王宮を見学し、近くのお土産の店でお土産を買って、在瑞日本大使館に向かいました。日本大使館が在るのは、アメリカでいえばハリウッドの様な高級住宅街の中だそうですが、他の国に見られるような高い塀もなく、非常にフラットな感じでした。渡邊大使以下、書記官の方々総出で私たちを歓待して下さいました。公邸で大使主催のパーティに呼ばれることは、そうあることではありませんので、大変感激致しました。スウェーデンでの素晴らしい思い出になりました。

7日目 9月11日

今日は、日本へ帰る日です。6泊8日の日程は、長いようで大変短いもので、終わってみれば「あっ」という間に過ぎた気が致します。8時30分にホテルを出発です。12時20分にアランダ空港を出発して13時30分にコペンハーゲンに到着です。コペンハーゲンからは3時50分発の成田行きの飛行機になりますので、コペンハーゲンで2時間程時間の余裕がありました。TAX FREEで買い物をしたり、飲み物、軽食を摂っているうちに出発の時間です。コペンハーゲンから成田までは約10時間50分、成田への到着は日本時間で12日の午前9時35分の予定です。成田からは羽田へ移動して、午後1時15分発新千歳行きに乗り、千歳には2時45分着の予定です。千歳に着くまで15時間の長旅です。

長旅を終えて、千歳空港に降り立った時、訪問団の皆さんはお疲れであったと思いますが、皆さん大変元気そうでした。故郷に帰ってきたという安心感もあると思いますが、訪問団の団員一人一人が、当別・レクサンドの都市交流の訪問団として、レクサンドとの交流を精一杯やってきたという満足感、また、温かく優しく迎えてくれたレクサンドの皆様の思いを受け、両都市の交流をしっかりとやっていくとの熱い思いが疲れを忘れさせているのではないかと思います。

日本は知らなくても北海道の当別は知っているとのレクサンドの皆さん、この両都市の交流は若い世代にしっかりと引き継いでいかなければならないと語ったニーゴード議長、私たち訪問団はこの事を若い世代に伝え、次の世代ではもっと交流が活発な物になっていくように努力していくと共に、この交流がお互いの都市にとって、より価値のあるものに育てていく努力をしていかなければならないとの意を強くして報告を終わります。



当別→レクサンド渡航レポート

訪問団員 伊藤伸哉

■概要■

2012年9月5日～14日、当別町レクサンド渡航団に同行、通訳等のお手伝いをさせていただいた。そのメモランダムをここにまとめる。私は当別町在住間もなく、状況を十分に把握しきれていない描写もあると思うが、町の将来を思っでの記述と、斟酌いただければ幸いである。

■旅行記録■



旅行全体の記録については、Facebook ページ「Tobetsu & Leksand-25 Years of Friendship Jubilee: An Owl's Outlook」にまとめておいた。当別町のイメージキャラクターであるふくろう（愛称を、当別のT、ふくろうのowlを合わせて、T-owl（タウル）くんとした）が旅をするという想定で、T-owl くん視点の旅日記というかたちをとっている。レクサンドはもちろん、世界中の人々が気軽に見られるよう、すべて英文にした。旅程等についてはこちらをご覧ください。

(<http://www.facebook.com/#!/pages/Tobetsu-Leksand-25-Years-of-Friendship-Jubilee-An-Owls-Outlook/139712566172638>)

■5年後にむけて■ 30周年に向けて、5年後のための企画はもちろん、5年の間に何ができるかを考え、実践することが大切だと考える。以下はそのような趣旨に基づくメモである。

■帰国後のネットワークづくり■ 出会ったほとんどの人が、メールはもちろん、Facebook、Skype を活用しており、今回の訪問を、ただの訪問だけで終わらせることのないよう、帰国後はそれらを使ったネットワークを充実するように働きかけている。



■教育交流■

Lars Nyberg 教育長がとても熱心に対応くださっている。Leksand と当別の学校を定期的に Skype で結ぶプランを思案中（Global Factor が日常にある教育環境づくり）。Ecology 教育やまちづくりの市民参加については、千葉商科大学教授、鮎川ゆりか先生（近著「e-コンパクトシティが地球を救うー2050年に向けた社会デザイン」（日本評論社）とも、ぜひタグを組んで進めていきたい。また社会教育については、Anki Gullback (leksands folkhögskola) は、私の運営している青山 T/G セミナーにも興味をもってください、本校も含め日本の教育環境の視察を企画中。

■企業家交流■ Leksand 訪問に際して、企業家の会合はあったものの、形式的な顔合わせにとどまったように思えた。Jan Jonssen (Leksands Stolen)、Louise Modigs (Chamber of Commerce) など、それぞれの思惑があったようで、それは今後の交流に託すこともできるものの、せっかくの face-to-face の機会に、例えば各自のブースに分かれ、具体的なビジネスの可能性についてもっと突っ込んだ話ができると、良かったかも知れない。私自身、今回は通訳の役割に徹することで精いっぱいだったが、インテリアやインタ

ネットを使った海外の食材販売といったビジネスにも関わっているので、本来ならばあの場でもっと直接話ができると、残念に思っている。Peter JoonなどはFacebookを使ったマーケティングでも奮闘中なので、今後の展開に期待したい。

■**起業家交流**■ 僅かな時間であったが、アントレナー学校における、Anna Franzon、川崎先生のお話を伺うことができ、起業家層のポテンシャルの高さを感じた。当別の起業家層との交流およびネットワークづくりに協力したい。ムーブメントを起こすには、わかりやすいターゲットが有効で、例えば「当別、Leksandからそれぞれ、30周年までにアンビシャス市場IPO企業を出す」といったターゲットはどうだろうか。そういう切り口を通して、当別が起業家天国として知られるようにしていき、結果的にまちの活性化につながればと考える。短期的には、直近では、TEDxSapporo (<http://tedxsapporo.com/en/>)にて、アントレ



ナーシップをテーマとする会を川崎先生と企画中なので、その際に当別の起業家とLeksandの起業家をustreamなどで結ぶことなど、まずは試みたいと思っている。

■**カルチャーナイトと市民同士の交流**■

Leksand 市民総出のカルチャーナイト、市街のコーデイネーションは、さりげなく、しかし隅々まで気配りされ、これは本当にオールナイト覚悟で賞味すべきものだったと思う。式典もちろん大切である一方、市街をのんびりと回遊したり、店舗のデザインを見たり、料理店にふらっと立ち寄って、といった草の根の行動こそが、幅広くかつ奥深い交流を生み出すと考える。次回はそういった余裕をぜひ！

■**姉妹都市の今後**■ Lena が別れ際にふと言った「ウガンダとの交流も盛んなんだけど。。。。」という言葉が耳に残った。Leksandは姉妹都市提携や交流というツールを使って、どんどんプレゼンスをあげようとしている息吹とともに、当別町はLeksandとの間で、そのツールをどう生かしたいのだろう、といった余韻を感じた。せっかくのこのツールのコンセプトをはっきりさせ、行動に移していくことが大切だと思う。

■**旅行支援**■ さまざまな形態の海外旅行を経験してきた目から見ると、今回の旅行社のアテンドは満足のいくものではなかった。団体をスムーズに誘導したり、ニーズの先を見越して手配をするなど、旅行社として最も基本的な作業さえも覚束なく、団員たちの機知や協力でその場を切り抜けるという場面が数々あった。一案として、今後の旅行は、アントレプレナーシップ支援も兼ねて、当別町内の新進気鋭の旅行社を採用するというのはどうか。また、もっとひんどをたかめた頻繁に旅行企画があってもいいと思う。

■**Intelligence (情報掌握)**■ 役場、商工会、交流協会、町民各位、それぞれのご尽力はとても素晴らしいものだった。あえて言うならば、将来、横の連携とそれをまとめる系統がもう少しはっきりしているといいかんと思った。(と、後から言うのは簡単で。。。) なにはともあれ、お疲れ様でした。そしてありがとうございました！



レクサンド訪問団に参加して

訪問団員 宮 永 雅 己

この度のレクサンド公式訪問は、私にとって 1990 年以來二度目となりました。22 年前とは街並みもすっかり変わり、その賑わいの多さと活気に驚かされました。ただ、市庁舎と教会だけは、その佇まいを変えることなく風情を残しておりました。

1987 年、私の父、宮永龍美が当別・レクサンド都市交流協会の初代会長として、当時の配野定平町長夫妻と共に調印式に出席する機会を頂いた折から、お世話頂いていた当別町国際交流連絡員の八幡敬子ラーションさんがこの 25 周年を契機として一区切りをつけるというお話をお聞きして、残念に思う気持ちと感謝の気持ちが交錯して複雑な思いがしましたが、本当にご苦労様でした。そして有難う御座いました。

今回の訪問のグループ別研修での私の担当は、企業視察と企業家懇談でした。メンバーは、私と泉亭町長・山田 明・辻野 浩・安田雅人・事務局から高田訓之・茂又規彰そして前駐日スウェーデン大使館参事官レイニウスご夫妻の 9 名でした。

まずはトーモクヒュース株式会社を訪問し、岡崎社長・菅原取締役(開発・品質担当)より会社概要の説明を受け、その後工場の生産ラインを見学させて頂きました。スウェーデンハウス社向けの住宅部材生産を年間2,500棟、窓・ドアの生産を年間50,000枚行っており、すべて日本向けに輸出することから、日本の品質基準に合わせ厳しいチェック体制の下、オートメーションラインでの生産が行われておりました。

1991 年、清算会社の資産を買収し人員の一部を継承しての船出から、2011 年創業 20 周年の記念すべき年を迎えられました。

次に訪れたのは、レクサンド経営者協会会長を務めるペーテル・ヨーン氏が三代目の社長であるレクサンドパン株式会社でした。豊富で良質な水と最高品質の材料によるクネツケパンを練り上げるところから製品化までフルオートメーションの生産体制を整備し、スウェーデンでのシェアは 60%を誇る優良企業とのことでした。

午後からの企業家との懇談会は、場所をアイスホッケー場の会議室に移して、レクサンド側からはペーテル・ヨーン経営者協会会長の呼びかけにより、男女合わせて 9 名ほどの経営者の方が集まりました。既に日本に輸出をしている製材メーカーの方、これから日本との取引を考えようとしている家具製造の方、シルクスクリーンなどインテリア関連の方など、多種多様な方々でした。

日本に30,000棟あると言われているスウェーデンハウスをマーケットとして事業展開を出来ないものかと考えているようでした。今後、しっかりとした情報交換をすることとなりまし

た。

今回の訪問で感じたことは、レクサンド側が次なる 35 週年・50 周年を見据え、若い世代への受け継ぎを如何にすべきかを考えていることでした。永く姉妹提携を維持して行くためには、大切なことだと思います。これを機会に次に迎える当別での 30 周年を構築していかなければと考えました。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団参加報告

訪問団員 山田 智

出発の朝、我々訪問団のために催された壮行会には、早朝5時にもかかわらず、大勢の皆さんが見送りに来て下さっていた。沢山の激励の声を受けながら、感謝の気持ちを胸に当別町を後にした。

新千歳空港から成田、そしてデンマークのコペンハーゲンを経由する長距離フライトの末、ストックホルムに到着した。日本との時差はマイナス7時間ということで、長い、長い一日であった。

二日目、ストックホルムからレクサンドへ移動し、レクサンド市庁舎で開かれる歓迎セレモニーに出席。セレモニーでは、当別町140年記念の際に来町された方達との再会を果たすことができた。異国の地で見知った顔を見つけ、懐かしさと安堵感が相半ばする。我々を出迎える沿道の方達の熱烈とも言える歓迎振りにも深い感激を覚える。

夕食会を兼ねてのウェルカムパーティーは、レクサンド高校で開かれた。パーティーのアトラクションとして催された楽器の演奏はもちろんのこと、我々に饗された料理、食事のサーブに至る全てのもてなしが高校生の手によるものと聞き感心させられた。

三日目、4つの部門別の研修グループに分かれ、それぞれの研修先へ向かう。私は、北いしかり農協川村専務理事を班長とする農業交流班の一員として市内農家を訪問。こちらのお宅は、一族で400年余りに亘り代々農業を生業としてきたそうで、所有する農地も約140haとケタ違いの広さである。視察先の選定に当たり、優秀な農家をとの先方の気配りがあったのだろう。

ちょうどこの時期、麦は収穫期を迎えていた。聞くと、収穫作業には40～45日間もの期間を要するとのこと。その間、降雨によって穂発芽する心配はないのかと尋ねてみたところ『（穂発芽による品質の低下で）食用から飼料へ転用するといっても、収入減は2割程度だ』との答えが返ってきた。通訳を介しての問答のためニュアンスに違いはあろうが、これには驚きを隠せなかった。広大な農地のため、収穫には相当数の時間が掛かるのは致し方ないのかもしれないものの、我々の常識に当てはめると“2割もの”減収だ。

しかし、こちらでは“ほんの2割”くらいと捉えているらしく、国民性の違いなのか、実に大らかなものだと感じた。

研修ではさらにもう一軒、酪農家を訪問した。肉牛生産も並行して営んでいるが、経営の柱である生産者乳価は伸び悩んでいるそうで、娘さん自らアイスクリームの販売を行い家計の助けとしていた。

いずれの農家の方達も、個人で山林を何百町歩も所有しており、その管理は各々が適正に行わなければならないいきまりがあるそうだ。日本であれば補助金が出るからみんなできいいにするという感覚だが、森林資源と景観は地域全体で保全していくものとの考え方が浸透しているようだ。

また、研修していく中で、不思議に感じたことがあった。日本では家の周囲に家庭菜園であるとか、花壇などが見られるのだが、私の見た範囲では目にするのがなかった。敷地が広大なため、別の場所にでもあるのであろうか。

四日目、この度の訪問のメイン行事である姉妹都市提携二十五周年記念式典に参加。セレモニー会場は、シリアン湖上に浮かぶ船に設けられていた。スウェーデンの原風景とも言える森と湖を眼前に控え、人間国宝級というバイオリニストの演奏を拝聴し、式典は進んでいく。

主催者としてスピーチに立った市長は『交流を若者へと引き継ぎ、今後40年、50年と交友関係を続けていきたい』と語っていた。長い付き合いを続けていくため、当別・レクサンド双方

の若い世代が互いを知る機会を設け、その世代が長ずるに及び交流の中心を担ってもらおうとの考えであろう。市長の言葉には交流継続への強い意思が表れていた。

さらに、場違いな日本語を時おり使い、我々の気持ちを解きほぐしてくれた議長の挨拶も印象深かった。スウェーデン語で話す合間に、ココロ(心)・ココロ(心)・ココロ(心)と三度繰り返された聞きなれた言葉。その瞬間、私は氏の顔を改めて見返した。私だけでなく、他の訪問団員の方達も惹きつけられたことだろう。私達の母国語を使い、直接的に訴えかけようとする彼のサービス精神や気遣いが十分に伝わるスピーチだった。

五日目、朝霜が降りた。緯度は北海道よりさらに北に位置しているとは言えるものの、今年は例年よりも寒いらしい。私は、当初参加する予定ではなかったパークゴルフ大会に出場することになり、朝8時半にパークゴルフ場へ向かう。プレーしている最中もクラブを持つ手がかじかむほどの冷え込みだった。

この日はレクサンドを離れる日でもあった。

シリアン湖を巡る遊覧船に乗りながら、フェアウェルパーティーが開かれた。楽しいひとときは瞬間に過ぎ、パーティーの終わりを告げるように船が湖岸に着く。我々をストックホルムへと運ぶバスはすでにスタンバイしており、バスへの移動を促されるが、別れを惜しみ足取りは皆一様に重かった。

六日目、首都ストックホルムにおいて、在瑞日本大使館との連携事業により王宮やストックホルム市庁舎、ノーベル博物館等のほか、再生エネルギー施設を見学する。この施設は、市内で分別(有料)して排出されたゴミを集積し、可燃物ゴミの焼却により発生した熱エネルギーで電気を発生させる仕組みになっている。同様の施設を日本に持ってきた場合、どれほどの電気需用を賄えるのだろうか。将来の原発のありようを含め、エネルギー政策がさかんに議論されている我が国において参考にすべき事例だと思う。

市内研修を終えた後、レセプションが開かれる日本大使公邸へ。本来ならば、私自身の生涯を通じて到底来られなかったであろう場所に足を踏み入れる。公邸での貴重な時間を過ごしながら、25年間に亘る当別町とレクサンド市との交流が、日瑞両国間の良好な関係構築に大いに貢献しているからこそ、このような経験もできるのだと再認識した。

スウェーデンに来てからの数日間、周囲で飛び交う外国語に戸惑うばかりであったが、ようやくこの場に来て耳に入るのが全て日本語でほっとしたのも偽らざる心境であった。

～訪問を終えて～

広大な土地に点在する個々の家には屋敷林が植えられ、家屋の周囲に敷き詰められた芝生にレンガ色の外壁が映える――。人工物と自然物とが絶妙にマッチした景観を織りなしていたレクサンドの街。

短期間の訪問だったが、かの地には経済的・物質的なゆとりより心の豊かさに重きを置く精神風土が備わっていることを強く感じた。日本のように仕事に追われるのではなく、優先すべきは生活。収入が多ければ多いほど増える納税額や手厚い社会保障という制度上の側面も要因の一つにはあろうが、恵まれた自然環境との関わりが人柄を形づくっていることを訪れた人誰しもが感じるのではないか。

また、レクサンド市をはじめ、ダーラナ州、さらには日本の農協に相当する団体などの首長をはじめ、要職に就いている女性の割合が高いことは興味深かった。

終わりに、この度のレクサンド市訪問にあたり、出発前に5回にも及ぶミーティングを開いて頂いた。事前研修をしたことで先方での戸惑いが少なく済んだものと感謝している。

当別町、さらには商工会事務局の方々に様々な形でお骨折りを頂き、楽しく実りある交流ができたことに心から御礼を申し上げますとともに、微力ではあるが今回の訪問の経験を今後のまちづくりに生かしていきたいと考えている。

平成24年度当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年訪問団派遣事業に参加して

訪問団員 古 谷 陽 一

総合体育館に於いて出発壮行会、結団式を開催していただき、千歳空港へ向かいました。成田空港よりコペンハーゲンを経由し、所要時間11時間25分、ストックホルムに到着しました。

6日、ストックホルムからバスに乗りレクサンドへ向かう風景は当別町のスウェーデンヒルズの風景に似ていて、家の回りの芝はきれいに手入れされていました。森林が多く、湖が数多く見られ、電線や信号もなく緑豊かな自然の中で緑の環境は国民共有の財産であることを改めて認識させられました。レクサンドへ到着すると大勢の人々が日の丸を手にとっての大歓迎でした。市庁舎での表敬訪問でニーゴード議長、リリエベリィ市長からの歓迎の挨拶を受け、泉亭町長からの挨拶があり、レクサンド高校に於いて歓迎夕食会がありました。気温は当別より10℃低かったけれども心が温まりました。

7日、私は農業研修班に参加し、じゃがいも農家や酪農家、そして農業高校を視察しレクサンド成人学校では陶芸穴窯の開窯式があり、夜には迫力あふれるアイスホッケーの観戦をしました。

8日、日本公園では桜の記念植樹と着物ショーがある、そしてシリアン湖特設会場で姉妹都市提携25周年記念式典がありました。又、レクサンド教会から25周年の記念パレードをし、モスコゲンホテルにて記念夕食会があり、長時間にわたり歓迎を受けました。

9日、グループに分かれ行動し、私はパークゴルフ交流に参加しました。そして、あずまや贈呈式があり、船上レストランにてお別れパーティとなり、名残り惜しまれましたがレクサンドを後にし、ストックホルムへ移動しました。

10日、4班に分かれストックホルム市内の旧市街地の視察、そして日本大使公邸では日本大使のレセプションに参加し、とても有意義なひと時を過ごすことができました。

この研修を通して、レクサンドの人々は消費税等の税金は高いがどことなく安心して暮らす事が出来るというような自信を持っているようにも感じられました。特に厳しい農作業の中にあっても焦らず、日本人とは違うように思われました。この安心して暮らす事が出来るという点は見習っていかねばならない事だと改めて考えさせられました。又、今後益々国際交流が進んでいく社会の中で、英語が世界共通語のように広く普及している事もあり英語教育の

充実を図る必要がある事を強く感じました。

今回の姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加させて頂き素晴らしい体験と研修が出来ました事に当別町、並びに当別・レクサンド都市交流協会そして関係各位の皆様にご感謝を申し上げますと共に今後の当別町、そしてレクサンド市の発展に少しでも役に立つ事が出来ればと思います訪問団員の報告といたします。

レクサンド(スウェーデン)訪問の印象

訪問団員 安田 雅人

9月上旬というのに記録的な猛暑の日本を抜け出して、到着したレクサンドの朝は肌寒く、日中でも上着が必要な気候であった。帰国をしてから一ヶ月以上になって、当別も今やっとそんな気候になってきた。

現役のころは仕事でよく海外に出かけていたが、最近は海外に出かける回数も少なく、しかも近いところばかり。欧州に出かけるのは久しぶりで、しかもスウェーデンは初めて。何回海外に出かけても、はじめて行くところは新鮮な印象がある。

一か月以上たっても思い出されることはたくさんあるが、話があちこちと、同行した人でもわからないような話にならないように、出発から帰着までを思い出しながら、印象にのこっていることをいくつかにまとめてみた。

● 多種多様な参加者

事前に何回かのミーティングが開かれた。最初のミーティングで参加者の紹介があったが、議員、社長、農家など多種多様な参加者であった。訪問団以外にも、大学の先生・学生、住宅会社の幹部など別途参加することのこと。レクサンドに行ったことのある大学の先生や住宅会社の幹部に「現地で会いましょう」と言われたがまだ実感がわからない。

● 出発の日の朝

出発の日の朝は暗いうちに起きて、集合場所の体育館まで車で送ってもらったが、参加者の何倍もの、多くの見送りの人たちに驚いた。参加者の家族もいれば、関係機関のみなさんもいる。顔見知りの方が多いので挨拶が大変。役場のMさんに、「これが最後にならないように」と悪い冗談を言って笑われた。

● まだまだ遠い国

日本からスウェーデンへの直行便はない。今回はスカンジナビア航空でコペンハーゲンまで行き、乗り換えてストックホルムまで行った。到着は現地時間では夕方だが、日本時間では真夜中。朝早く当別を出てから長い一日でした。直行便がないということは、観光客であれ、ビジネス客であれ、まだ運ぶ人が少ないということであろうか。

● 森と湖の国へ

ストックホルムに向かう飛行機から、地上が見えるようになってきた。見えるのは森と湖ばかり。しかも空港に近くなってもなかなか建物や道路は見えてこない。

一夜明けて、ストックホルム郊外の空港からレクサンドまでバスで行く。幹線の国道であるというが片道一車線。車も少ないし、信号もほとんどない。途中、建物も少なく、市街地も少ない。

● 遠くて近い国

バスは橋を渡ってレクサンドの市街に入ると、沿道に大勢の人が出迎えてくれていた。また、歓迎式典の行われた市庁舎の入り口でも大勢の人が出迎えてくれていた。この様子は、地元新聞をはじめネットにも掲載されたため、期せずして友人や知人から携帯に「写真を見た」というメールが間もなく届くことになった。やはりITの力はすごい！

● 日本の文化・産業の浸透

看板や陳列を見る限りでは、日本のそれとは違うように思ったが、ストックホルムの空港にも、街の中にも、すし・バーがあった。また、セブン・イレブンも見受けられた。もちろん売っているものは、あちらのものがほとんどであるが、一部日本と同じものもあったが、はたして利用者の評価やいかに。

● 合理的な食事スタイル

旅の楽しみの一つはやはり食事。スウェーデンの名物料理は、ニシンの漬物とミートボールだそうである。ホテルの朝食はもちろん、昼食もバイキング・スタイルが多かった。由来は北欧の「スモーガスボード」がモデルだそうで、好きなものを好きなだけ食べられ、サービスの手間もかからない。ただし「バイキング」は日本で出来た言葉なので、海外では通用しないので要注意である。

● これも地産地消？

5日目の昼食に入ったレクサンド郊外のレストランは、先に書いたようにやはりバイキング・スタイル。

しかし、ここで出てきた肉はいつもの肉と違う(写真)。

スウェーデン語はわからないので聞いたところ、

なんと「クマ」と「シカ」と「トナカイ」の肉！！

毎年夥しい数のシカが駆除されるとのこと。北海道でも似たような話があるが桁が違うようである。



● 教会との深いつながり

レクサンドの日本公園で桜の記念植樹が行われたが、民族衣装を着た人のなかにひとときわ体格の大きな牧師さんとわかる人がいた。後で聞いたら、桜の植樹が行われた公園は教会の所有地であり、そのほかにも教会がたくさんの土地を所有しているとのこと。

その日の夕方には、レクサンド教会で、人の誕生から、結婚、葬儀に至る数々の儀式を我々のために実演して見せてくれたが、シリアン湖畔の特設会場で行われた記念式典でも、「チャーチ・ポート」にのった楽団が現れて、式典を盛り上げてくれていた。

レクサンドに到着した日の夜に急に体調が悪くなり、同じ部屋のFさんには迷惑と心配をかけてしまった。特に変なものを食べたりした心当たりもないので、前日に体調が悪かったTさんから、「私たち敏感なのよ」と言われて思わず納得してしまつた。

そういえば、体内時計が狂ったのか、帰ってからしばらくの間、変な時間に眠くなったり、お腹がすいたりしたが、これもやはり敏感なせいであろうか。

富士山 晴れてもよし 曇りてもよし 富士の山
もとの 姿は かわらざりけり

行事調整班 二ノ宮 隆 精

『皆様に“詩吟”を紹介します。詩吟は日本の伝統的な詩の吟誦です。』

この方は、大畑富雄さんです。雅号は“岳窈がくよう”で、詩吟の師範でもあります。今回は“富士山”を詠唱していただきます。富士山は、3,776mの高さです。平地から三角形にそびえ立つ姿の美しさは日本を代表する景観です。それでは、どうぞ、お聴き下さい。』

富士山 晴れてもよし 曇りてもよし 富士の山
もとの 姿は かわらざりけり

たれ どうかい みず もつ 誰か東海の水を將て あら いた ぎよくふよう 濯い出す玉芙蓉

ち わだかま さんしゅうつ 天に挿んで八葉重なる
地に蟠って三州尽き

うん かたいろく むし 日月中峰を避く
雲霞大麓に蒸し

どくりつもとぎそ な 自ずから衆岳の宗と為る
独立原競う無く

『詩吟は、このような大切なお祝いの席で、よく詠唱されます。』

今回は、25周年記念を祝し、皆様に聴いていただきました。

有難うございました。』

(『』の口上は英語)

浪々と吟誦する大畑さんに、スウェーデンの皆さんは、感慨深げに聞き入っていました。(言う迄も無く、日本の皆さんも)

演奏に使われる琴、尺八にも関心を示しておりました。

隣席の方々にお聞きしました

「すばらしい！」

“Great!”

「荘重な声！」「厳かですね！」

“The solemn voice!” “Reverential!”

「日本の心意気を感じました」

“Japanese spirit communicates itself to us!”

姉妹都市提携25周年記念祝賀会 文化の夕べの席で、詩吟を披露できたことは、日・瑞にとってたいへん意義深かったと企画した行事調整班一同自負しております。

とってもご満悦なパークゴルフ代表者のお二人

二ノ宮 隆精さん 当別町 と ベッテル・ダニエルスさん レクサンド市

当別町パークゴルフ協会代表 二ノ宮 隆精



日曜日、インシェーンの山水公園において日24人、瑞24人、選手48人による国際パークゴルフ大会が行われた。スウェーデン/レクサンドが1,534打数で1,765打数の日本に勝った。女性組1位) アン-カトリン・ヘドモム 66打、2位) ケルスティン・ダニエル 67打、3位) ヒサコ・ハカタ 69打。

男性組1位) オウエ・オルソン並びにマッツ・リック 同53打、3位) クリスタ・ハグルンド 54打、4位) ベッテル・ダニエルス並びにケン・ハカタ 同55打。

この記述と写真はホーム・ページ、ニュース・ナウ/レクサンドに掲載されていました。

写真の下に、『とてもご満悦なパークゴルフ代表のお人 二ノ宮 隆精さん 当別町 と ベッテル・ダニエルスさん レクサンド』と書かれています。

“カコーン!” 『打った!』 『いいぞー!』 『うまきいった!』

『ナイスパット! God!』・・・・

新しい仲間との出会い、お互い身振り手振りで、コミュニケーションをとったりしながら、「わくわく」、打ちとけて、パークゴルフに興じておりました。

表彰式での、健闘を湛え合う歓声は日瑞友好を表象する大きな声に思えました。その喜びを満面に表した日瑞代表の二人の顔! (ダーラナ新聞社 ファールクリーレン紙 レクサンド支局 記者 アンキ ヘルベリイさん撮影)。

因みに、当別パークゴルフ協会では日瑞パークゴルフ大会に副賞を用意しました。



訪問研修点描

教育視察研修から 二ノ宮 隆 精

イエルデ学校

同校々庭の“けん・けん・ぱ”の

図



義務教育でシステムとしては、1—3年は低学年、4—6年は中学年、7—9年は高学年と呼ばれる。

代々子供たちが作ってる湖で野外観察学習

野 外 料 理



金曜日は
野外活動
の日



右⇒
拾ってきた
ゴミを広げ
た紙の上に
分別して置
いていると
ころ



“美味しい！” ニコニコ

原っぱにある自然をこわさないトイレ⇒
蓋をとって、台に腰掛ける。
トイレには、野菜くずなども捨てる。
土中の微生物のはたらきで肥料となり、
畑にかえす。

(上の写真、背後ろの建物にあるトイレです)



テッパン幼稚園

(テッパン とは 小さな庭)

園長 イボンム

ヘンスさん

父母ともに1年半
有給育児休暇がある

入園前2・3週間
から1月慣れるまで
子どもを連れて幼稚園を見学する。

保母は家庭訪問して、家族の雰囲気・
希望を調べる。

入園を決めたら、3日間親子で幼稚園に
行き、親同士仲良しになる。



テッパン幼稚園の建物



義務教育は、7歳から。
園児は、1歳～5歳。
6歳児クラスの児童は、
入学前教育を受け学校に慣れる。

← 8:30～10:30 外遊び

11:00～ 昼食 (シェフが作る)

昼寝の後、屋内で過ごし、
17:30 退園

週に1回 遠足。天気に関係なく
大自然の中、外で遊ばせる。
園児9人に一隻舟を用意している。



安全教育



室内に作ったごっこ遊びの小屋の上に
異様なものが置かれていた。
小屋の内、外、周りでは、楽しく遊ぼう！
でも、屋根に上がったり、上がろうとする
と、このように・・・なる。
こわあ～いね。危ないことはしません。

姉妹都市提携25周年訪問団に参加して

訪問団員 佐藤友彦

* はじめに

此度機会を得て訪問団に参加させて頂いたことに対し関係各位に対し心より感謝、御礼申し上げます。以下について参加の一員としてご報告いたします。

* 旅立ちの前に

選考の結果を頂いて未だ準備も整わない中、早速事前説明ミーティングのご案内を頂いた。最初は第1回7月9日以後8月23日まで5回の説明、学習会が開催され、その中で交流の経緯、王国の歴史、風俗習慣、言葉、旅行の心得まで詳細に亘りご指導頂き、気持ちが遙かスウェーデンの方へ徐々に向いていった。さらに9月1日には泉亭町長の自宅にお招きを頂き、過去の経緯写真、記念品、庭園の記念植樹まで説明ご披露を頂き今回訪問に対する泉亭町長の強い取り組み意気込みを痛感した。

* 旅たち 9月5日(水) 晴れ 26度

遂に出発の日が到来。早朝5時に総合体育館前に最終参加者38名が集合。役場、商工会、参加家族等100名にもものぼる関係者の横断幕付の盛大なお見送りを受け皆様の思いやりに感激した。

* フライト

新千歳空港8時6分発 NH2152 便にて成田空港へ。成田空港発11時50分発 SAS984 便にてコペンハーゲン空港へ。コペンハーゲン16時30分発アールランダ空港へ。航程の天候は大変良好で快適なフライトが続いた。久しぶりに新潟から日本海を越えてロシア大陸への航路でしたが、路線が整備され飛行時間も短縮された。アールランダ到着後空港内のホテルでチェックイン。早朝5時から15時間の飛行。この後遅い夕食を取り就寝は午前3時。かなりの疲労を感じるが時差のせいかなかなか寝付けなかった。

* レクサンドへ 9月6日(木) 20度

ホテルで朝食の後、10時にバスにていざレクサンドへ。途中ショッピングモールに隣接するレストランにてランチ途中の風景は始め支笏湖に向かう風景に似てひたすら深い森林の中を進みそれを過ぎると、田園風景が広がり馬の放牧、牛の放牧、牧舎、穀倉地帯が広がりこの季節にもまだ借り入れ前の麦畑が多く点在していた。家々は元祖スウェーデンハウス。これが緑の森と芝生に映えて美しい。

シリアン湖に架かる橋を渡るとレクサンド此処から多くの市民が民族衣装と両国の旗を打ち振り歓迎して頂いた。市庁舎内にて歓迎行事が行われ温かい歓迎を受けた後、シリアン湖岸の400年の歴史あるダレカレアホテルにチェックイン。本日より3泊することに成る。部屋は相部屋で曰杵議員と同宿と相成った。

歓迎の夕食会はレクサンド高校にて開催され高校生手作りの料理、接遇、演出によるパーティーで高校生のレベルの高さに驚愕した。全てが一流ホテルの水準でした。

ホテル帰宿 就寝24時

* 研修

ホテルよりバスにて市内へ4グループに分散し、各研修場所へ移動。我々Cグループは学校研修の為小学校へ。何故か私は教育グループに成り、この後幼稚園視察、高校生と懇談

に参加させて頂いたので総合して研修報告として後述する。

*** 記念事業、交流 9月7日(金) 晴れ 20度**

バスにて芸術高校へここで穴窯の贈呈式、野点茶会が行われた大勢の参加者を前に辻野婦人野点のお手前、お作法はお見事でした。昼食は芸術高校レストラン。この後バスにて昨日の高校へ。ここで生徒達とワールドカフェの開催。この後、アイスホッケー組とフォークダンス組に分かれホテルへ。

フォークダンス参加者は20名。レクサンドフォークダンスのメンバーと夕食、その後ダンス鑑賞。彼らは全員60歳以上の高齢者にも係わらず世界各地に展開するベテランらしく大変優雅で華麗な数々の種目を披露して頂いた素晴らしいショーでした。リーダーの巧みなお誘いと指導により一同も再三の固辞にも係わらず、終わりに踊りの輪に入り、一同大汗をかきながら楽しく夜は更けて行きました。終了22時 就寝24時

*** 記念桜植樹 9月8日(土) 晴れ 16度**

10時30分 日本庭園にて寄贈する桜25本の植樹セレモニー。公園は当別町が2004年に寄贈。その後燈籠二基も寄贈。公園入口にはトウベツ パルケヤポンスカの銘盤。挨拶の司祭によればこの地は教会の畑。市の要請により寄贈したとのこと。広大な土地を所有していた教会の地位と権力を知らされた。植樹の桜は日本からの8年生育の立派なものでした。無事で両市の交流に見事な花を咲かせてくれることを祈る。

*** 記念式典**

シリアン湖岸棧橋に設けられた会場にて記念式典は開催された。知事、近隣の市長、大使等々多彩な来賓各氏が臨席の下、こちらは途中合流のメンバー総勢70名の参加と成った。公式行事の中、在留ご婦人による着物ショーが演じられ式典を盛り上げた。市の取り組みの強さ、重さに歓心を得た。続くケーキパーティーでお茶とお菓子を頂き教会へ移動する。

*** 教会セレモニー**

教会にて司祭の下、記念のミサが両市町民参加で祭祀が執り行われ聖歌隊、男女祭司、パイプオルガン演奏の下、洗礼から結婚に至るキリスト教に係わる神聖且つ厳粛な祭祀を1時間に亘り余すところ無く教えていただいた。中でも、祭祀ごとに変わる司祭の聖衣と祭壇祀幕の変化と色調の同化に眼を見張るものが有った。

*** 記念パレード**

教会セレモニー終了後、教会前から市内中心の広場まで全員当別法被着用、両手に提灯を下げて行進開始。総員70名、長さ50メートルに及んだ。道筋に市民が子供達がそれぞれに歓迎の笑顔と喜びが溢れ一同大感激。

*** 記念晩餐会**

パレードの後、モスコージェンホテルに移り記念晩餐会が開催され、ここにも渡邊大使ご夫妻をはじめ沢山の来賓が参加され式典が執り行われ、式辞、祝辞、賞彰、感謝、寄贈が有った。アトラクションも行われ、その中で我が代表大畑氏による詩吟「富士山」が吟じられ大好評を博した。頂いたお料理もワインも大変素晴らしく美味しかった。なにより臨席ご夫妻との会話がとっても楽しかった。

*** パークゴルフ大会 9月9日(日) 曇り 18度**

この日は2グループに分かれパークゴルフ組とシリアン湖周辺観光組に分かれました。ホテル8時発ゴルフ場9時到着。ゴルフ場は2004年に当別町が寄贈した。ゲームは市長、町長以下幹部多数参加により当別対レクサンドチーム対抗戦。各4名混合の中、和気藹々の内

にホールアウト。結果、レクサンドチームの優勝と成り、目出度し目出度し。賞品はレクサンドの皆さんが大喜びでお持ち帰りでした。

* 東屋贈呈式

ゴルフ場に隣接するホテルにて全員で食事の後、今回の最大の記念である東屋の贈呈式が現地で挙行され感謝状が協賛各位に贈呈された。町長から東屋内部上顎に飾られた当別作者製ふくろうの額について町長の呼びかけに振り向く市長の姿にあるとの説明両者の親密友好の象徴である故納得。

* お別れ

この後、シリアン湖岸より停泊していたグスタフヴァーサⅡ世号に乗船。さよならパーティーが船上、湖上で挙行され、山内氏の乾杯に始まり早い夕食を兼ねた別れの宴の始まりである。皆様お馴染みらしいニーゴート議長のスキヤキソングの日本語による熱唱があり、町長により永年この交流事業に貢献ご協力頂いた八幡敬子女史に対し、感謝状の贈呈が行われた。湖岸到着後各人それぞれのお別れシーンが映され涙、涙、いつまでも名残尽きない様子が暫し続いた。

夕闇迫る中バスは一路レクサンドに別れを告げ、ストックホルムへ向かう帰路夕闇の中、暗闇の中浮かぶ田園風景は誠に美しく名画の趣があった。特に家並みに映える夜間の照明が統一された色彩とローソクのような行灯照明のような灯りが、景色に溶け込んで華麗であった。道中無事に最後の宿泊地、スカンディックホテルにチェックインしたが売店もレストランも既にクローズしていた。今日は寝るだけ。

* 最後の研修 9月10日(月) 晴れ 18度

最終研修も4グループに分散し、我々Cグループは市内の保育・幼稚園視察研修へ。市内の渋滞を避けるため8時ホテル発市内の「テッパン幼稚園」に向かう。到着後、園長女性の説明を受け園内へ。因みにテッパンは「小さい公園」のこととか、そこでは自由、公平に幼児教育が実施されていた。その実践内容と施設には驚愕するものが有った。その後全員市議事堂前広場に集合。付近散策の後、昼食をとり市議事堂、王宮、ノーベル博物館見学の後、大使公邸にお招きあずかり公邸での晚餐会に向かう。公邸は市内の高級住宅地内の格式高い建築と庭園に囲まれた豪邸であった。周辺の邸宅も一様に同様の建築様式のお屋敷であった。

大使は三笠市のご出身、一等書記官は蹴場氏、松本氏共に稚内のご出身でありお互い道産子の気安さから会話が弾んだ。パーティーは大使のお人柄が偲ばれる思いやりのある、焼き鳥、お寿司、焼きそば等が用意され一同久しぶりの日本食にこれまでの疲れも忘れて美味しく頂いた。大使の気さくなお人柄に楽しい雰囲気での時の経つのも忘れるほど楽しく進行し、私も役所時代の昔話に花が咲き、大変心快かった。後輩諸氏にも生意気に道産子として一層の奮起を促した。訪問の最後にこの様な歓待を受け大変うれしかった。名残りを惜しみながら帰途のホテルに向かった大使館の皆様、大使公邸の皆様、御持て成し大変ありがとうございました。

* 最後の日 9月11日(火) 晴れ 16度

早朝8時ホテル発アーランダ空港へ到着後、チェックインに些か時間を要す。ここで、チェックが終わるとこの後コペンハーゲンがフリー。これがEUによる恩恵とか食事を取る間もなく空港内をウロウロ探し探して、TAXREFOUND 税の払い戻しを受ける。1万円相当で1,000円の払い戻し住所表記を求められ、当別町スウェーデンヒルズに疑惑と笑いながらドントジョー

クと言われ、パスポート提示で解決こちらにも笑った。食事する間もなく時間が来て SK1421 便にて12時32分発コペンハーゲンに向かう最後に為って悲しみの雨か曇りがちのコペンハーゲンを SAS983便15時58分発に乗り、一路成田へ12時間のフライト。当別太の渡部氏と同席になり話が弾む。渡部氏の健啖、酒豪振りに負ける。快適に飛行が続き波静かな日本海の向こうに越後の山並み、越後平野を望みホッと一息。10時58分成田到着 気温30度以上とか。入国審査の後、バスにて羽田へ向かう羽田第2ターミナルにて慌ただしく和食弁当を頂く、これがお米もおかずも本当に懐かしくとても美味しかった。そそくさと ANA4725 便に搭乗し千歳へ。これがラストフライト、それにしてもこの道中飛行は快適で一度も悪天、何等のトラブルにも遭遇せず安全飛行に恵まれ誠に幸運であった。いかなる善行の師の集団であったことか。

千歳着14時57分、道中の無事に只管感謝する。バスにて当別へ、途中怪しい入道雲が立ちみりみる時雨当別に接近する。篠津付近にて突然青空が広がり西から南方向に虹が架けられた。これぞ当に歓迎無事帰還を祝福するアーチ。最後まで恵まれた訪問団であった。ともあれ一行38名無事帰還出来たことはなによりの成果であり大成功であった。体育館前には出発にも増して多くの皆様に横断幕つきのお出迎えを戴きました。心から嬉しかった。本当に有難うございました。30分の待ち時間の後家内の運転により大畑氏をお届けし帰宅したのは17時過ぎ、道中無事を御礼し日本酒に妻の手料理で一杯。生気が戻った幸福の一瞬でした。

* 研修参加後記

今回の訪問の中には真摯に研修計画が組み込まれ各グループ真剣な研修態度で臨んでいた。私は何故か教育班に属し幼稚園、小学校、高校と先進国の高度な教育現場を目の当たりにすることが出来大変素晴らしい経験となりました。教育の現場においては幼児から大学生まで身分、身体、性別に係わらず公平に無償の教育が受けられるということ、基本が国民の資質を高め国力を強化することそれが少ない人口により持続する政治を維持する人材の育成にあること、このことが明るく伸び伸びした知性豊かな子供達の存在にあったと思います。6歳の子供が普通に英語を話し高校生から大人まで英語は普通に会話出来ました。英、独、スペイン等5ヶ国語は話せる国民です。国の基本が教育、それが国力に繋がるとの理念に基づく政治の下での教育。これは理想と言える。主義、思想を超えた根本理念に敬服した。

* 終わりに

この訪問は成功であったと思料します。25年間に亘りレクサンド市と間に永い間構築してきた親善、友好の正に集大成であり各行事に於いて発揮されたレクサンドの人々の対応は善意と敬意に満ち溢れ、感激させるものが随所に感じられ心からの歓迎を享受した。このことは日瑞外交日本の外交史上において、稀有の事実であり利害を離れた国際友好・親善が果たす民間外交の範を為す物として後世に記録される業績となることでしょう。我が人生に於いて懸かる体験が出来たこと、9月5日に発ち12日に帰る6泊8日に亘る訪問団の旅程を無事終了出来た事に対し心から本事業を立案計画実行なされた役場、商工会などの関係各位、団長の泉亭町長はじめ直接随行し指導監督された増輪部長、高田主幹、土井係長、茂又職員の方、旅行社の南雲女史、通訳を務められた伊藤、ステファンの両氏に対し篤く御礼を申し上げます。大変ご苦労様でした。重ねて誠に有難う御座いました。

訪問団の一員として

訪問団員 坂本千鶴

当別・レクサンド姉妹都市提携25周年記念事業訪問団の一般公募枠に応募し、幸運にも訪問団の一員に加えていただく事ができました。姉妹都市友好の「証」とも伝えられている「当別町夏至祭」に毎年スタッフとして参加し、予てから、いつかレクサンドを訪れたいと思っていました。

充実したスケジュールの中で心に書き貯めた「旅日記」を報告書とさせていただきます。

1日目 9月5日

早朝5時に多くの町民の皆さんに見送られ、一気に一団員の責任と使命感を持ちました。当別から21時間後にストックホルム、アーランダ空港で八幡敬子さんの顔を見た瞬間安堵しました。

2日目 9月6日

レクサンド市への移動前、既に早朝ニーゴード議長が訪問団を迎えに来て下さり、「ようこそレクサンドへ！」と何度も言って私達を笑顔で歓迎してくれました。そこには渡邊在スウェーデン日本大使、加藤在札幌スウェーデン名誉領事、レイニウスご夫妻が勢揃いし、改めてスウェーデンと関わりの深い当別を認識しました。八幡さんのガイドでレクサンドまでバスで移動。レクサンドがあるダーラナ地方はスウェーデンの中央、ストックホルムの北西部に広がっていて、スウェーデン人にとって「心のふるさと」と言われています。車窓から眺める風景は美しく、鬱蒼とした森、ファールンレッドと呼ばれる朱赤に塗られた木造の家々、一面の草がどこまでも芝生のように整っていることに感心しました。そして時折、当別と似ている風景が目に入りました。

いよいよレクサンド橋を渡ってレクサンド市内に入ると、日本とスウェーデンの国旗の小旗を町の人みんなが振って出迎えてくれました。その様子が本当にフレンドリー。何処を見ても誰もが手に持って大きく振ってくれる旗、旗。私達も、スウェーデンとレクサンドの小旗を振って、笑顔で挨拶。

この瞬間は、言葉の壁はありませんでした。再会と新しい出会いの喜びを感じた時でした。**歓迎セレモニー**は和やかに行われ、会場は折り紙で出来た生け花や書など「日本」文化を沢山取り入れられていました。ここで増輪部長が私達訪問団員の一人一人を紹介された事はとても嬉しく、初めて会うレクサンドの人達と自然に交流しやすい空気が作られました。

ホストファミリーの案内で宿泊先に行く途中、初めて見るレクサンドは、地震がほとんどない事もあり100年前、200年前の建物が健在していて、レクサンドの伝統や昔ながらの文化が今も息づいているようでした。

歓迎夕食会はアンデルセンの母校、レクサンド高校のレストランで行われました。当別町140周年の時に来町したマリア・パルクさんが校長先生です。テーブルセッティング、サービス、料理、メニュー、オープニングコンサート全てレクサンド高校のホテル科の生徒さんによるおもてなしをいただきました。お料理のメニューは知る限りスウェーデン料理を代表するものばかり。若い学生に国際交流の大役を「任せる」、勉強の実践の場にする市の教育の姿勢は素晴

らしいと思いました。私のとなりの席に座ってくれたのは5年前20周年の時当別に訪問したというレクサンド文化協会長のアンディッシュ・チュールさんでした。この方の「ようこそ レクサンドへ」というプラカードを持った写真は当別広報10月号で紹介されました。20周年記念の時は私も当別夏至祭会場にいたということで会話もはずみ、翌日予定されているフォークダンスタイムのサプライズ計画まで進んでしまいました。

暗い夜道、ホームステイ先に帰宅途中渡った橋は赤と白(ジャパンカラー)に光るイルミネーションの演出。ホテル泊の人もホームステイの人も皆、夜はこの橋を通ります。ここまで配慮された歓迎ぶりは日頃、町の案内役を務める私にとっては、嬉しくもあり、歓待精神ということを大変勉強させていただきました。

3日目 9月7日

グループ研修は私が日頃理想としていたスウェーデンの自然環境教育の現場とも言える市内小学校の野外授業を視察しました。よく耳にする「持続可能」「循環型」と言う言葉はこんなことだったのだと体得出来ました。

私達が自然散策の途中で視察した子供達は野外炊事の実習をしているとばかり思い込んでいましたが、戻ってみると私達のために「自然レストラン」としてランチを作ってくれていたのです。子供達が、まさかりで木を割り炊き付け、包丁で調理、味付けそれぞれ担当を決め「責任」を果たしています。レクサンドクネツェにコケモモジュースも添えられていました。美味しい！印象的なシーンは訪問団の私達の全員が童心に戻った笑顔になった事、若い団員の女性が「子供やり直したい！」と言った事でした。

レクサンド成人学校の陶芸穴窯の開窯式では茶道を披露する辻野道子さんのサポートをすることにとっても緊張しました。私がお運びした成人学校長のマッツ・スペンソンさんは昨年当別に来町した際の講演会「スローライフ イン ダーラナ」の講師でダーラナの自然の美しさを教えて下さった方でした。その後、会場をレクサンド高校に移し、楽しみにしていた「ワールドカフェ」に参加しました。コーディネーターは東海大学の川崎教授と学生です。「日本の文化」についてのディスカッションでは、レクサンドの高校生は日本の事を良く知っていて、日本の文化や教育についてストレートに質問してきます。ワールドカフェのルールは人の意見を否定せず、みんな同じ立場で参加します。当別からは教育長、校長先生、教頭先生も参加して大変興味深いディスカッションでした。レクサンド高校では日本語科もあり、日本、当別に行ってみたいと言う生徒や、日本または当別に来たことのある生徒、学生が中心に参加しました。

夕方は夕食を兼ねた**フォークダンスの夕べ**に出席しました。会場に着くなりアコーディオンとバイオリンのフォークの生伴奏が始まり、昨夕隣の席で一緒したチュールさんが真っ先に私をエスコートしてくれ驚きましたが、後ろを振り返ると全員が一人一人エスコートされ席に着きました。シリアン湖を一望出来るモスコージェンホテルでサンセットとキャンドルの灯りがとてもきれいで、ゆったりし本当に美しいホスピタリティに感動していました。夕食後のフォークダンスの夕べでは伝承される文化を堪能させてもらいました。同じ団員の澤内律子さんが自前の民族衣装を着てリズムカルなダンスを共演しました。これが昨夕の夕食会でのチュールさんと私のサプライズ計画だったのです。後半は私達も全員がフォークダンスを楽しみました。この部分の記録写真のデータはありませんでした。気が付けば職員さんも全員と一緒に輪に入って踊っていました。このことはとても嬉しくとてもいい交流会になったと思っていますし、ダーラナ新聞にもこのシーンが記事となっていました。

4日目 9月8日 25周年事業のメイン行事

桜の記念植樹が行われる日本庭園ではレクサンドからの参列者は全員民族衣装を着て、また、この日に花を添えて下さるストックホルムからの日本人の女性で構成されている「さくら合唱団」は皆さん着物姿で演奏。ストックホルムでご挨拶いただいた渡邊大使ご夫妻も参列し、厳かに且つ、当別にご縁のある初々しいレクサンド高校の生徒がサポートして執り行われました。この日夕方歩いた市内の商店街の桜の街路樹は、かつて当別町から来賓が来たときに記念植樹された桜が大きく成長したものと聞き、レクサンド市内の中に当別の存在を感じながら歩きました。

式典の様子は動画で同時に当別にも配信され、留守の家族がその瞬間を見ていたと聞き、帰国後式典の話題を共有することができました。式典ステージの横に手話通訳もいて、その後ケーキパーティで、一般市民の方たちと自由に交流できる場を提供された企画は素晴らしいと思いました。

パレードで当別訪問団が手に持った提灯はすれ違う子供たちへのプレゼントになりました。この日驚いたのは、5年前の当別町夏至祭の時にダーラナ新聞社の記者が撮っていた私の写真が町中の記者のオフィスの窓の外側に貼られ「当別でスウェーデン風のニシンやジャガイモの料理をする人たち・・・」と紹介されていました。びっくりした私は記者に“it's me!”と言うと、記念にと窓から写真をはがしてお土産にもらって帰ってきました。この日は特に町のあちこちで「カルチャーナイト」が開催され、「日本文化」をテーマにパフォーマンスやワークショップが繰り広げられていました。これも歓迎の一環と思えばどれだけ多くの人達のかと時間が使われて実現したかと思うと本当に頭が下がります。

記念夕食会では、レクサンドの関係者の皆さんと、「式典」を共に迎えられた喜びを大いに分かち合う事が出来ました。当別からは大畑富雄さんの詩吟の披露、レクサンドからはレクサンド高校生のマリリン・オルソンさんの歌、東海大学生チームはコブクロの「サクラ」を披露しました。ステファン森さん、伊藤さんの適切でセンスある通訳が場を一つにしてくれました。

5日目 9月9日

シリアン湖観光施設研修

当別のスウェーデン交流センターでも見ることができる「ヨブス」のテキスタイルは、ダーラナ地方の自然、野に咲く草花をスケッチ、デザインして見事な発色を手染めされ、スウェーデンの自然をそのまま布いっぱい咲かせたようで印象に残ります。1度に染められるのは、染め台の長さの30メートル。リネンの上に二人がかりで何度も何度も型を移動させて1日でやっと60メートルが染め上げられるそうです。この染め作業は昔と変わらず60年、今もその伝統が守られています。

次の研修場所のネイチャーセンターは場面、場面の導入の仕方が優れていて、見学コースの終盤になると学芸員の説明にとっても興味深く聴き入っていました。スタッフの一押し通り、展望台から眺めるシリアン湖を囲む森の原風景に魅了されました。

レクサンド滞在最後のスケジュールとなったお別れパーティはシリアン湖上での「WASA」号の船上パーティでした。25年のこれまでの軌跡にご尽力いただいた方々への感謝と次代を担うであろう人達とこれからの友好の絆を約束された実に感動的なパーティでした。船着き場で待っていたバスに「さよなら！またお会いしましょう！」と熱く何度も言いながら乗

り、訪問団を見送るレクサンドの方々お互いに大きく手を振りお別れし4日間のレクサンド滞在の全てのスケジュールが終わりました。

私がホームステイでお世話になったパルク宅は、レクサンド市街から車で20分ほど離れた「村」でした。古い物を大切に受け継ぎ、伝統の手仕事をしている風景が想像されるお宅でした。家の3倍ほどある庭には日本びいきのご家族らしい大きな野外お風呂、日本風ガーデン、畑やバーベキューコーナー、大きなトランポリンが在り、遠くにトラクターも見えました。季節の自然の草花の手入れも良く、ご主人が「短い夏を沢山楽しむんだ。この村の暮らしは心が豊かな気持ちになるからね」と言っていました。このホームステイ経験はレクサンドの家庭の心豊かな暮らし、家族の絆、男女平等に働く家庭を守る機能的な家事のスタイル、健康を気遣った朝食、「村」のコミュニティの様子など見せていただく本当に貴重な機会でした。

主に教育関係の視察研修班に参加しての印象は、スウェーデンの希望する全ての子供は1歳から就学前教育を受ける事ができ、学校(幼稚園)、両親と一緒に学習、躰をして育てる。幼児から「遊び」の中で自然に触れさせ、自然を守りながら暮らし、伝統や文化を大切にしている。今日本でも流行っている「北欧スタイル」もこのような教育により生まれた言葉なのかもしれません。環境面では町の中で自動販売機が何処にもない、アルコール類は国営の専門店以外では購入できない、夜の照明は光々とせず、電力の使い方が日本と全く違っていました。

今振り返ると、25周年記念事業訪問団は出発前の5回の研修会でスウェーデン文化、歴史、外国人との接し方、マナーなど学び、ワールドカフェの実施、スカイプでレクサンドの市長や議長さんとも事前に交流し、そこで当別、日本をどのように伝えるかなど個々思いながらレクサンドに向かいました。団長からは出発前には、全員がお互い名前も覚えて、「団結した仲間」として出発しましょう！」と呼びかけられ、団長自ら常に積極的に団員に声掛けをしてくれました。当別を出発し、成田に着く頃には「チーム 当別」が出来上がっていたように思えます。また、一般公募枠広げたという点で、海外経験のある、20代、30代の団員が構成され、レクサンドの若い世代の人たちと本当に微笑ましい交流ができるという大役を果たしてくれました。団員の職業も様々で姉妹都市交流の裾野を広げることができ、国際交流における「人材育成」に繋がったと思います。このことは5年後に30周年を迎える時に必ず成果が出ていると思います。

今、更なる友好のため、互いの経済交流の発展、人と文化の交流の在り方など課題もあると思います。帰国後、インターネット上でレクサンドと当別の小さなコミュニティができ賛同する人たちが季節や文化の情報交換をすることが始まりました。私自身も今回いただいた機会に感謝し、当別の自然や文化を大切にしながら、これからの当別・レクサンドの友好を願う町民の一人で在りたいと思います。

訪問団を送り出すためにお世話いただきました全ての皆様に感謝しお礼を申し上げます。

姉妹都市提携25周年記念事業に参加して

訪問団員 荒戸恵子

大勢の町民、役場職員、各関係機関のお見送りを頂き、9月5日早朝総合体育館に訪問団員38名が集合。激励のお言葉を頂き、最後に訪問団長の泉亭町長がお礼の挨拶を終えて、レクサンドに向けて千歳空港から6泊8日の行程で訪問団の一員として参加させて頂きました。

成田、コペンハーゲン、ストックホルム着が現地時間19:20分着。空港には国際交流連絡員の八幡敬子さんが出迎えてくれ、お顔を拝見してほっとし、「あ～外国に来たんだなあ」と思いました。この日は空港ホテルに一泊し夕食は八幡さん、スウェーデンハウス(株)の職員で通訳の森ステファンさんと一緒に食事をしながら、レクサンドの事を色々と聞かせて頂きました。

9月6日、八幡さんのガイドでレクサンドへ出発。車窓から見る景色は、当別と変わらないなあと思いました。森の立木がまっすぐに伸び、曲がった木がない様でした。積雪が少ないからかな。道路を走っていて日本と違うところは信号機がない代わりに、ロータリー式になっていて好きなところを走行できる様に作られているそうです。八幡さんのお話では、レクサンドは民族的伝統、音楽そして美しい自然をもつ地域として知られており、なかにはダーラナ地方はスウェーデンの縮図という人もいます。レクサンドを含めシリアン湖周辺の町は、スウェーデンで最も人気のある観光地であり、夏には北欧の明るい夜と夏至祭を体験することができる。2時間ほどでスウェーデンの山岳地帯に出かけることもできるそうです。まだまだ沢山説明を聞かせて頂きました。15時20分位にレクサンド市庁舎に到着。沿道、庁舎前では、大勢の市民が日本の小旗を振って出迎えてくれました。歓迎セレモニー(議場)では、市議会議長のラッセ・ニイゴードさんの頑張れ！頑張れ！の言葉で歓迎してください、私は頑張れの言葉を聞いたときは当別町140年記念の時に同じ言葉で「ハグ」をして頂いたことを思い出しました。セレモニーが終わり、庁舎前からそれぞれの宿泊先、ホテル、ホームステイ先へと出発。坂本さんと私はマリア・パルクさん宅に3日間お世話になることになりました。ご夫婦二人暮らし、日本語の話せる方々で私はとても助かりました。夜は、レクサンド高校(レストラン)での歓迎夕食会。ここでは男女11名の生徒さん、シェフの方達がおもてなしをしてくださいました。マリアさんは、この高校の校長先生です。マリアさんとのコミュニケーションは、朝食と行き帰りの車の中でした。

7日は、4つのグループに別れて一日研修。私は農業グループで増輪部長、通訳の森ステファンさん、私共8名で「いも、小麦農家、酪農家」を研修。お昼には、レクサンド成人学校で陶芸窯の開窯式。昼食の時、町長さんの計らいでウルリカ市長さんとお話ができ、私は当別町140年記念の時などのお話を伊藤伸哉さんの通訳で交流がもてました。とても感激いたしました。夜はグループに別れ、私はフォークダンスを鑑賞しレクサンドのみなさんと一緒に踊り、とても楽しいひと時を過ごさせていただきました。会場のホテルからシリアン湖に沈む夕日がとてもきれいでした。

8日は、日本公園で桜の記念植樹&着物ショー、シリアン湖の特設会場で式典前に昼食、キモノフュージョンなど色々な催しものなどがあり、13時30分から姉妹都市提携25周年記念式典が挙行されました。式典で当別からは配野町長(故)、泉亭町長、竹田前議長さんらが表彰状を頂きました。式典終了後の祝賀ケーキパーティーには、一般の市民が参加をして我々訪問団と交流がもてました。私とお話した方は当別の夏至祭を見たいと話してくれました。当別も30周年の時には一般町民が自由に参加をし、レクサンドの方と交流が持てたらいいかもかもしれません。式典が終わり、次の行事が始まるまで2時間位時間があり、マリアさんの案内で街を散策することができました。18時00分からレクサンド教会でコンサートがあり、1時間鑑賞。その後、教会から公園まで記念パレード。このとき当別町のハッピーを着て日の丸の小旗、ちょうちんを持って300mほどパレードをし、町長の挨拶も終わりバスでモスコゲンホテルに向かい、夕食会場ではレクサンドのミュージシャンの演奏。当別からは大畑富雄さんの詩吟が披露されました。とても有意義な一日でした。

9日の行事は、二つのグループに分かれ研修。私は、パークゴルフに参加。団体ではレクサンド市が優勝、個人では高谷議長さんが2位、私は4位でした。レクサンドの人は皆さん上手でした。パークゴルフ大会が終了した後、シリアン湖観光施設研修グループと合流。あずまや贈呈式が行われ、町長さんはじめ贈呈された人達が表彰されました。この日最後の行事、船着場に移動し、船上レストランでお別れパーティーが催され、シリアン湖を一周し船上ではウルリカ市長さん、ニイゴード議長さん、泉亭町長さんなどの挨拶があり、私は町長さんの挨拶を聞き、感激したこと、それは当別とレクサンド市との姉妹提携が25年続いたことは八幡さんがいなければ続けられなかったかもしれないという言葉聞き、胸が熱く涙が出ました。八幡さんの功績が偉大なんだと思いました。八幡さん、本当にお疲れ様でした。船上での食事会が終わり、船からおりてレクサンド市の関係者の方々がお見送りをしてくださり、ホームステイをした人達は出発する時間が過ぎても別れがたいひとときでした。

4日間のレクサンド市滞在中、たくさんの方々にお世話になりました。バスで次の研修先ストックホルムに向けて出発し、20時00分頃スカンディングホテルインフラシティに到着。私は11階の部屋でスウェーデンに来てから初めてバスタブに浸かることができ、疲れが癒されました。

10日のストックホルムでの研修はグループごとに分かれ、私は環境、リサイクルを徒歩で視察。次に、バスで市庁舎オペラハウス(車窓から)王宮、ノーベル博物館大聖堂などを見学。昼食後はショッピングを楽しみました。その後、大使公邸に移動し、在スウェーデン日本大使主催のレセプションパーティ(立食)。ここでは日本食の生寿司、天ぷら、浅漬けなどを食べ、日本に帰った気分でした。食事をしながら、大使の奥さん、名誉領事の奥さん、レイニウス豊子さんを交えて当別の夏至祭の事などを話しました。

翌11日は、バスでアランダ空港へ移動し帰国。6泊8日の旅が終わりました。これまでの企画を立ててくださったレクサンド市の皆さん、町長さん、役場の職員、商工会の職員の皆さんに感謝をしたいと思います。8日間ありがとうございました。

当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加して

当別町立弁華別小学校
校長 渡邊光太郎

1 はじめに

今回、縁があって、校長会代表という立場で、当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団にご一緒させていただいた。今回は当別町とレクサンド市が人的交流や経済交流を始めて四半世紀という節目の年に当たり、今までの交流を振り返り、今後に向けて両地域の更なる発展を目指して、各部署ごとに課題をもって臨んだところである。

私は校長会の代表という立場から、班行動の場合は教育行事班として多くの方々と一緒に、学校関係の施設等を訪問させていただいた。事前にインターネット等でスウェーデンの教育事情に関する資料収集をしたところ、授業料や給食費等、保護者が負担する教育費が無料であるなど、スウェーデンの教育制度は日本とかなり異なっているのがわかった。現在、様々な成果を上げてはいるが、同時に、様々な課題も浮き彫りになってきているとのこと。実際に自分の目で教育事情を確認したいという決意をもって参加した。

訪問日程には小学校と幼稚園での視察が組み込まれており、実際の子どものたちの活動の様子も拝見することができた。スウェーデンは高福祉国家としてよく知られているが、教育の分野にもその考えが浸透していることを、ガイドの方の説明や、小学校長、幼稚園長からの説明で感じ取った。現場では子どもたち一人一人が実に生き生きと活動しており、子どもたちの持てる力を伸ばす教育の徹底には、見習うべきところが多くあった。

訪問日程をすべて終えた今、全体を振り返ると、ハードスケジュールではあったが、内容も充実しており、とても有意義で、得ることも多かった。今回の訪問を通じて体験したこと等は、ぜひ町民の皆様、職場の皆様方に還元していきたい。

2 訪問内容概略

〔1日目：9月5日(水)〕 晴れ 当別町～ストックホルム

いよいよレクサンドへの出発の日を迎えた。朝3時に起床。身支度を整えて4時半に教頭先生の車で総合体育館へ向かう。出発式には朝早くにもかかわらず、約150名ほどの方々が見送りに来られており、驚くとともに恐縮してしまった。

出発式を終え、5時15分当別町を出発。高速道路を経由し千歳に向かう。空は快晴でとても気持ちの良い朝である。千歳から成田、成田よりコペンハーゲン、コペンハーゲンよりストックホルムと飛行機を乗り換え、約11時間かけてストックホルムのホテルに無事到着した。日本との時差はストックホルムで約7時間、コペンハーゲンで約8時間。そのため9月5日は約32時間の長い一日となる。

空から見たスウェーデンは、まさに湖と森の国。異国情緒豊かなこの国の人々との交流がいよいよ始まることを実感した一日であった。明日からのスケジュールに備え、現地時間午後10時就寝。

〔2日目：9月6日(木)〕 晴れ スtockホルム～レクサンド市

今日一日はほとんどバスでの移動となる。車窓からの景色は、まさに当別町の田園風景を思わせるようであった。見事な麦畑と、そこに点在する独特な家のたたずまい。まさにスウェーデンヒルズである。ただ、国道を走っていて感じたのは、走る車の数は決して少なくはないのに、ほとんど信号がなかったこと。交差点等も高速道路のインターチェンジのように、とてもスムーズであった。

午後3時にはレクサンドの街に入る。街の入り口では多くの市民が、手に日本とスウェーデンの国旗を持って出迎えてくれたのには、大いに感激させられた。

議会室にて歓迎セレモニーを行ったあと、一旦それぞれの宿泊先へ移動し、荷物を置いて、夕食会場となるレクサンド高校へ出発。ここではレクサンド高校の生徒たちが、実習をかねて、歓迎のためのイベント、おもてなしの料理など、すべてをこなしてくれた。料理もおいしく、披露した音楽や演奏も素晴らしかった。テーブルで同席したレクサンドのニーベリィー教育長とも様々な面で交流することができ、とても有意義な一日となった。

〔3日目：9月7日(金)〕 晴れ レクサンド市にて

今日は朝7時に朝食を摂り、7時半にはホテルを出発。午前中は小学校への視察を行った。学校に到着後、レクサンドにおける学校組織や教育の説明を受けた後、子どもたちが活動している湖へトラクターが引く荷車に乗って移動。その湖は、なんと子どもたちとともに、教職員が創ったものと聞かされ、一同、驚きの声が上がった。

さらに、車に分乗し別の活動場所へ移動。そこでは子どもたちが、自然の中で昼食の準備を行っていた。森の中を探策後、子どもたちの作った昼食を少し味見をさせていただいた。日本のヤキソバのような感じで、とても美味しかった。

その後昼食会場へ。街の人たちが、日本の技術者の協力により設置された窯の前で待っていて、火入れ式のセレモニーのあと昼食。昼食後は、当別町の杉野さんによるお茶のセレモニー。午後からは、レクサンド高校にて、レクサンド高校生と一緒にワールドカフェに参加。1グループ訪問団2～3人、レクサンド高校生2～3人がテーマに沿って意見交換。第一のテーマは「日本のイメージ」。第二のテーマは「日本の良い所と悪いところ」。第三のテーマは「これからの交流で発展させたいもの」。英語を介しての、緊張の中にも楽しい交流の場となった。

夕方からは本場のアイスホッケーの観戦。地元レクサンドチームと他チームとの練習試合であったが、世界のトップクラス同士の対戦に、その迫りに圧倒された。とてもスピード感があり、時間を忘れさせるものであった。

〔4日目：9月8日(土)〕 曇り レクサンド市にて

今日は今回訪問の最大の目的である、記念行事への参加の日である。

10時にホテルを出発し、桜の記念植樹が行われる会場へと向かう。会場にはすでに多くの市民の方々が集まっており、我々を迎え入れてくれた。当別町が送った25本のうち、すでに19本は植樹されており、残った6本分の植樹セレモニーが行われた。セレモニー後、日本人による、華やかな着物ショーが催され、そのあでやかさに感嘆の声が上がっていた。

その後、一同はシリアン湖畔を歩いて移動。約20分の散策の中、シリアン湖をめぐる自然の豊かさを肌で感じる事ができた。船着き場での特設会場で昼食を摂ったあと、いよいよ姉妹都市提携25周年記念式典がスタートした。式典にあたっての主催者、来賓の挨拶のあと、25周年を迎えるに当たり、これまで多大な貢献をされた方々が表彰され、多くの拍手にわいた。

続いて湖からバイオリンを奏でながら数人が登場したのを皮切りに、歌や踊りなど、様々な工夫を凝らした演出が続いた。最後に舞台に登場した方々による、湖への投石。石には願いが書かれており、次代への連携の和の広がりを託し、式典は終了。とても記憶に残る式典となった。

式典終了後、一旦ホテルに戻ったあと、レクサンド教会に移動。おごそかな雰囲気の中で、これまでの歴史を衣装等で再現。参加者もともに賛美歌を斉唱するなど、雰囲気は最高。その感動の中、バイオリン奏者を先頭に、市内パレード開始。訪問団は揃いの法被を着用し、手には提灯や小旗を持って、市内を練り歩き、多くの市民の歓迎を受けた。

パレード終了後は、記念夕食会場である、モスコージェンホテルへ。市民による丁寧なもてなしの中、会話ははずみ、楽しい一時はあっという間に過ぎ去った。12時頃ホテルに到着。

〔5日目：9月9日(日)〕 曇り レクサンド市にて

今日は午前中、二つのグループに分かれての交流であった。私はシリアン湖・施設グループで行動した。最初に伝統的染め物工場を見学。手作業で染める工程の説明を受けた後、実際に染めている途中の製品を見学。染める色や柄によっては、30種類の工程が必要となるなど、非常に手間のかかるものであった。その後隣接する売店にて製品等の購入タイム。多くの方々が気に入った製品を購入したようである。

染め物工場のあとは、自然博物館の見学。さすがに森と湖の国だけあって、そこに生息する動物たちも多岐に渡っていた。オオカミも一時減少したが、再び増え、100頭ほどが森林に生息しているとのこと。人間と森との共存を大切にする国だからこそ、絶滅の危機を乗り越えられたのかもしれない。

途中で寄ったホテルで軽い昼食を摂ったあと、午後からはあずま屋の贈呈式に参加。あずま屋は友好都市提携25周年の記念として、当別町よりレクサンド市に送られたものであり、友好の象徴として、パークゴルフ場の中に、そのたたずまいを見せていた。

贈呈式後、一行はバスでシリアン湖畔へ移動。遊覧船の中で、レクサンド市民の方々と最後のお別れパーティーを行い、交流を深め合った。約2時間の遊覧ではあったが、湖上から眺めるレクサンド市の街並みも情緒あふれるものがあり、有意義な時間となった。

下船後の、レクサンド市民とのお別れでは、いたるところで感激の涙が見られた。この涙が今後の再会の力になるのだろうかという予感を感じさせた。

【6日目：9月10日(月)】 晴れ ストックホルムにて

テッパン幼稚園を視察。(※テッパンとは「小さなお庭」という意味) 現在80名の園児が通園しているとのこと。1998年、新しい法律が制定され、「あらゆる子どもたちには幼稚園に行く権利がある」との考え方のもと、富める者、貧しい者、未婚者、既婚者、健常者、障がい者等、あらゆる状況にある子どもたちも、幼稚園に受け入れることになった。

そのためテッパン幼稚園ではそれまでの指導方法を、子どもの目線に立って見直した。その結果、①子どもの目線ではロッカーや机、椅子ばかりが目立ち、遊ぶ空間が少ないことに気づいた。また、子どもの成長に合わせて②クラス分けを完全に年齢別にした。

並行して、指導者の教育哲学の徹底を目指した。その根幹は、a) 子どもは0歳児でも学ぶ力を持っているとの認識で接すること、b) 自己決定の場面を多く持ち、自分たちに考えさせること、c) 幼稚園における生活の延長が家庭、学校、社会へと結びつくものであること。

a) についての具体例としては、小さな子どもはまだ自分の考えや思いをうまく伝えられないため、人形等を使って人形に話をさせたあと、人形にやりたいことをさせるみることにより、意思疎通を図る。b) については、例えば小さな家を作った時、「屋根に昇っても良いか」と尋ねる。皆が「ダメ」ということによって、「屋根には昇らない」というルールが成立する。c) については、ネズミのぬいぐるみを10匹隠し、みんなで探させる。9匹見つかったとすると、あと何匹いないかを考えさせ、算数の考え方を育てていく。

また、入園を希望する保護者に対しては、事前に家庭訪問を行う。それは家庭環境がどのような状態なのかを知るためである。さらに、入園が決まったら、3日間事前入園を親と共にしてもらう。その中で親には、子どもの人形を作ってもらう。それが子どものシンボルとなる。出欠の確認や、健康状態の確認、子どもたち同士のコミュニケーション、子どもと職員とのコミュニケーションの手段として利用していく。

スウェーデンの教育レベルは高いと聞いていたが、テッパン幼稚園を訪問し、その理由のいくつかが理解できた。それは、子どもの教育のための哲学が徹底しているということ。また、子どもたちの持っている力を伸ばす教育が徹底されているということ。これらのことについては、今後、日本の教育にも必要になってくると実感させられた視察であった。

昼からはストックホルム市内の王宮、ノーベル博物館、大聖堂、市庁舎などを視察。歴史の重さを肌で感じるとともに、市庁舎における歴史の変遷を取り入れた現代建築のすばらしさに感嘆させられた。

夕方からは日本大使公邸でのレセプションに出席。今回の訪問がなければ、お会いすることなどあり得ない立場の方々と、親しくお話しすることができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。

【7日目：9月11日(火)】 晴れ ストックホルム～当別町

5時起床。シャワーを浴びた後、6時30分朝食。慌ただしく荷物の整理をし、8時30分にはホテルを出発。アランダ空港へと向かう。空港内で最後のショッピングタイム。12時20分空路、コペンハーゲンへ。1時間ほどのフライトのあと、飛行機を乗り継ぎ、15時30分、いよいよ成田に向けて出発となる。

【7日目：9月12日(水)】 晴れ ストックホルム～当別町

日本時間で9月12日(水)9時35分、無事成田空港に到着。入国手続き後、バスで羽田空港へ移動。13時15分発の飛行機で、空路新千歳へ。14時45分、予定通り新千歳着。その後、バスで当別町への向かう。16時45分、無事当別町に到着。総合体育館前には、多くの出迎えの方々は今度は遅しと、到着を待っていただいたようである。到着とともに、「お帰りなさい」の温かい声を掛けていただき、やっと当別町に帰ってきたことを実感することができた。最後に、訪問団を代表して、高谷当別町議会議長が帰着の挨拶をし、我々訪問団の旅はすべて終了した。

今回の訪問団結成、及び、訪問に当たり、多くの方々のお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

友好の種子をいかに育てるか

太美町 佐藤 直己
(西当別中学校 教頭)

残暑厳しい当別町から、秋の深まりを感じるスウェーデン レクサンド市への訪問は、季節以上に暖かいものとなりました。

25周年を迎えた姉妹都市交流の歴史にはわずかしこ携わっていない自分です。2年前に当別町に居住をはじめ、その年に当別町140年記念式典に参加しました。その際、レクサンドの方々の訪問を受け、はじめて姉妹都市友好交流にふれました。



そして、今回の訪問。出発式での泉亭町長の挨拶で、「友好の種子を蒔きに行ってきます」との決意を話され、**レクサンド市民による歓迎**その言葉をいかに具現化するかが私を含めた訪問団の大きな課題となりました。



記念式典での子どもたちの歌声

レクサンド市では熱烈な歓迎を受けました。私たちが着くと沿道は大勢の市民で埋め尽くされ、私たちの訪問を歓迎してくれました。後で聞いた話ですが、レクサンド市では今回の訪問団の受け入れのために、多くの市民を巻き込みながら準備を進めてきたそうです。初日の歓迎だけでなく、この訪問を通して多くのレクサンド市民がこの記念事業にかかわっていたことが、レクサンド市の姉妹都市交流に対する想いの表れだったと思います。

教育関係にかかわる報告

今回の訪問では、教育に関わる施設等の訪問グループに属していましたので、その報告をいたします。

仕事柄、他国の教育については非常に興味があり、特に北欧のフィンランドの教育などは世界の注目を浴びています。ただ、スウェーデンもそうですが、日本と国の教育政策が違うため、一概に参考になるかどうかは分かりませんが、教育について考えさせられることが多々ありました。その一端を報告します。



レクサンドの小学校

スウェーデンの教育政策の特徴といえば、幼稚園から大学まで授業料など教育費が無料ということがあげられます。そのためか全体的に(子どもも教師も)ゆとり感が伝わってきました。それは、本来あるべき「学びの姿」が感じられたからです。その根幹はどこにあるのかと考えたとき、ストックホルムでの幼稚園園長さんの話が頭に浮かびました。それは「子どもたちは遊びを通して多くのことを学ぶ」ということを話されていました。幼稚園児でも、教えるのではなく、子どもたちに問いかけ考えさせることを大切にしていることには非常に共感できる考えでした。



小学校の野外活動



高校生とのワールド・カフェ

高校ではワールドカフェに参加し、高校生と「日本のイメージ」を互いに語りあい、その後「日本の文化を広めるAction Plan」を論議しました。どの高校生も日本に対するイメージを何かしら持っていることに驚きを感じました。日本の高校生に同じ質問を投げかけても、同じような返答にはならないと思います。それは、日頃から目が外国にも向けられている環境にあり、教育もそうであるような感じを受けました。ちなみに、教育では語学に力を入れており、母国語のスウェーデン語はもちろん、英語でも日常会話ができ、その他の外国語(独語とか仏語とか...)にも力を入れて教育を進めているそうです。

以前はスウェーデンでも上下関係が厳しく、経済的にも余裕のある家庭しか大学に進学できなかったそうです。それが、1960~80年代の国の政策によって誰でも学べる環境が整ってきました。それにより、高校を卒業してから大学に入る前に成人学校に通ったり、海外に留学してから大学にはいるなどのスローライフの国へと進歩をとげてきた歴史があります。

これらが日本にすべて通ずるものとは思いませんが、そこから学ぶことも多いと感じる訪問となりました。

今回の姉妹都市交流をいかに今後につなげていくかが、今回の訪問団の責務と考えます。5年後の30周年記念も大切ですが、その間の交流が非常に重要になってくると思います。この先も続けていくために、私は若い世代が姉妹都市交流(国際交流)に参加・体験する体制を作っていけないかと考えています。小さな繋がりがいずれ大きな花を咲かせます。今回蒔かれた種子を大切に育てていけるよう、私も私の立場で姉妹都市交流に携わっていきたいと思います。

レクサンドの人々の温かさに感謝するとともに、この訪問を企画していただいた多くの方々に感謝し、貴重な体験を少しでも多くの町民に還元していきたいと思います。



友好の記念植樹

当別町 レクサンド市25周年交流を終えて

訪問団員 渡 部 昇

この度、記念事業に一般公募いたしました所、参加できました事、誠に有りがたく思いました。

私は1990年6月に当別町海外行政視察団として、ヨーロッパ研修旅行13日間の内2日間、レクサンド市に公式訪問した事がありました。

私は、農業委員の立場で参加させていただきました。

その時の訪問団は15名で団長は当時の議長でありました宮本源之丞さんでした。

この度、通訳としてお世話になりました八幡敬子さんに大変お世話になりました事、感謝申し上げます。

今回のスケジュールは充実した内容で、私は農業研修グループで、じゃがいも農家と酪農家視察いたしました。日本とスウェーデンの違いを感じた所です。

訪問団の皆様御世話に成りました事、感謝申し上げます。レポートとします。

姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加して

訪問団員 渋谷 政雄

はじめは一枚のチラシからでした。スウェーデンでホームステイしませんか？だったかな。交流団なんて目に入っていませんでした。チラシで申込みをただけで行けるか行けないかわからないのに、友達や仕事仲間にはスウェーデンでホームステイするんだと吹聴していました。ですが、七月九日の最初のミーティングの時にホームステイのメンバーから外れていました。残念と発言したところ、ホームステイができることになり、安心して楽しみにしていました。

ところがまた、出発の二週間前でホームステイができないことになりました。もうスーツケースには支度ができており、あとは相手の家族がどんな家族なのかといろいろ考えていたので、残念でした。

出発当日の見送りの人達の多さにビックリしました。千歳、成田、コペンハーゲン、ストックホルム、乗換え三回・十四時間少々の旅でした。

翌日、スーツに着替えストックホルムからレクサンドへバスで移動、途中昼食を取りながら、三時頃に到着。市内に入ると、たくさんの市民が小旗を振って出迎えてくれていました。市庁舎議場での歓迎式典、ここでも議員さん、役員さん、市民の皆さん、たくさんの人達に迎えられ、感激しました。

七日は、四グループに別れての行動。朝八時から夜十時まで視察、家庭訪問、アイスホッケーの観戦と大変でした。

次の日は、日本公園での桜の木の記念植樹からはじまり、シリアン湖のほとりを徒歩で移動し、特設会場で昼食を取り、その場所で姉妹都市提携二十五周年記念式典。式典では、色々なスウェーデンの伝統的なパフォーマンスを見ながら感激していました。

夕方からは、レクサンド教会で生まれてから死ぬまでの色々な儀式を見学。それから、二十五周年記念パレード、記念食事会、予定より二時間も遅れ、ホテルへ戻ると十二時頃でした。

翌日は二組に別れての行動で昼過ぎに再会し、あずま屋の贈呈式を終えて移動。シリアン湖の船上レストランでのお別れパーティーで二時間ほど景色を見ながらの食事を取りました。五時過ぎにレクサンドを後にしてストックホルムへ。

十日は、ストックホルム市内の視察。この日の行動もグループに別れての研修でしたが、私は高齢者集合住宅の視察、旧市街の散策を終え、昼食場所で全員集合になったのですが、少し遅れたら別席になってしまいました。出発前の五回もの仲間づくりの集いに苦労して出席していたのに、皆さんの顔の見えない所で食事を取ることとなり、残念でした。

個人的には、何かの機会があれば、また行ってみたい国です。

はじめに

2012 年の 1 月頃に新聞折り込みチラシにレクサンド訪問団員一般公募を見て、定年退職後、何かの町公式行事に参加したい願望があり、応募した。数多くの応募者の中から私が選考された理由は聞いていなが、趣味は海外旅行と写真撮影と書いたのが良かったのかと思われる。

私の海外旅行は、在職期間中は数回、中国、インドネシア、オーストラリア等に行き、定年退職後は、ヨーロッパ中心に行く機会があったが、スウェーデンの渡航歴は無かった。以前からは当別町とスウェーデン・レクサンド市と姉妹都市とは知っていたが、インターネットで知る限りであった。

今回は訪問団に参加できたので、レクサンド市民と知り合い、現地の町の様子を知ること、私の担当は記録班とのもので、沢山の記録写真撮影に専念したつもりであった。

事前勉強会及びミーティング

商工会、ふれあい倉庫で合計 5 回のミーティングがあり、最初は自己紹介等があったが、知っている人は 2 名ほど、後は初めて会う人であった。失礼ながら今でも名前と顔が一致しないときがある。皆さん、訪問団員同士として隔たりが無く久しく会話がさせていただいた。

東海大学の川崎教授のスウェーデン・レクサンド講座は、初めて渡航する際には、予備知識として有効だったと思う。それとワールドカフェは初めての経験で、慣れれば、そう難しいものではない印象であった。また、Skype(テレビ電話)を介して、レクサンド担当者の顔が拝見することができたので、現地では再見という感じであった。役場担当者はハイテクが進んでいるとの印象であった。今後、ハイテクを利用し、訪問団活動を広く町民に PR していただきたいと感じた。



最終の海外旅行の注意点説明は、初めての海外渡航者としては、大変間諷付くことが多かったが、説明も十分され

ていたように思う。レクサンドは夏休み期間が長く、未確定事項が山積していたにも関わらず、役場の担当者、旅行会社は苦勞して行程計画を作成してくれたことに感謝申しあげたい。

9 月 5 日レクサンドに向け出発

朝 5 時、総合体育館に集合し、旅行バックをバスへ持って預けた。早朝にかかわらず、送別の人沢山いたので、今回の訪問団に対する期待が大きいことを感じた。早速、

名札、両国旗のバッジを頂き、身につけた。国旗掲揚ポールには日本、スウェーデンの国旗が掲揚されていたが、残念ながら風が無いためなびいていなかった。国旗掲揚ポール前に参加者紹介順に整列して、町長、議長、山田会長の挨拶があり、最後に JA 北石狩の佐藤組合長から送別の励ましの言葉があり、結団式を終え、バスに乗車した。



7 時前に新千歳空港に到着し成田行 7 時 50 分発 NH2152 便搭乗チェックインを済ませ、ANA 手荷物に旅行バックを預けるが、重量は 18kg と楽々パスであった。

9 時前に成田空港第一ターミナルに到着し、国際線乗継ゲートからすぐに出国検査を済ませ、両替した。コペンハーゲン行 11 時 40 分発 SK984 便コペンハーゲン行き(私、スカンジナビアエアラインは初めて)に搭乗する。機内で現地時間(日本時間-7 時間)に時計を修正する。

16 時頃コペンハーゲンに到着し、EU 入国審査を通過して、ストックホルム行 18 時 10 分発 SK1426 便に搭乗を待つ。搭乗まで時間がかなりあり、自由行動となった。

19時30分頃にストックホルム・アーランダ空港に到着し、預けた手荷物を受け取りポーターに預ける。空港と隣接しているホテルなので、すぐに夕食だった。夕食後ホテル部屋に入ると、自分のバッグと山内さんバッグの入れ違いあり、双方交換して事なきを得た。風呂に入り、明日の着るスーツを用意し、パソコンで本日映した写真をチェックする。ベッドでは時差でなかなか就寝できない。

9月6日ストックホルムからレクサンドへ移動



時差ぼけで3時間程度しか寝ていないが眠気は無かった。朝6時朝食に行ったら私と同様の団員数人に合った。旅行バッグを纏めて部屋の外に出して、朝9時にロビーに下りて、しばらく待つとレクサンド市議会議長、在スウェーデン渡邊大使、駐日スウェーデン大使館参事夫妻と始めて会うので、名刺交換しながら、ロビーにいた皆さんを写真撮影した。

ロビーから徒歩でレクサンドお迎いの2階建バスに乗車する。1階はサルーン風で町長、議会の皆さん、2階見晴らしが良い普通席で我々が乗車した。やはり、バス走行中見た外の景色は当別町とレクサンドは似ていた。木は白樺と蝦夷松？の針葉樹が多かった。

昼食のため、レクサンド近くのドライブイン立ち寄り、近くのダーラhest(巨大な馬)があり、みんなで記念撮影となった。さらにバスは進みレクサンド市に入ったところにクサンド看板と木造船のところでレクサンド橋通過時間調整のために休憩した。



レクサンド橋を渡り終えると、大勢の市民が国旗を振っていたので、我々も車内からスウェーデン国旗を振る。バスが市役所庁舎付近で停車し、降りて、市役所まで200m程度歩いたら、大勢の市民がいた。パイオリンを弾く子供たち、旗を振っている人たち、顔なじみとハグ、挨拶する光景は初めて参加する私にはびっくりした。



レクサンド市庁舎2階議会室に入るや否や、歓迎ドリンク、チョコレートが各団員に配られ、乾杯の挨拶で飲んだ。議席に各自、着席すると、レクサンド議長、市長から歓迎の挨拶があり、町長の挨拶があった。その後記念品交換が、市長と町長、議長同士、交流協会会長同士双方で行われた。

市内にあるホテル・調理専門高等学校で、歓迎夕食会が開催され生徒による生バンド演奏があり、料理も生徒たちが作り、配膳していた。私の着席テーブルには、言葉が堪能な人がいなかったので、双方片言英語では通じるが、会話継続が大変であった。私は手作りストラップと名刺交換をして、仕事の撮影を専念しに別のテーブルに移動したが会場照明、壁が赤系色なので綺麗に撮れるか心配した。

歓迎会が終わり、シリアン湖そばのホテルに、渋谷さんと会部屋であった。持参したパソコンの調子が悪く、エラーが発生し、インターネット閲覧、メールが出来なくなった。

本日は写真データバックアップのみして、睡魔感じ早々に



就寝した。

9月7日4グループに分散して研修



6 時前に起床、熟睡できた。朝食には早いのでホテルの外に散歩に行き、朝のシリアン湖を見た。気温が少々寒い。30度気温の当別と違い予備で上着を1枚持つていくことにした。朝食を終えて、迎えのバスに乗り、日本庭園駐車場でグループ別のバス4台に分乗した。

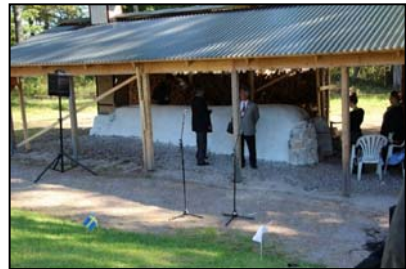
本日の私のグループはD 社会福祉であった。レクサンド隣町の老人ホームでダーラナ州の関係者と、ホーム所長(二人とも女性)が出迎えていただき、入所条件、部屋賃貸料、食事代、暖房、スタッフ数、入居数等について、

所長から説明があった。人数の関係で2組に分かれて、実際入居している部屋を案内していただいた。

部屋は思ったよりも広く約8畳あり、高さ調整とリクライニング付ベッド、簡単な調理が出来るように、電気ヒーター台(高さ調節機能付)があり、トイレが備えてあった。さらに、ベッド天井には、老人を持ち上げ、風呂、車椅子に移動するための、リフトがあった。部屋には家族の写真、置物等があり、プライベート個室に近い様子だった。

老人介護のための器具として、椅子から立ち上げて歩行する電動補助歩行機、移動式風呂、任意の場所で老人を持ち上げる電動移動式リフト、トイレ専用車椅子を見て、さらに介護者の負担を少なくする椅子等、現場での意見を反映した機具開発、改良しているそうだ。私は専門外で評価できないが、病院勤務の堀団員はすぐ動きが滑らかで、使いやすいとのことであった。老人は無理なく介護を受け、また、介護者の重作業等の負担軽減するよう努力していると私は思った。

彫金、焼き物専門学校の食堂で昼食をとり、教室で彫金、^{ろくろ}轆轤をする作業様子を見た。生徒たちは一生懸命作品を制作中であり、その場の雰囲気は良いと感じた。さらに、この学校では日本人女性留学生3人に会うことが出来た。話を聞けば授業料は無料、学校の宿舎に住んでおり、食事代、生活用品のみが必要であるとのこと。



学校長の挨拶で^{あながま}穴釜の^{かいかましき}開窯式を宣言し、レクサンド議長及び市長、当別町長の挨拶をして、3人の日本人留学生を含めてテープカットで式を済ませた。町長から学校長に記念品贈呈があった。驚いたことは窯の傍にいたトーモクハウス社長もこの学校生徒の一員で陶器の製作をしていると本人から聞いた。



近日、スウェーデンを代表する有名作家がこの学校から出ることを期待したい。

その後、レクサンド女性と我が訪問団女性3名の4名で、お茶が^{ふるま}振舞われた。

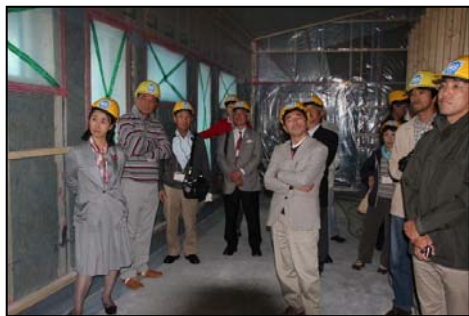
レクサンドの女性(名前不詳)と島田さんがお菓子を配り、日本語の挨拶をしたら、観客から拍手があった。主役の辻野さんが茶道に^{のっとり}則り、お茶碗にお茶とお湯を注ぎ、

^{ちやせん}茶先で混ぜて、茶碗を接待客の手元まで運び、お手前をいただいていた。この場の雰囲気を

盛り上げるために日本の^{こよお}琴音があれば良かったと私は思った。

次に建設中の保育園に出向き、現場責任者に案内していただいた。工事は建物の屋根、外壁が出来、電気工事、配管、内装はこれからの状態であった。この建物はエコ技術を導入し、地中熱ヒートポンプとソーラーパネル採用したところが特徴である。

地中熱ヒートポンプは地下 200m から約 13°C 水をくみ上げて圧搾機により、圧縮すると 63°C の熱が発生し、熱交換器で熱蓄積し、床暖房の熱源一部として利用する。また、最大電力 6KW ソーラーパネルを屋根に設置し、余剰電力は外部供給が可能で、日本でも盛んに導入されているので、私には珍しくなかった。



一般日本建物とは違い、防寒対策がしっかりしていて、壁断熱材(石綿)の厚さ、窓枠は複層ガラスが 2 重、換気システムは建物内部熱を外部に排出を抑えていること等がある。私は、これからの電気配線、配管、機具設置をする施工方法が気になった。

9 月 8 日桜植樹と 25 周年行事

朝は寒い日が続く。ホテル前からバスに乗り、日本庭園駐車場まで行く。日本庭園の名前のついた門柱があり、そばには既に約 4m 高さ桜 20 本が道路に沿って植樹されていた。これから植樹する桜 5 本の前にはレクサンド市民が大勢いて、その近くにはテントがあり、飲み物と桜花弁のついたチョコレートが用意されて、美味しく食した。誰の発想か心憎い演出だと思う。

当別町訪問団とレクサンド市民が混在になり、5 本の桜の前に整列した、企画したレーナさん、土地の所有者である牧師さんが挨拶をした。レクサンド議長、市長、町長の順に挨拶が続いた。スコップを用いて、桜 1 本毎にレクサンド議長、レクサンド市長、当別町長、当別議長、札幌スウェーデン名誉領事、そして、5 人の若者も加わり桜の木を植樹した。



2002 年植樹した桜の前で、ストックホルム在住のご婦人で構成されたグループ「桜コーラス」が童謡唱歌「さくら」を熱唱した。その後、婦人方による「着物ショー」が華やかに開催された。

2002 年植えた桜木の前に市長と町長が用意して会った長椅子に座り、写真に納まった。

日本庭園には 2002 年設置した石塘路^{いしどうろ}、池を見ながら、近くの教会まで徒歩 5 分程度であった。教会門を入ると休日のためにバザーが開催されていて、自分たちで作ったジャムとか日用品が売られていた。

急いでレクサンド橋隣の船着場まで 30 分程度歩き、途中で赤い実をつけた「ななかまど」を発見した。船着場に到着したら、テント内で昼食していたので、私も皿に食べ物を取り、空席を見つけて座ったら、傍に渡邊大使夫人がいらしたので、自作ストラップを渡した。食べ終えて、姉妹都市提携 25 周年式典メインテントを見たら白い石に日本語で字が書いてあるのを発見し、町長も興味があり、石を持っていただき写真撮影した。傍にはインターネット配信用のカメラがあり、パソコンを操作していた。姉妹都市提携 25 周年記念式



典は、会場設営したレクサンド市民が挨拶した。船着場に徐々に向かってくる小型舟に凡そ 25 名男女がいて、舟先ではバイオリンを弾いている人、時々オールを上げている人がいた。船着場に到着すると、それぞれ船着場上がり、バイオリンを弾いて、フォークダンスを踊っていた。そのとき小雨が降ってきた。ストックホルム在住婦人「桜コーラス」が「世界の約束」「君をのせて」を日本語熱唱し、さらに市民コーラスも加わり盛り上げた。レクサンド小学

生のコーラスも花を添えた。レクサンド市長、町長、渡邊大使が順に式典挨拶をし、25周年に功労の合った人達の表彰があった。最後に日本語で書かれた白い石に願いをこめて投石して、記念行事を終えた。一旦着替えのためにホテルに戻り、少し休憩をした。

17時頃当別町の法被^{ほっぴ}を着てホテルを出発し、レクサンド教会に向かった。教会には我々以外に一般市民が多数いた。祭壇左端で女性がスウェーデン語で何を言っているかは不明の中、神父、民族衣装を着た女性が4~6人が祭壇通路を歩いて祭壇前に立つと、重厚なパイプオルガンの音に合わせコーラスがあり素晴らしかった。(私は教会のパイプオルガン、コーラスを聴くのは初めてであった。)神父、民族衣装を着た女性が通路を通り元の場所に戻った。このように数回、神父が衣装を変えて同じことを繰り返していた。後で、人間の一生を表したものとわかった。



教会の外でパレードの準備をした。スウェーデン国旗、レクサンド市旗、日本国旗、当別町旗の旗と日本から持ってきた提灯^{ちゅうちん}の蠟燭^{ろうそく}に火をつけて、日本国旗とスウェーデン国旗を先頭



にバイオリンを弾く人の後に我々が続き、レクサンド市民も加わるパレードであった。パレードの途中で時々沿道の人が手を上げる人もいた。なぜかクラシックカーがパレード沿道にあり、参加しているようだった。

記念夕食会場はレクサンド市から少し郊外にあるモスコゲンホテルで開催された。会場は結構広く凡そ200名いたと思われる。レクサンド議長、市長、町長の挨拶を

終えて、町長が記念品を贈呈するために壇上に上がると隣町の市長、ダーラナ州知事が女性だった。

二ノ宮団員により英語で詩吟の説明が行われ、大畑団員が詩吟を披露した。さすがに、いい声であった。また、川崎教授の解説で東海大学の女子大生4人による日本語の歌が披露された。結局、記念夕食会は24時まで続き、ホテルに着いたら午前様だった。



9月9日シリアン湖周辺散策、船上お別れパーティー

朝のシリアン湖の気温は0°C付近、寒さ対策で薄手のセーターとタイツを着用した。お迎えのバスに乗り、レクサンド橋付近を通過したら、昨日の式典で使われたテント、椅子は綺麗に片付けられて、普段の船着場となっていた。シリアン湖を周回するようにバスは走った。

ヨブズ染色工場に到着し、休日で作業員不在なので若奥さん1人で説明していただいた。長さ30m以上長い布を専用台が敷いてあって、色事の型紙(概算1m×1.5m)が沢山(デザインが複雑になると型紙の枚数が増える)あり、布端から順にインクを型紙の上において、大きなローラによりインクを生地に載せていく手法である。インクを伸ばすことの一連作業を30m先まで繰り返す。使用する色が多いとこの作業が多くなる。この工場の売店では良い製品が沢山あり、特に女性は買い物で忙しかったようである。私がシリアン湖を望むと、昨日のレクサンド教会が遠くに見えたので、撮影をした。



次に自然博物館を見学した。シリアン湖付近のトナカイ、^{ふくろう}鳥、熊、狐等の動物剥製があり、偏った動物生態系にならないように、年間、決められた数を狩猟して数を調節していることを知った。シリアン湖は昔約直径3km隕石が落下してできたことを知った。最

後に高さ 15m? の展望台に上がり、シリアン湖を眺望した。

昼食は工場から近くの湖畔レストランで、テーブルの上には熊の剥製がおりてあり、ハム・ソーセージにして、出してあるとのこととびっくりした。

昼食を終えて、25 周年行事をした船着場に来た。そこには総長約 30m の船があった。中はちょっと狭いが、着席すると、シリアン湖のほうへ穏やかに波も無く出航した。ニゴード議長の司会挨拶で宴会が始まった。議長、町長の挨拶の中で、これからの交流は若者に引き継いでもらう努力が必要とのことと印象に残った。町長の日本語の当て字の色紙がレクサンド議長、市長に贈られた。最後に、町長から 25 年間レクサンドの架け橋になっていた Keiko Yahata さんへ感謝状を贈ると、熱いものが落ちてきた。また、ニゴード議長の「上を向いて



歩こう」の日本語の歌が印象に残った

シリアン湖を半周程度航行して元の船着場に到着、下船して、レクサンド市民と暫くの別れをし、バスに乗りストックホルム郊外のホテルに深夜宿泊した。

9 月 10 日 4 グループ分散、ストックホルム市内、大使公邸訪問

朝ホテルから、4 グループに分散しての研修である。私は、D 高齢者住宅研修のグループであった。ストックホルム市内はかなりの渋滞で、なかなか動かないので、運転手の計らいで裏道を通ったので、ほぼ予定通りに目的の住宅に到着した。



玄関を入ると一見病院風のコンクリート造りの建物で、エレベーターで 4 階だったかの集会室に案内されて、この住宅の入所条件、家賃、食費代、施設の設備などの概要説明していただいた。廊下は日本にあるマンション風で、廊下向かいには個室となっていた。居住中なので、残念ながら部屋を見ることは出来なかった。中庭に出てみると、窓の位置からかなり広い部屋の様子が伺えた。窓に雀がいたので、誰かが餌を与えているようであった。中庭から読書室に案内されると、5、6 人の老人と介護者 4 人が読書をしていた。私たちの入室で雰囲気が変わり、お互いに声をかけて和みがあった。御礼の挨拶をして、この住宅を出た。

住宅からバスに乗り、ストックホルム市内旧市街に移動する。王宮前でバスを降り、観光開始である。ちょうど王宮衛兵交代式が昼食前にあり、何とか写真撮影できた。おかげでノーベル博物館前のレストランでの昼食は、我々のグループは最後になった。昼食を終えてお土産屋で、スウェーデンワッペン 3 枚、自分のためにスウェーデン国旗を購入した。



昼食後、王宮内部を見るが、残念ながら写真撮影禁止で写真が無いので、言葉の表現が難しいが、フランスのベルサイユ宮殿ほどの派手さはなかったが、それなりの部屋

は豪華な装飾であった。

その後でストックホルム市庁舎を見学した。

庁舎全景が見える場所で全員の集合写真を撮影し、内部に入ったらノーベル賞受賞記念舞踏会の会場だった。議会室は赤色で統一されて、天井は高く、船を引っ繰り返したような構造であった。



在スウェーデン大使公宅は、ストックホルム高級住宅街にあった。公宅は閑静な景色が良い場所と周辺の家と調和した 3 階建風、敷地は約 1000m²の広さがあり、庭は芝生、テニスコ

一ト付であった。玄関入口は 1.5 階程度少し高い階段を登り、玄関に入ると見事なシルク絨毯^{じゅうたん}が敷いてあり、さらに応接間らしきところにもシルク絨毯が敷いてあった。私は今年本場トルコ絨毯をみていたので、値段を想像した。応接間を過ぎて階段を下りていくと、そこは約 30 畳のパーティー会場があり、各自飲み物を持ち、渡邊大使の挨拶の後、町長の乾杯でパーティーが開始された。料理はハム類、サラダ、一番人気があった握り寿司^{にぎりずし}があった。会場で初めてお会いした美人斉藤書記官と写真を撮った。庭に出て大使、町長をはじめ、みんなで和気藹々^{わきあいあい}と写真撮影をして、この訪問団の最後の記念とした。最後に高谷議長の「やっと通訳が要らない」の一言が笑いとなり、閉めの乾杯を行った。ホテルに戻るためバスに乗り、門ゲートで大使館の人達が手を振って見送ってくれた。ホテルに到着し、パソコン内に写真をバックアップ、旅行かばん内にお土産を整理して、就寝した。



9月11日ストックホルム・アーランダ空港から成田空港へ移動

朝 8 時 30 分、ホテルからバスに乗り、アーランダ空港まで 20 分程度で到着した。旅行バックを持って搭乗手続きをしたが、大変混雑していたので、読めない文字の機械で自動チェックインし、旅行バックの重量を気にしながら手荷物として預けた。重量は 21kg で、特に追加料金は無かった。日本の航空社と違い、サービスは良くない。12 時 20 分発コペンハーゲン行 SK1421 に搭乗し、15 時 50 分成田空港行 SK983 便に乗り継ぎをした。

9月12日成田空港から当別へ移動

12 日 9 時 30 分頃、無事に成田空港第一ターミナルに到着する。入国審査を済ませてから、預けた手荷物の旅行バックを受け取り、税関を無事にパスした。全員で成田空港からバスで 1 時間程、羽田空港第二ターミナルに到着し搭乗券を受け取り、旅行バックを預けた。支給弁当を空港ラウンジ内で美味しく食した。13 時 15 分発 NH4725 新千歳空港行(ANA と AIRDO 共同運航便)で 15 時 45 分頃に新千歳空港に到着し、手荷物の旅行バッグを受け取り、手配のバスに乗車した。高速道路走行中、黒い入道雲を発見し、当別、岩見沢は雨でないことを祈った。16 時 40 分頃、全員無事に当別町総合体育館に到着した。出発ほどではないが大勢の出迎えがあり、高谷議長のお礼の挨拶をし、解散となった。私は自宅まで 3 分位の場所なので歩いて帰宅した。疲れたので早めに就寝した。



最後に

今回の訪問団に初めて参加し、レクサンド市民の暖かい歓迎出合いがあり、式典・行事の進行内容、社会福祉の素晴らしさが体験できた。また、スウェーデン大使公宅を訪問し、大使、大使奥様、3 人書記官にお会いでき嬉しかった。通常の海外旅行では、経験できないことばかりであった。

私自信の反省点は言葉の問題で、学生時代、もっと真剣に英語を勉強しなかった後悔があった。写真撮影であるが、失敗を含めて約 1500 枚写したが、写真技術が未熟なところが多いので、式典、参加者を綺麗に取れなかったことである。(撮った写真はスライドショーに編集中心であるが、一部音楽を使用するので、著作権を支払い完成させる予定である。)

当別町も町作りの中でスウェーデン、レクサンドの良いところがあれば、町政に反映していただきたい。出来れば 5 年後の姉妹都市提携 30 周年の当別訪問の際は微力ですが私も協力させていただくつもりである。

この訪問団参加させていただき、関係者、参加者の皆様に貴重な体験をさせていただき、感謝申し上げます。

レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団の一員となって

訪問団員 大畑 富雄

このことについて、一般公募に応募し幸いにも選ばれ、9月5日から12日までの8日間、レクサンド市を訪問する機会を得ました。多くの方々が、各々詳しいレポートをなされることとしますので、私は簡単に概要と感想を述べたいと思います。

スウェーデンは人口約950万人、面積は日本の1.2倍、森と湖の多い美しい国として有名。湖は9万個以上もあり、森林率は日本とほぼ同じだそうです。人口密度から言って日本の3倍とか5倍とかに相当すると思われまます。レクサンド市も人口は15,500人と当別町より少ないのですが、街並みは大きくゆったりしていると感じました。

気候は寒く日照時間も短く、雪は5、60cmと少ない。教育や老後の社会保障はしっかりしているけど、その分税金が高い。(租税負担率50~60%と云われます)

男女平等の国で国会議員の46%は女性だそうです。レクサンド市においても女性の活躍がとても目立っていました。

私の気づいたレクサンド市の特徴を申し上げますと、信号が全く無いこと、行く先々、郊外に至るまで道路脇の草がぼうぼうになっていなかった。周りの木々が真っ直ぐに伸びている、赤松までも。(強い風が吹かないからのようです)当別のスウェーデンヒルズ同様、電線がなく塀もない。家の周りの芝のグリーン、綺麗な空の青に赤い家屋がマッチしてとても美しい街でした。人柄は大らかで開放的(家庭訪問でトイレや寝室までもすべて見せてくれました。私たちにとはとても出来そうに無いことです。)夜はカーテンを引かないようで、家々から灯りが見えます。窓辺にある飾り物は、外から見ると人が楽しめるように飾ってある等、日本人との考え方の違いが見て取れます。照明は暖色系を使用。(LEDは白色系なので使用しないとのこと)あまり明るくしないで机上や窓辺にローソクを灯す。柔らかい暖かい雰囲気がとても素敵でした。

さて、今回の訪問で、私が永く詩吟を続けていることが認められて、日本の伝統芸能披露の一端としてレクサンドの人々に聞いていただく事になりました。

9月8日夜、25周年記念夕食会での発表です。日本の象徴とも言える富士山の雄大さ、美しさ、素晴らしさを詠った詩、柴野栗山の作「富士山」を吟じさせて頂きました。果たして外国人の方々には、どの様に聞こえたのでしょうか？また、どのように伝わったのでしょうか？決して華やかとは言えない詩吟なので、お役に立てたのかどうか分かりませんが、伝統芸能披露と云う形の中で、当別町とレクサンド市の交流事業に関わりを持たせて頂いたこと、私の吟歴に新たな1ページを加える機会をいただきましたことに心から感謝と御礼を申し上げます。

私は、以前からレクサンド市との姉妹都市提携は知っていました。20周年の時の、スウェーデン大通りでのパレードの声援にも参加しましたが、余り深い考えは持っていませんでした。今回25周年事業に参加させていただき、この事業は大変重要で大切なことであると痛感いたしました。世情や文化、宗教などの違いから生じる紛争を避け、共に発展していくためには、

更なる深い絆を紡いでいくことが大切だと思います。

スウェーデンには1,500人位の日本人が滞在していると推定されています。この人達が様々な形で活躍しています。通訳をして下さったり、ガイドを引き受けて下さったり、舞踊や茶道、華道を広めたり、着物ショーや日本の歌を広めたり、日本文化の紹介に懸命の努力を払われていることに、頭の下がる思いをいたしました。こうした人達を勇気づけるためにも、30年、40年、50年と交流を積み重ねられ、当別町やレクサンド市が益々栄えられるよう期待して止みません。

帰国後、「どこが良かったですか？」と聞かれます。物見遊山では有りませんので観光廻りはしていませんと答えています。今ノーベル賞が話題になっています。その会場が写し出され、あそこに行ってきたと思うととても光栄です。5年後、30周年事業が当別町で開催されます。元気にレクサンドの方々の歓迎行事に参加したいものだと願っています。有難うございました。



訪問団員 辻野道子

当別町の国際交流事業と関わりを持つようになったのは、2005年4月にレクサンドの職業専門学校のアンナのホームステイを受け入れたのが始まりでした。以来、たくさんの貴重な出会いがありました。私にとって姉妹都市レクサンドは親戚が住んでいるような気がする街となりました。

“Vi ses igen!”(またね!)と、当別でお別れの挨拶をした人々とレクサンドで再会できる事は今回の訪問で一番楽しみな事でした。他に知りたい事とやりたい事が1つずつありました。知りたい事は、おもてなしの心についてです。自分自身1度もホームステイを経験したことがない中で、ホストファミリーを続けてきて、毎回これで良かったのか?と、自信が持てなかったからです。やりたい事は、茶道を通じた文化交流をレクサンド市民と協力して行う事でした。

私のホームステイ先は2007年3月に当別に来たパン焼き名人インガのお宅です。“ステイ先が決まっていらないなら家にいらしゃい”とお誘いがありましたので、ありがたくお受けしました。レクサンドに到着した時、私の体調が悪かったために、一緒に参加予定だった歓迎夕食会は欠席することになってしまい、インガには申し訳ないことをしました。翌朝からは少し



美しい母屋のダイニングルーム

体調も良くなり、食べ物を味わえるようになりました。朝食のメニューはハム、チーズ、バター、クネツケブロード、黒パン、紅茶で、これは3回の朝食すべて同じでした。黒パンは手作りでした。一度にたくさん焼いて冷凍しておいて少しずつ食べるのだそうです。お湯を沸かしている間にパンを切って並べるこの朝食の準備は、日本の和朝食と比べてずいぶん手間がかからないなと思いました。けれども、黒パンを焼くのはご飯を炊くよりずっと手間がかかります。夕食は1回だけ、ホストファミリー宅で頂きました。前菜は黒パンのクリームソースがけ、メインはお兄さんが森でとめたヘラジカの肉とコケモモのゼリー、人参のソテー、グリーンサラダ、ジャガイモとブラウンソース、デザートはリンゴのプレザーブとアーモンドのケーキ。すべて手作り、とても美味しかったです。インガは私の送迎や交流プログラムに参加していて目の回るような忙しさだったに違いないのだけれど、完璧なディナーでした。聞くと、色々な物を半調理して冷凍していると言う事でした。保存食とフリージングを活用することで我が家の食事の準備は、改善できるかもしれないと思いました。



お兄さんのアーネ、アーネの孫ハンナ、ご主人インゲマル、インガとパン焼きの仲間のアリスとディナーをサニールームで

ろから始め、4年かけて今年完成した、母屋同様の丸太組の家でした。手作りの料理と手作

インガの家は深い森の中にあります。道路は未舗装です。市庁舎から20キロ位の所に昔サマーハウスとして使っていた家を少しずつ増築していった丸太組の手作りの家がありました。朝晩は2℃位で外はとても寒かったのですが、家の中はとても暖かかったです。私が泊まったのは、その家の横に建つ新築の離れでした。ご主人のインゲマルが森から木を切り出すところ

りの家、インガとインゲマルはスローライフを実践するベストカップルなのだと思います。大自然のなかでのシンプルな暮らしはとても快適でした。“ありのままのおもてなし”がこれからの我が家でのホストファミリーとしてめざすスタイルになることでしょう。

レクサンド滞在2日目は成人学校陶芸コースに新設された日本式の窯の開窯式があり、私は開窯式の後に茶道の披露を担当しました。事前に得られた情報はわずかだったので、準備はとても大変だったのですが、当日たくさんのレクサンド市民と訪問団員の方々の協力を得る事ができ、滞りなく披露することができ、とても感謝しています。ただ披露するだけではなく、“茶道を通じた文化交流をレクサンド市民と協力して行う”事ができたのでとても嬉しかったです。



天気予報は雨…あたらなくてヨカッタ

水屋に必要な物の準備、テーブルと椅子の配置等、成人学校のスタッフの方には短い時間の中で、色々な要望に応じていただきました。そして、なんといってもハンナ。ハンナはとても良い働きをしてくれました。彼女は6か月前に我が家に滞在したホームステイステュデントでした。レクサンド高校で日本語を履修しているだけあって、日本語も上手で日本の文化にとっても興味を持っていました。当別滞在中に茶道を体験し、意欲的に取り組んでいました。当日はお菓子やお茶を運ぶ事をお願いしました。“オカシヨドウゾ”、“ドウゾゴユックリ”と彼女が言うと会場が一瞬で和やかな雰囲気になりました。ただ単に日本人がお茶を点てて、スウェーデン人がお茶を頂くだけではなく、実際に当別で茶道体験をした



八幡さんが用意して下さったレクサンドの野の花とハンナ

レクサンド市民がその体験を基に当別町民と協力して茶道を披露できたのは、盛んな姉妹都市交流があつて、人と人との交流があるからできた事だと思います。ハンナがレクサンドの民族衣装に帛紗を着けてお手伝いしてくれる姿は、3月に当別で撒いた種が、9月にレクサンドで開いた花を見たような気持ちでした。

この茶道の披露はたくさんの方に“良かったよ”とお褒めの言葉を頂きました。当別裏千家茶道同好会鹿野教授と教室の皆様、訪問団の方々、特に坂本千鶴さん、島田かおるさん、公式通訳の伊藤さんのサポートのお陰とっております。この場を借りて心からお礼申し上げます。

スウェーデンは遠くにある国ですが、当別に住んでいるとレクサンドはとても近く感じます。当別に住んでいて本当に良かったと思います。冬、一日に何度も雪かきをする日は、いつまで当別で暮らせるのだろうとふと思ったりすることもあるのですが、毎年行われる夏至祭、ホームステイ受け入れ、5年ごとに行われる姉妹都市交流記念行事は私に当別暮らしを続けさせるエネルギーを与えてくれます。大自然に囲まれて穏やかな暮らしをする人々と交流をもち、生活の質を上げるヒントを得、また茶道を通じた文化交流で両都市のかけ橋になれるように願って、スウェーデン語の修得、茶道の修行に励もうと思いを新たにしました訪問でした。このような貴重な機会を与えてくださった当別町、当別・レクサンド都市交流協会の皆様、ありがとうございました。

訪問団員 鶴野 彩子

1. はじめに

今回、私は一般公募枠で本事業に参加することができました。

およそ一週間の研修期間中、とても貴重な経験・体験を多くすることができましたがホームステイ体験、レクサンドで出会った人たちとの交流を中心に以下に報告致します。

2. ホームステイ体験

受け入れて下さったホストファミリーはパパ、ママ、娘さんの3人家族で、とてもフレンドリーで初めて会ったときから家族同然のように接してくれました。3人は20周年式典の時に当別へ来町したことがあるそうで、自宅にはその時に東京で買ったという東京タワーや浅草寺のイラストが入ったタペストリーが飾ってあり、また、驚くことに車を6台も所有していて(全てボルボ車)、もう1台また買おうかなと話していたことには驚きました。驚いたエピソードはまだあります。



朝、朝食を食べようと台所へ行ったら用意してあった

バターにバターナイフが垂直に刺さっていたのです。日本では決してやってはいけないのですが、こういう風習がないので逆にどうしていけないのか、質問されてしまいました。それから台所を見渡してもどこにもゴミ箱がありません。ゴミはどこへ捨てればいいのか聞くと流し台の下のキャビネットの中がありました。他に食器洗浄機もあり、どうりで台所はスッキリしているなと思いましたが、収納場所があると知り納得しました。



タイトな日程だったので家族とゆっくり過ごす時間はありませんでしたが少し遅い時間で疲れていても軽くお酒を飲みながらアイスホッケーの試合をテレビで見たり、YATZY(ヤッツィー)と言うサイコロを使ったゲームをしたりして楽しみました。

短い滞在にも関わらず、お土産としてホッケー観戦時に買ってくれたバスタオルや大盛り上がりした YATZY、帰りの道中のことまで心配して飲み物やお菓子を用意してくれ嬉しかったです。最終日はしばらく会えないのかと思うと自分でも信じられませんが涙が出てきてしまい、少しばかり“ウルルン滞在記”を味わった気分になってしまいました。何度も「またいつでもおいで」と言ってくれたのにはとても感激しました。

3. レクサンドで出会った同年代との交流

今回の団員の中で一番若手の私は、積極的に交流を図ろうと訪問前から決めていましたが、本来の性格もあってか思ったほどできなかった部分もありました。

それでもレクサンド高校へ通う高校生、札幌へ留学経験のある同い年の方たちと知り合えたのは大きな収穫でした。



左の写真はレクサンド高校で行われたワールドカフェで同じテーブルになった方たちと撮ったものです。プログラム終了直前にテーブルにあった紙で急いで鶴を折ってプレゼントしたらとても喜んでくれました。(一番手前の方は日本からの留学生。留学期間は1年間で8月に来たばかりだそうです。)

今回知り合えた方々の日本への関心はとても強く、来年日本へ行けるチャンスがあるから絶対に行きたい！そのメンバーに選ばれたいんだ！と強く言っていたので、是非来て、私たちがそうだったように日本を肌で感じてほしいです。彼女たちをはじめ、滞在中知り合えた多くの方は facebook を利用しているので今後もこれらを通して交流を図っていきたいです。

4. 今後の課題と総括

帰国した今、今後の課題の多さに焦りを感じました。それは30周年へ向けた今後5年間をどう過ごすかにより、当別町とレクサンド市の関係が決定的なものになると思ったからです。訪問中、何度も「これからは若い世代へ」との言葉を耳にしました。これからも友好関係を発



展させ、且つ、若い世代へ根を張らせるためには教育機関の協力が必須ですが、例えば『レクサンドデー』を設け給食をスウェーデン料理にし、その日はレクサンドの子どもたちと Skype を通して交流を図るなど、計画してみるのも楽しいかもしれません。

また、せっかく作ったレクサンド式パン釜が活かされていないのは残念です。このパン窯活用も町民へレクサンド市を知ってもら一つのツールではないのでしょうか。

私自身、はじめての訪問で課題も残った研修でしたが、もっとスウェーデン、レクサンドのことが知りたくなり、なるべく早くまたレクサンドを訪問したいです。

最後になりますが、今回の訪問は多くの方々のご協力なしでは実現できませんでした。ご迷惑をお掛けした点もありましたが、今後も微力ながらお手伝いできることがあれば積極的に携わりたいです。ありがとうございました。

1.はじめに

今回の訪問団の応募にあたり、スウェーデンの、自然との共存をうたう優れた環境法典がどのように生かされているのか、日本の原発の是非を問うての攻撃しあうニュースが流れる日々のなかで、国民が30年前に脱原発を選択してどんな工夫がされているのかを見てみたいと思いました。

出発当日、朝 5:00 集合にもかかわらず、200人(?)近い方たちに集まって戴いての結団式と壮行会に、当別町の訪問団の一員であることの自覚と姉妹都市交流の目的に気を引き締めました。

2. レクサンド市において

レクサンドへ向かう朝。レクサンド市議会ラッセ・ニーゴード議長、スウェーデン外務省のカイさんご夫妻と渡邊大使のご挨拶に、緊張しましたが、町長はじめ議員の皆さんや訪問団の他の皆さんに頼って、深呼吸することができました。



ずーっと続くスウェーデンヒルズを見ながらレクサンドに入りました。沿道に歓迎をしてくれる笑顔の人の列にぐっと胸が熱くなりました。横で他の方も同じ思いでいるのが解りました。バスを降り、市役所へ向かう通りには憧れのヨーロッパのカフェテラスがあり、歓迎の踊りをしてくれる高齢の男性も。市役所前では子供たちが大人と一緒にバイオリン演奏で迎えてくださいました。

レクサンド市の議場での歓迎式典を終えホテルへ。ダレカリアホテルは、古いたたずまいでしたが、開きドアタイプの自動ドア、コンピューター制御のホテルで



した。バスルームはお湯の配管を除湿とタオルの乾燥に利用(?)し、ルーム温度は非常に良く管理されていました。

レクサンド高校は昔、アンデルセンが住んでいた建物を使っています。校長先生のマリアさんはユーモアたっぷりのご挨拶で、高校へと案内してくださいました。高校には、ヨーロッパで有数のホテルのサービスコースと料理人育成コースがあり、高校生たちのポップス音楽演奏とサービスと料理で歓迎会をして戴きました。ヘラジカとトナカイの肉に、北欧へ来た実感が湧きました。フレンドリーなレクサンドの皆さんに、親戚の所へでも来たような感覚になりました。



翌日9月7日は、市の福祉局長さんと所長さんの説明と案内でチブレ老人ホームを見学。ここは歴史あるホームで、建物はそのまま使い続けているそうですが、とても綺麗な印象を受けました。中学生が職業体験をしていました。日本でよく見受けられる入居者さんの作品展といった壁の利用がなくすっきりしていましたのは、国民性の違いでしょうか。エネルギー源として、ペレットを使用するボイラーを使用しているとのこと。「日本のボイラーが軽自動車なら、ド

「ドイツ製のボイラーはF1車」と言われるほど違うそうですが、地産地消のペレットで熱供給していて、小さく自立しているのを感じました。

国の制度は違いますが、ケアマネージャーやケアワーカーと自分史の作成やエンディングノートの作成という日本と同じ取り組みをしていました。介護用具の改良が進んでいて、手触りはスチールのような堅さがあり、軽量で女性の力でも片手で簡単に移動でき、体重を支える物は電動で、サイズは全てが変更可能でした。今では腱鞘炎も腰痛も職員には無いとのことでした。



保育所の建設現場見学では、市の不動産局長ラース・ニールソンさんから説明を受けたのですが、20～25年前と比べると8分の1から10分の1でエネルギーを賄う低エネルギー建造物となっていること。主要熱源は地熱で65パーセントを賄っていて、地下200m掘って4～5℃の水に圧力をかけて65℃まで上げて利用し、南側の屋根にはソーラーパネルを設置して20パーセントの熱源を賄い、残り15パーセントについて電源を利用している。建設工法はスウェーデンで一般的なプレハブ工法で床と屋根を作るまでで3週間。換気設備は85パーセントの熱を再利用し、温度・湿度・換気はコンピューター制御している。高気密な建物であることが絶対条件であり、断熱材は屋根50cm、床30～35cm使用し、エコベット(ECOBATT)というスウェーデンの地質の花崗岩を溶かし、石綿にしたものを使用している。壁に利用する目的は、断熱の他に火災に強いから。コンセントを断熱に必要な外周りの壁側には設置せず、中周りの壁にだけ設置すると聞いて、「スウェーデン人は合理的な考え方にはすぐ替わるんです。今まではどうだったと言う人はいないんです。」とレクサンドでお世話になった八幡さんから伺いました。

製材は、北ダーラナ地方モーラのものを使用していました。15人4組の60人定員で、レクサンド中心部の保育所全部の給食300人分を作る調理室を持ち、外の温度がマイナスになったときだけエネルギーを消費する建物だそうです。



家庭訪問では、元は小学校というお宅を拝見しました。家族で過ごす居間を大きくホテルのロビーのように取り、3つのブースに分けて使っていました。2階の個々の寝室はわりと狭く感じましたが、子供部屋の滑り台付きの2段ベッドや遊び場は心のゆとりを感じました。寝室まで見せて頂いたり、敷地内にゲストルームという別棟の離れがあるのも驚きました。スウェーデンでは、子供は世帯を持ったら親とは暮らさないのが当たり前のこと。きれいに刈った芝の中庭と花壇があって、鶏や猫が歩く、美しい芸術家の女性のお宅でした。

穴窯完成の茶席は成人学校の中庭で行われ、この学校には2人の日本人女性が留学していました。「サービスの特殊なコースがあり大阪大学を出て運良くこちらに来て、ごく普通に受け入れてくれる、日本とこんなに交流している街の存在に驚きました」とおっしゃっていました。

フォークダンスの夕べではバイオリン演奏に迎えられ、レクサンドの方たちと入り交じってのお食事に言葉の壁は大変でしたが何とか交流してみました。5年前に当別でホームステイされたことや学校の先生をされていたことがわかり、互いの家族の様子を交流しました。その後、鑑賞ではなく、共に踊るダンスの夕べを経験し感激でした。

9月8日(土)は姉妹都市提携25周年記念式典に先立ち、日本庭園で桜の植樹があり、牧師様から教会の農場にこの庭を造った逸話を伺いました。日本との交流を教会が大事にして下さっていました。日本庭園の川の縁に、洋花が水芭蕉か水仙のように咲いているのが微笑ましい景観でした。近くにバザー会場があり、レクサンドの蜂蜜はヨーロッパでも有名とのことで、購入タイムになりました。

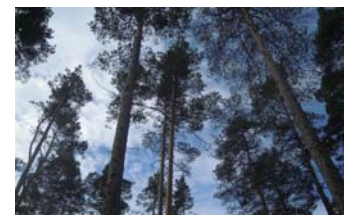


式典は、シリアン湖の岸辺の特設会場でした。歩いていると車で送ってくださり助かりました。市民の方がたくさん参加され、一緒に食事をバイキングで楽しみ、私たちのテーブルには木材を輸出している会社の社長さんが娘さんと一緒に座り、着物の帯の結び方を娘さんに尋ねられたりしました。民族衣装を着た方々が、船を漕いでバイオリンの演奏と共に現れオープニング。雨が降るとすぐビニールのポンチョが配られるなど気遣いに感謝です。寒かったですが無事に終わり、暖かいお茶とケーキが振る舞われました。

レクサンド教会で人が生まれてから死ぬまでの民族衣装の礼装を見せていただき、それに併せて教会の礼拝の合唱を聴かせていただきました。その後、半被を着てパレードし、提灯をレクサンドの皆さんに喜んでもらいました。バスに向かって歩いていると、男性に話しかけられ見学の感想を尋ねられました。「チブレホームの見学でレクサンドのシステムが素晴らしいと思いました」とお話ししました。記念晩餐会は夜遅くまで続きました。

9月9日(日)最終日は、パークゴルフです。9番ホールから1番ホールへ向かうときに森の中を歩きました。よく手入れがなされているので森の香りにフワッと包まれたり、カリンズやブルーベリーが散策路にあって食べたりと。クリスマスに100年以上の年輪の木を規制された伐採率1.2%で伐採します。100年を基準に物事を考えて実行している事にうらやましいような安堵感をもちました。レクサンドの方が自慢げに見えました。これが「自然享受権」をうたう環境法典の表れでしょうか。結果はともあれ9ホールを2回。参加記念をいただき無事終了。食事の席では5年前に当別を来訪された男性が私たちのテーブルに座られ、5年後の再会を約束して別れました。

あずまやの贈呈式はたくさんの市民の方が参列されました。



グスタフバーサ号という船に乗ってシリアン湖を2時間ほど巡ってお別れパーティーがあり、ニーゴード議長が歌う「上を向いて歩こう」がクライマックスとなりました。レクサンドを名残惜しく離れました。

3.ストックホルムにて

朝ホテルを出てストックホルム名物の渋滞を見学し、市内に入って進路を変え右折するとき、標識にバスの窓ガラスがぶつかり損傷しましたが、無事に循環エネルギーモデル地区ハンマルビー地区を見学しました。ここは湿地帯で埋め立て地だったので、旧貧民街、ゴミ捨て場で下請け工場地帯でしたが、グスタフ王は病院を建設したり、何度か開発を試みては失敗してやっと1998年に再開発がスタートし、今は25,000人が住む



ストックホルム 18 区の一つとなり環境に負担を与えない都市となっています。海辺は過去の遺産である重金属が拡散したり、浮き上がってこないように葦を植えて改良していたり、人の糞尿からメタンガス熱を作ったり、農村部で堆肥を作って食料を生産し都市部に循環されることでした。アパートの下に分別のゴミを受ダストシュートがありました。そこに入れると中央集積場にそれぞれ集まるのです。

スウェーデンは、ゴミで財をなす国だと言う説明に耳が大きくなりました。イタリアのマフィア街でゴミが溢れたときに、スウェーデン国王は代金を受け取って受け入れ、船で運んで来たゴミをそのまま電力会社に売り高収入を得たという話でした。

現在もエネルギーの回収販売というゴミの収集販売業は、年間20～30パーセントの採算率を上げているとのことでした。ゴミを燃やしての火力発電が定着していました。

発祥の地ヨーロッパの生協へ行き、実際に自動ペットボトル回収機の利用を見学し、紅茶売り場に「NYPON」を発見。今、流行のローズhipティー、ハマナスのことでした。コーヒーの消費量は世界1位か2位かと言うくらいの国なので、安くて美味しいのは歴史の違いを感じるほどという説明でした。



ガムラスタンへ行き、王宮やノーベル博物館を見学後ストックホルム市議会の議場を見学し、バイキングの誇りを忘れないための船をかたどった天井であることや100人の議員のうち56人が女性



議員であることを聞きました。レクサンド市長、隣の市の市長さんも女性でした。スウェーデンでは女性が治める方が上手くいくそうです。ストックホルム駅は人がたくさん集まるので、人の熱を利用してヒートポンプでエネルギーを賄うように建て替えたばかりでした。

日本大使館へご招待があり、最後の行程を終わることができました。

4. おわりに

スウェーデンは貧しい国だったので、高福祉が必要だったそうです。エネルギー問題も在る物を活用することを基本に取り組まれていました。本当にたくさんの出会いがあって、学びがありました。「知らない」と人を怖いと感じるのでしょうか。人間同士の会話で知り合うと、怖さは無くなることを体験できました。紙ナプキンで折った鶴でも交流できるということも。

訪問を支えて下さったすべての皆さんに感謝します。そして、拙い報告ですが、今後の友好に僅かでも協力になりますようお願いしています。最後に訪問団の皆さんと、訪問成功のために深夜まで働かれた役場の職員の皆さんに感謝申し上げます。



当別町・レクサンド市姉妹都市提携 25 周年記念訪問レポート

訪問団員 竹原知美

2012年9月5日から12日にかけて、当別町とスウェーデンに所在するレクサンド市の姉妹都市提携25周年を記念して、レクサンド市へ訪問致しました。

初日の早朝より当別町を出発し、丸1日以上かけて(時差含む)レクサンド市に到着。たくさんの方々が伝統的な衣装を着て、国旗や町旗を振ってくださり、バイオリンの演奏で迎えてくれて、到着早々、私たちは感動に包まれました。レクサンド市庁舎にて歓迎セレモニーがあり、当別町とレクサンド市両都市の記念品贈呈や、町長、市長の挨拶、訪問団員の紹介が行われました。

私は、レクサンド市に滞在する間は、ホームステイする事となっており、歓迎セレモニー終了後、お世話になるヤンソンさん一家と合流しました。ヤンソンさんは、ヤンソンさんご夫婦と23歳の娘さんが一人いました。とても親切なホストファミリーでした。朝食を用意してくださり、また、ホストマザーの手料理も振舞って頂き、現地でのおいしい食べ物や「母の味」に出会いました。ホームステイをする事で、直接レクサンド市の文化や生活に触れる事ができ、すごく素晴らしい経験をしました。

初日の夜は、地元の高校にて3、現地のシェフを目指す高校生達が、私たちの為に夕食を作ってくれました。高校生バンドが演奏と歌を披露してくれたりしました。音楽も料理も、高校生とは思えない程、素晴らしく、楽しい夜でした。

2日目は、グループに分かれての行事でした。私はまず、地元の小学校へ向かいました。そこで、教育制度の説明を受けました。日本とは全く異なる学校の仕組み等に驚きながらも、日本の教育制度にも取り入れられる部分があるのではないかと感じました。

その後、トラクターの荷台に乗り、子供たちが集まっている近くの湖へ。麦畑を通り、広大な景色を眺め、到着した後は、地域で守っている森や湖を歩いて見学しました。森から戻ると、子供たちが軽食を作ってくれていた。自分たちで油を引き、野菜を炒め、ヌードルを入れ、調理してくれました。レクサンドで作られているパンもあり、とてもおいしく、感動しました。

午後は、初日とは違う高校へ行きました。ワールド・カフェに参加し、日本の印象を聞き、話し合い、発表しました。日本に大変興味を持って現地の学生や、また、日本から留学に行っている生徒と友達になり、とても有意義な国際交流ができました。もちろん帰国後も、メッセージや近況報告等をする友達です。

夜は、アイスホッケーの観戦です。生まれて初めてアイスホッケー場に行き、試合を観ました。ホストファミリーも同行していたので、会場案内や、ルール等の説明をしてくれました。残念ながらレクサンド市のチームは敗れましたが、とても楽しい時間を過ごしました。機会があれば

ば日本でも観戦したいと思いました。アイスホッケー場でもワールド・カフェで出来た友達に会い、楽しいひとときを過ごしました。ホストファミリーが「私たちを覚えていただけるから」とホッケーチームのグッズを買ってくれました。「これを見る度、私たちを思い出してね」と声をかけてくださり、涙を堪えるのに必死でした。

3 日目は、今回のメインイベント「姉妹都市提携25周年記念式典」がありました。午前中は当別町よりレクサンド市へ贈呈した桜の植樹イベントと、着物ショーが日本庭園にてありました。日本庭園を抜け、シリアン湖のほとりを歩き、メインイベント会場へ着きました。そこで、Malin Olson という女性歌手と、出会いました。素敵な歌声で、すぐ虜になりました。その他、伝統的なダンスの披露や子供たちによる合唱がありました。式典後はランチとケーキパーティーがありました。

夕方は教会のミサに参加しました。冠婚葬祭やイベントにより使い分ける衣装のお披露目があり、同行してくれたホストファミリーが意味や違いを説明してくれました。教会を出て、公園までパレードしました。たくさんの方が通り過ぎる際、手を振ってくれました。

レクサンド市滞在最終日は、パークゴルフ大会に参加しました。レクサンド市長も参加し、大変盛り上がりました。参加賞として、アイスホッケーチームのキーホルダーを頂いた事がすごく嬉しかったです。大会終了後は、当別町より贈呈した「あずまや」のお披露目式でした。今回当別町より贈呈したギフトの中でこれは、特に素晴らしかったと思います。パークゴルフに訪れた市民が憩いの場として、あずまやを利用してくださる姿が目に見えようでした。

夜は船上にてお別れパーティーがありました。レクサンド市議長が日本の歌「上を向いて歩こう」を歌ってくれたり、ホストファミリーや、友達になった高校生も参加し、とても楽しい最後の時間でした。食事は、サーモンやポテトを食べない日はないほど毎日出てきましたが、毎回おいしかったです。

最後はバスに乗り、バスから手を振り、お世話になったホストファミリーや、現地の担当者の方々、現地ですでた友達と別れました。決して長い期間ではなく、もっともっと滞在し、交流したい思いもありましたが、限られた時間とプログラムの中で、積極的に交流できたと思います。また、このような機会があれば、必ず参加したいと思いますが、もっとたくさんの人に経験して頂けたらと思います。

レクサンドには、いつかプライベートで行こうと思う程、素晴らしい時間を過ごしました。

スウェーデン滞在の最終日は、ストックホルムにて有名幼稚園の視察を午前中に行い、午後はノーベル博物館や大聖堂の見学がありました。夜は、日本大使官邸にて立食パーティーがあり、たくさんの方々と交流しました。今回の記念行事の中で、細部までお世話になり、大変感謝しております。今回のこのような出会いに感謝し、今後も当別町全体で交流していけたら幸いです。

訪問団に参加して

訪問団員 佐藤 良子

昨年末、訪問団募集の用紙を見て、兄と二人私達が応募してもいける訳ないよね・・・なんて云いながら兄の名前の下に私の名前も書きました。参加確認の手紙をもらい、66才になった私も一緒に参加させてもらって大丈夫かなと不安もありましたが、署名、捺印をしました。

何回かのミーティングに参加して迎えた9月5日、初めての海外へ向かって出発。千歳、成田、コペンハーゲンと飛行機に3回も乗り、スウェーデンへ。

何もかもが珍しく、びっくりする事ばかり。道路幅は日本と変わらないのに、交差点にはほとんど信号もなく、何時間も走って「あった信号」と思う事が何回もありました。他にも、車は日中でもライトを点灯していることにもびっくりしました。

グループで訪れた福祉施設。病院関係者でない私でも凄い、羨ましいと思う程、介護する側、される側、両方に配慮された設備、経済も保障されていて入所されている方も皆明るく楽しそうでした。

9月8日、桜の記念植樹の後、近くでやっていたバザー会場へ。夢中で見ていて気が付いたら、仲間は澤内さんと2人だけ。本通りに出てみたが、知らない人ばかり。身振り手振りで聞かずに通じず、3人目に声をかけた女性が車にいた男性を呼び、事情を聞いた男性が車からゴルフバック2個を道路脇の芝生に降ろし、女性とバックを残し、私達2人を乗せてくれ、式典会場まで送ってくれました。日本人は、ここまでしてくれる人いるかなと反省しながら考えさせられる出来事でした。

ストックホルム市内視察、王宮、ノーベル博物館などの見学、移動の合間のチョットの買い物。忙しい旅でしたが、普通の観光では絶対入れない所、日本大使館での立食パーティー。大使も奥様も気さくに私達にも話しかけてくれ、一緒に写真も撮らせてもらいました。楽しい一時でした。

スウェーデンは川、湖、森林がとても多く美しい所でした。私達が泊まったシリアン湖側の景色の素晴らしい丘の上のダレカリアホテル。欲を言えば、朝、夕とゆっくりホテルの周りを散策したかったです。

この旅で友人、知人が増え、10月14日レクサンド女子会をやろうと声をかけてもらいました。

若い人達と話ができるのはうれしい事です。この様な機会を与えて下さった皆様に感謝致します。

このような長い文章を書いたのは半世紀ぶりです。体力だけではなくもっと新聞などを読み国語力を付けなくてはと思いました。まとまりがなくてすみません。

訪問団員 島田 かおる

ストックホルムのアーランダ空港から迎いのバスに乗り込み一路レクサンドに向かう。車窓からの風景は千歳空港から当別町にむかう 275 号線沿いの景色とそっくりだ。時折みえる建物や看板の文字こそ日本語ではないものの生えている植物や空の広さは北海道と同じだ。

市庁舎に到着すると懐かしい友人たちが出迎えてくれた。「久しぶり！」「元気だった？」挨拶を交わした。レクサンドの人々の変わらない笑顔にほっとした。

市庁舎での式典を終えた後ホームステイ先のストロームメックス夫妻と共に自宅に向かう。ストロームメックス家との付き合いは 7 年にもなる。彼らの息子ペッテルが中学生の時にレクサンドからの訪問団の一員として当別町を訪れ、我が家にホームステイしてからの付き合いだ。クリスマスにはプレゼントを贈りあったり簡単な英文メールでお互いの近況を報告したりと折に触れて連絡を取ってはいるが「語学力のほとんど無い私が3泊も単独でステイできるのだろうか？」多少不安はあったが iPhone を辞書代わりにすればなんとかなるだろう、そう思っただけのホームステイスタートだった。でも、自宅に着いた瞬間からそんな不安はどこかへ行ってしまった。メール等でお互いの生活や家族の状況はわかっているし物事の考え方や捉え方も非常に良く似ているのでたとえ言葉は通じなくても「あ・うん」の呼吸で過ごす事ができ、非常に快適だった。身振り手振りを交えながら単語を数語並べればお互い相手が伝えたいことはだいたい理解できた。何より相手が心から歓迎してくれているのが伝わってきて嬉しかった。



6年前には夫婦と子供二人の4人家族だったストロームメックス家だが今は娘のクララは大学進学、息子のペッテルは就職で地元を離れて生活をしている。(今回ペッテルは休みをとって地元に戻って来てくれていたので無事再会を果たす事が出来た。)レクサンドは田舎町なので進学、就職となるとどうしても都会に出ていく事になるようだ。ストロームメックス夫妻の住まいはインション地区にあり当別町でいうところの太美町である。娘が小さなころはレクサンドで賃貸生活をしていたが息子が生まれる頃にはお互いの両親の住むインション地区に中古の住宅を買って移ったそうだ。近所に住む両親とは頻繁に行き来をしてお互い独立しつつも助け合う」良好な関係のようだ。

私の周りでも一旦は地元を離れた自分が子育てをする年代になって地元の良さに気付き

両親の近くに家を建て生活している人は多い。当別町とレクサンドは共通点がたくさんあり地理的な距離は遠いが心の距離はとても近いのだと改めて思った。



レクサンドのあるダーラナ地方は「スウェーデン人の心のふるさと」と呼ばれ古き良きスウェーデンが今も残るところとしてスウェーデンでも有数の観光地である。家々の外観はスウェーデンハウスに使用されているファールンレッド(ベンガラ色)を中心にどれも落ち着いた色合いで統一されている。「変わらないこと」に価値を持たせることに成功している一方で、クラスオルソン(ホームセンターのチェーン店)、クネッケーブロード(レクサンドパン)などスウェーデン全国レベルの企業も成長している。このバランスの良さは当別町がレクサンドから学べる点ではないだろうか。

当別町は自然が豊かで札幌へのアクセスも良い素晴らしい町である。そして毎年、本格的な夏至祭が行われ本物のスウェーデン式パン窯もある。本国スウェーデンでも貴重な本格的な手焼きのスウェーデンパンがここ当別で焼けることは素晴らしいことだ。

「スウェーデンに日本で一番近い町、当別」この事実を全国に発信していく事は今後の町の発展につながると思う。そのためにもレクサンドとの交流をさらに深め持続していく必要をあらためて感じた。

最後になりましたが貴重な機会を与えて下さった皆様に心より感謝いたします。

スウェーデンでのホームステイについて

訪問団員 工藤和彦

当別町とレクサンド市の25周年記念事業として、初めてスウェーデン王国レクサンド市を訪問し、無事帰国することが出来ました。

訪問中は、有意義なプログラムの体験や、大変貴重な経験をさせていただいたことを、当別町とレクサンド市の関係者の皆様、領事館大使館の皆様、そして一緒に訪問した皆様にお礼を申し上げます。



私は、ホームステイをしたので、ホームステイの話をしていきます。ホームステイ先の家庭は、レクサンド市長ウルリカさんの御両親のお宅で、Bo Martinsson氏(73歳くらい、以降パパさんと呼びます)とDagny Martinssonさん(70歳くらい、以降ママさんと呼びます)お二人だけの家庭です。

今回は、二ノ宮 隆精さんと二人でお世話になりました。

二ノ宮さんは、3年前、こちらのお宅にホームステイされたことがあるとのことで、出発する前に色々とお話を教えていただき、初

めてのホームステイでしたが、少しだけ安心できました。

家の場所はレクサンド市内から北に約12Km離れた、シリアン湖を望む閑静な住宅地ですが、近くにはホテルが数件立ち並ぶ場所でもあります。外見は平屋のようですが、地下にも部屋があります。

そして沢山の部屋があり、私たち二人には別々の個室が割り当てられました。部屋は、キッチン、ダイニング、リビングの他に、10人くらい寛げるサンルーム、PC専用の部屋、洗濯と洗濯物干し場専用の部屋、来客用の部屋、パパさんの作業部屋(室内と、本格的な工具が並んでいる外に繋がったのと2種類)、日本間(日本の物が置いてある)や他にも、知らない部屋がありました。シャワールームが2つあり、1Fにあるのはトイレと兼用でバスタブも設置されていました。地下はシャワー専用でしたが、隣にサウナルームがありました。バスタブもサウナもあまり使用していないようで、冬でもシャワーで済ませることが多いみたいです。地下にもトイレと洗面所の合体版があります。



朝食について

3回朝食をいただきましたが、ストックホルムのホテルの朝食と遜色ありません。基本はパンです。焼くことはしないで生のままです。日本の食パンのような四角いものはなく、丸くて、白いのからちょっと黒いものまで数種類揃えられていました。レクサンド市郊外の工場で作られた、ちょっと硬くて薄い三角形のパンもありました。向こうの方はマーガリンを一面にぬって食べるのが普通ようです。

パンの他にはチーズが数種類(トムとジェリーに出てくる穴の空いたものを薄くスライス(薄くスライスする調理器具が普通にあります。日本では滅多にお目にかからないものです)、カッテージチーズやカマンベールチーズも)、ハムも数種類(中にはペースト状になったものも)、低脂肪の牛乳(普通の牛乳ではない)とジュースが数種類(オレンジ、ブルーベリー)、ヨーグルト(普通のものと、フルーツ味で少し甘いものも)、ヨーグルトにかけるシリアルが数種類、野菜(スライスしたトマト、葉物、セロリ)、ゆで卵(殻のまま、ナイフを使って半分に切ってから殻を



剥き、カレス・キャビア(魚卵のことをキャビアと言うらしく、本物のキャビアではありません)という、金属製のチューブ(昔の歯磨き粉が入っていたようなもの一回り大きなサイズ)に入った、ちょっとしょっぱいピンク色のタラコペーストをかけて食べるのが、あちらの流儀らしいです。Dill というハーブが入っているのと入っていないとがあるそうで、私は Dill の入っているのをスーパーで購入してきました。値段は 300 円程度です。フライパンにのった、ミートボールが出たこともありました。食後にはコーヒーか紅茶を飲んで、朝食は終了です。コーヒーも、牛乳で割ってと言うと、わざわざ牛乳を温めてくれて、上に浮いた泡も掬って入れてくれました。で、食事が終わると、使った食器にちょっぴりと水を掛けて、食器洗浄機に入れて終わりです。

一度だけ夕食の機会があり(他の夕食は訪問団イベントに含まれていました)、ウルリカ市長家族(ご主人、11歳の男の子、9歳の女の子)と一緒に夕食をいただきました。女の子は東京で購入したというピンクの浴衣姿で歓迎してくれました。



こちらではろうそくの火で夕食をするそうで、その日はまだ外が明るいにもかかわらず、テーブルの上のろうそくには火が灯っていました。

その日、開釜のセレモニーで、ウルリカさんが日本茶を飲まれていたので、お茶の味はどうだったか尋ねたところ、とてもおいしかったとおっしゃっていました。たぶん社交辞令だと思いますが(笑)。

夕食前にお土産に持参した折り紙で、お子さん二人とご主人と一緒に鶴を折りました。鶴の折り方はもちろん知っているはずもなく、私が折っているところを見ながらでしたが、初めてにしては結構ちゃんとした鶴になりました。

会話について

日常の基本はスウェーデン語のようですが、ほとんどの方は英語も喋るようで、パパさんは英語がペラペラでした。ママさんはあまり英語が得意ではないようで、スウェーデン語で話してパパさんに通訳してもらったほうが早いという程度でした。私も英語はママさん並です。最後のモスコゲンホテルでの夕食はママさんと隣同士になり、どちらも英語が上手ではないので、最初話が進まなかったのですが、筆記具を取り出して絵や文字を交えると、とてもスムーズに話が進むようになりました。

最初、ノートがあるのを忘れて、ママさんの目の前の真っ白なテーブルクロスに書いてしまい、いたずら書きしたように見えるため、料理が運ばれるたび、ママさんは苦勞と苦笑をしていました。私の拙い英語(単語を並べただけとか、インチキな英語と文法とか)でも、パパさんはちゃんと聞いて、そして理解して、足りない部分を補ってくれて、会話として成立させてくれました。(これは、他のレクサンドの人も同じように感じました。)難しい英語(多分私たちには理解できないと思った英単語)は、パパさんの玩具でもある iPhone を取り出して、日本語に変換して見せてくれたり、日本語で喋らせてくれて、私たちが理解できるように色々とお気を使ってくれました。私はこの旅のために英和と和英が合体した小さな辞書を携行したのですが、言葉を探すのに時間がかかり、会話の最中にはほとんど使えませんでした。

ちなみに、スウェーデンの人同士がスウェーデン語で会話する時の特徴(たぶん)として、相手の話に「ヨーヨーヨー」と相槌を打ちます。とても大きな声で。

今回初めてホームステイをしましたが、ホームステイしようとする私よりも、私たちを受け入れてくださったホームステイ先の家庭は、もっともっと大変であることがわかりました。私たちの送迎(場所も時間も一つとして同じではありませんでしたが、きちんと時間を守って、車での送り迎えです)と訪問団のイベントへの参加を含め、ほとんど 3 日間はパパさんかママさんのどちらかが(両名の時もありません)、つきっきりになって対応していただきました。ほとんど自分の時間が無かったのではと思います。

また、私たちの知っているスケジュールとは別に、スウェーデン語で書かれた、ホームステイ先専

用のスケジュールがありました。微妙に時間がずれていました。「こっちは日本時間、こっちはスウェーデン時間だね！」と、ママさんの一言で解決です。最初の晩から、いつも毎晩、お互いのスケジュール表を基に、明日は何時に何処そこ集合だから家を何時に出発し、何時に朝食を開始とかを、ワインや缶ビール(冷えていませんぬるいです。)を飲みながら相談して決めました。いつも夜遅くにホームステイ先に戻るの、あまり長い時間お話し出来ないのですが、最後の日は午前2時頃までお話ししていました。最後の日のイベントでパパさんが撮った写真を印刷(レーザープリンタです)して用意して渡してくれました。レーザープリンタはまだ購入して間もないとのことで、発色具合とかを試行錯誤していると、現物を見せてくれました。近くにタワー型のマックがあったので、私のデジカメのデータを、パパさんのマックに保存することを思いつき、保存してもらいました。なので、後からメールで送信する写真は少なくて済みました。ちなみにメールは英語です。

ホームステイ期間は3日間でしたが、日中は訪問団のプログラムやイベント等で、朝晩のわずかな時間だけしか一緒にいらなかったのが、非常に残念です。それも、パパさん、ママさんの人柄や対応がとてすばらしかったためでもあります。いろいろな理由で仕方ないのかもしれませんが、もっと一緒にいる時間が長ければ良かったと思います。それと、日常会話程度の英語が喋られるようになれば、もっといろいろな話が出来たと思います。これからは、翻訳機械(アプリ)が大きく改善されて、日本語と英語で喋った内容をすぐに変換してくれて、ほぼリアルタイムで会話ができるようになればいいと思います。

最後に、ホームステイしていた3日間のスケジュールを簡単に紹介します。

9/6(木)

夕食後、21:30、レクサンド高校からホームステイ先まで移動。(運転はパパさん)

9/7(金)

朝食後、8時、とある駐車場まで移動。(運転はパパさん)

17時、レクサンド市のアリーナからホームステイ先まで移動。(運転はパパさん)

ホームステイ先でウルリカ市長家族と一緒に夕食。

19時、アイスホッケー見学にアリーナへ移動。(運転はパパさん)

22時、アリーナからホームステイ先に移動。(運転はパパさん)

9/8(土)

朝食後、9時、記念植樹開場まで移動(運転はパパさん)

桜の記念植樹

16時、着替え&準備のためホームステイ先まで移動。(運転はママさん)

18時、レクサンド教会まで移動。(運転はママさん)

25周年記念式典、パレード

20時モスコージェンホテルへ移動。(運転はママさん)

記念夕食会

22時モスコージェンホテルからホームステイ先に移動。(運転はママさん)

9/9(日)

朝食後、9時、パークゴルフ場まで移動。(運転はパパさん)

パークゴルフ交流、あずまや贈呈式

15時、パークゴルフ場からお別れパーティ開場まで移動。(運転はパパさん)

17時、最後のお別れ

以上、簡単ですが、報告を終わります。



全体を通して学んだ事と感じた事

訪問団員 澤内 律子

この度、当別と姉妹都市であるスウェーデンのレクサンド市へ訪問団の一員として参加させて頂きましたことを誠にありがたく感謝致しております。視察、見学、他盛り沢山のスケジュールは、個人の旅行ではとても体験出来ない中身の深いものでした。レクサンドの心暖まる歓迎に感激しきりでした。「井の蛙」井の中がわかっているつもりが、本当は何もわかっていない。井の外へ出て初めて井の中のことがわかる・・・と。いきなり海外へと飛び不安もありましたが、微少なながらも私が体験させて頂いたこと及び学び得たことを供覧させていただきます。

北欧の風土

森と湖の国、スウェーデンは実に75%に渡って豊かな森林が広がっています。空の上から見てもほとんど緑で、その中にポツンポツンと茶色が見えました。1年の半分以上が雪と氷に閉ざされ、陽の当たらないことが多い国です。長い冬が過ぎて、やっと訪れてくる短い夏、人々は太陽の光を浴びるためには、仕事の手を休めてでも日光浴をし、光のあふれるかけがえのない季節を楽しむのだそうです。その時期には、鉢植えのお花もたくさん飾ります。私達が訪れた時は、当別でもまだ半袖を着ていても暑いくらいの季節でしたのに、レクサンドでは肌寒くて、ジャケットやカーディガンを必要としました。気候がもたらす人々の影響は、互いに寄り添うように暮らし長い冬を乗り越えます。夏は森林へ出て夏至祭など盛大に行われ、そこでダンスや食事を楽しむそうです。また、木をふんだんに使い、自然の恵みを活かした木の家、たくさんの恵みを森からもらいつつ、それを循環させてうまく持続させていくために、代々に渡って森を守り続ける木こりがいて、1本木を切ったら1本植えて、森の緑を守り続けています。そして自然を壊さなければ誰でも森へ入って木の実を採取したり、湖で魚を釣ることが許されているということです。人と生き物が一緒に暮らしている場所。その森を大切にするため幼い頃から集団で森に入って、森を守る為の教育がされます。例えば、森の生き物を観察し、汚れている所へ行ってゴミや容器の破片などをさし出して、「これはどんな臭いがするの？」「くさい！いやですね！」とか容器の破片などでは、「これ、誰が踏みますか？」「私たち。」「そうですね。いたいでしょう！」「いやですね！」小さい頃より、このような実体験に基づいた森の教育がされています。子供達も命の大切さとか、物を大切にすることや、人にもやさしくするなど自然の中から生まれ、やがて大人になってもさらにそれが成長されることと思っています。以前に、山の中の滝が流れていて緑がたくさんのところではマイナスイオンが発生していて心を穏やかに癒してくれ、又それと反対のところでは、プラスイオンが発生していて神経がイライラし、喧嘩もあるというお話を聞いたことがあります。豊かな自然の中で生きている意味がわかるような気がします。それにそういうところは、「水がきれい」ということで素晴らしいと思います。

次に、このような背景を持つ国土の人々の暮らしに目を向けてみます。先ず世界一の福祉

国家で「ゆりかごから墓場まで」が国から保障されます。お産のためタクシーに乗った場合でもそのタクシー代から保障されるというのです。しかし、そのためには市民は高い税金を支払っています。所得によって異なりますが、最低でも30%~52%という高い税金を支払っています。故に市民はあまり貯金をしないそうです。教育、医療、老後の心配をする必要が無いからです。(日本では老後の為にまずお金を貯めておかないと心配とかめんどうを見てくれる人がいないが、お金もなく施設に入ることが出来ないこともあります。)

そこで、人々はコツコツ貯めて購入した家とか、車とか、その他の物を非常に大切に使うということです。人々には物を大切に使うという習慣が身についています。物を大切にすることは人々も大切にすることに繋がっているのかも知れませんが、娯楽施設も日本ほど十分ではないので、遊びにお金をかけることも少ないそうです。また、夏には長い休暇を取って、森や湖にある別荘で自然に触れ、サマータイムを楽しむ人が多いそうです。国土が育む人間性など、どこか日本人とは異なっているように思います。このような福祉国家にも問題が無い訳ではありません。スウェーデンは日本に次ぐ第2位の長寿国であり、福祉政策に使われる会計も膨らんでいるのです。高齢者の福祉が充実しているので、子供は将来、親の面倒を見る責任はありません。施設を視察の際、説明で「出来るだけ家庭で生活してもらうのが1番ですが、どうしても世話をしてくれる人がいない。重度の障害を持っている方などの世話も大変難しく、1人で生活していけない場合」という言葉を繰り返されていました。最近では老人でも、長く家庭で過ごす努力をしてもらう。出来るだけ長く家庭の下で暮らせるよう、あるいは出来るところまで1人暮らしをしてもらうため、危険や不具合が発生した場合には家庭に設置してあるボタンを押すと管轄センターに繋がってすぐに援助の手が差し伸べられる。これらのことは以前よりもっと強く推奨しているといえます。

最後に老人ホームを見学させていただきました。しっかりした綺麗な個室で部屋には家族(夫、子供達、孫等)の写真が額に入れてキッチンと飾られているのです。

美術品は必ず買うようにということで、施設の中には絵とか美術品が飾られて素敵でした。1人の老人が訪れた私達に向って、何やら楽しそうに一生懸命に話してくれるのです。相手に自分の話が通じているのか、いないのか、お構いなしで話すのです。人が恋しく、自分の話を聞いて貰いたいという一念なのでしょう！ピンク色の洋服を着て楽しそうに話してくれています。言葉は通じませんが、私も微笑みながら頷いて聞いてあげていました。最後にカメラを向けたら、話をやめて笑顔で写真を撮らせてくれました。家族の世話は必要ないという高齢福祉にも老人の一抹の寂しさがあると聞きました。福祉が充実している代わりに働ける人は徹底的に働く。働ける人が働かないという様なことのないように職業の斡旋も徹底しているそうです。どこか日本も見習わなければならないことがあるのではないかと感じました。自治体も困っている所があればお互いに助け合うとも聞きました。



個人的に感動した点

フォークダンスショー鑑賞の前日、夕食の時フォークダンス会の会長とお話しさせて頂いた際、スウェーデンの代表的な曲「ハンボ」を踊ってみたいと言いましたら、当日最後に踊らせていただきました。「本場で踊った！」うれしかったです。レストランではイスラエルから旅行で来られている方とお話して、イスラエル「みざー」をちょっと踊ってみました。小指と小指を絡ませて輪になり踊る静かな踊り、終わったら親指を立てて「ゲー」と言ってくれました。「民族の踊り」は踊るだけで心が通じるのですね。

シリアン湖の遊覧船の窓から続く森林を眺めていたら、突然目に飛び込んで来た景色に「あっ～あの絵そのものだ！」ちょうど行くちょっと前「東山魁夷」の絵を美術館で鑑賞したばかりだった。「北欧、森と湖を巡る旅」で描かれた風景にそっくりの場所に触れられたことです。

食文化では古代からバイキングに始まり、山の木の実、果物、生野菜、海の幸を採っていたといえます。今のグルメ時代、主食はジャガイモ、パン(雑穀類等ブレンド)、ハム、ソーセージ、牛乳、チーズ等乳製品は常にあり、私はアスパラの先の部分など「このパワーのある部分に火を通してはもったいないと、時々生食することはありますが、鍋物等に使う長い豆の芽(豆苗)、ブロッコリーも生で出していました。私は、それに驚きと感動しました。木の実、種物を乾燥させたもの、生野菜、生魚の酢づけ(発酵)など生命力のあるものをそのまま、体に入れている。人間の体に十分な養分を自然に摂取していることです。食の事も日頃思っていることがあったのですが、今回「やっていた！」と思いました。食文化についても注目してみたいと思いました。

停電になった時、こんなおしゃれなローソクもいいな～と蜜燭で出来たローソクを買って来ましたが……！キャンドルの炎には視覚的に癒し、脳のストレスを和らげる効果があり、心身共にリフレッシュできるという。不規則に揺らぎのリズムは星の瞬き、小川のせせらぎ、そよ風など自然現象に見られるリズムで、人間の鼓動も同じリズムを刻むので生体に心地よさを与えるリズムとして知られている。又、マイナスイオン効果、消臭、消煙、とくに蜜燭は天然の抗菌作用とか、スウェーデンの方々はそのローソクを囲み、顔と顔を合わせ寄り添い語り合うのだそうです。節電の為のローソクと思っていたことが、浅い考えでした。先入観の常識で自分の考え、思いがいかにいい加減なものかがわかりました。

海外から見て当別を想う

当別に帰って来て我が家に向う途中、車から小高い丘にスウェーデンヒルズを見た時「まさにレクサンドだ！」と叫んでしまいました。雄大なスウェーデンから比べるとボールペンの先ぐらいの面積ですが、我が町にそれがあったのです。単弁的に思っていた色々な事が、1本の糸で縫い合わせられた様な思いです。

25周年記念事業訪問団に参加して

随員職員 増 輪 肇

国際姉妹都市交流を担当する企画部に所属し、この交流に直接的に携わるようになって11年が経過した。町役場職員としては異例の長さかもしれない。

この間、レクサンド市から青少年を含む市民の受け入れはもとより、15周年事業訪瑞、パン窯の設置、20周年事業の当別町開催、町140年事業に係るレ市訪問団受入など、更に、スウェーデン国会議員の来町、王立アカデミーの研修会開催、駐日大使館事業であるスウェーデン meets 北海道の開催など、数多くの関連事業を担当してきた。

振り返ってみると、この10年程は、レクサンドとの姉妹都市交流に止まらず、小さな自治体でありながら「スウェーデン王国」との結びつきをより深めて来た年月だったと思う。これも偏りに、本町が25年に亘って抜きんてた有効な姉妹都市交流を実施してきたことを各方面から評価いただいた結果でもあると感じている。

今回、記念すべき25周年記念事業も担当することとなり、訪問団の皆さんに随員し、2度目のレクサンド訪問の機会を得たが、38名の公式訪問団とゲスト訪問団32名、計70名の大訪問団員の随員はこれまで経験したこともないうえ、当別町のこれまで築き上げてきた国際交流の実績は、私に、大きなプレッシャーとなって降りかかっていたが、訪問団員の皆さんや当レク協会、同僚の協力により立派に遂行できると信じて事業に臨んだ。

平成19年、当別町で開催した20周年事業の際、「次回の25周年事業はレクサンド市で開催する」「大勢の当別町民の参加を希望する」とレクサンド市の意思表示があり、平成21年には事業の事前打合せを行う竹田和雄訪問団長に随員訪瑞し、市長、議長を始め、実行委員会の方々と3時間を超える熱い懇談を実施したが、両市町の姉妹都市交流を更に発展継続するためには、単に従前どおりの友好関係構築発展だけのメニューでは市民理解を得られない時勢である。このことはレクサンド市・当別町共通の認識であることを確認した。

25周年記念事業は、新たに有効な交流主旨を見いだすために、特に重要な事業とするために両市町が連携し、市町民を巻き込んだ位置付けとなるよう努力する必要があるとの結論に達した。

この議論を踏まえ、本年開催された25周年記念事業メニューは、レクサンド市側が練り上げた素晴らしい事業内容となっていた。レクサンド市の特徴ともいえる手工芸等の起業者と本町の商工業を結びつける可能性を見出す懇談事業、介護や福祉的施設の紹介を含めスウェーデン式社会福祉施策を本町の魅力にプラスすることが可能かを模索する福祉事業懇談、農業・農産物の特産品作りについて、本町の参考になるレクサンド市の取り組み紹介など、交流継続の根幹を念頭に置いたよく考えられたメニューであった。

当然、メイン事業である25周年式典、及び関連行事を限られた日程で実施しなければならず、時間的制約から課題を深く掘り下げる内容とはならなかったが、「課題提起」として一定

の成果があったものと感じている。

今後の両市町の交流は、これまでの人的交流にプラスして、今回提起された課題を発展させる事業メニューが追加されることは間違いないと感じた。お互い基礎自治体として、可能なこと、不可能なこと種々の課題が浮き彫りになってくるものと思われる。しかし、お互いに町を発展させたいという熱意は共通しているし、国際姉妹都市交流をその基盤や特徴に掲げるべきという一致した考え方を一歩踏み出したこの25周年記念事業は両市町にとって大きな事業と捉えるべきである。

また、当別町訪問団は、レクサンド市訪問以外にも重要なミッションを遂行してきた。

25年にも及ぶ国際交流をまちづくりに生かす取り組みとして、駐日スウェーデン大使館との連携事業を実施し、企業を含め各方面に「日本のスウェーデン」＝「当別町」をアピールしてきたが、これを一歩進め、在スウェーデン日本大使館との連携を密にしてスウェーデン本国からの情報等も広く集めることも必要であるとの観点から、この機を活用し、日本大使館との連携事業を実施した。

幸い、在スウェーデン日本国全権大使渡邊大使閣下は、既にレクサンドと当別の交流に理解をいただいていたこともあり、本町の連携事業取組み依頼を全面協力いただいた。レクサンド市からストックホルムに場所を移し、9月10日は、日本大使館との連携事業を実施した。38名の訪問団員は、大使館職員のアレンジにより「日本大使との懇談研修」「福祉施設研修」「保育所(子どもセンター)施設研修」「環境に配慮したモデル地域研修」の4班に分かれ、スウェーデンの先進事例を研修した。

私は、この日本大使館連携事業は国際交流事業にとどまらず、まちづくり施策にとって、意義のある事業であり、このチャンネルを枯らすことなく何らかの形で継続していくことが必要であると考えている。即ち、当別町のアピールの裾野を広げていくことは、有用な情報の入手が容易となり、まちづくり施策への活用の幅が広がることを意味しているからである。

現在は、あふれる情報の中から有効で信用のおける情報を選別し、活用することが必要な時代であると思う。在スウェーデン日本大使館や駐日スウェーデン大使館の情報は、必ずや本町にとって有意義な情報であり、本町からもスウェーデンやスウェーデン企業等に対し、有効なアピールツールとなると信じている。

そのような意味から、今回の当別町訪問団の皆さんは大きな意味のある事業を遂行いただいたと感じている。全体を通して厳しい日程を積極的に参加いただいた訪問団員の皆さんに御礼を申し上げたい。また、本派遣事業を町と共催いただいた「当別レクサンド都市交流協会」に感謝申し上げます。

最後に、訪問団員38名は全員無事に本記念事業訪問団派遣事業を終え、当別に帰還したことを報告し、訪問団随行員としての報告書とする。

随行職員 高田 訓之

今回のレクサンド市訪問団は、町長を訪問団長とする38名の公式訪問団と当別町とレクサンド市に関わりのある34名のゲスト訪問団を合わせ72名で9月5日から9月12日の8日間の日程で行った。参加者には在札スウェーデン名誉領事をはじめ、スウェーデンや当別町と関係のある企業や東海大学も参加し、過去最大規模の訪問団となった。

また、初対面の訪問団員が数多くいるため、出発前のミーティングも3度行いコミュニケーションや国際交流の知識などを再確認し、国際交流への意思統一を図り臨んだ。

9月5日、この日は終日移動日であった。早朝5時からの壮行会と結団式には大勢の方々に見送られ、団員共々気持ちが引き締まった。

今回の経路は、新千歳空港から成田空港を経由し、11時間25分のフライトでコペンハーゲンへ。再度、乗り継いでアムステルダム空港に向かう。国際線にはスカンジナビア航空を利用したが、天候に恵まれた事とパイロットの操縦が上手かったおかげで揺れも少なく快適に過ごせた。コペンハーゲンでの入国審査はスムーズに通過したが、保安検査では、X線検査が厳しく少し時間を要した。空港でのショッピングを楽しむ暇もなく、アムステルダム空港行の飛行機に乗った。スウェーデンに到着した時には、現地時間19時20分、日本時間の深夜2時20分であった。体調不良を訴える団員も無く、到着ロビーで出迎えてくれた国際交流連絡員の八幡さんと元気に再会した。食後、八幡さんと翌日の動きを確認すべくミーティングを行い就寝。

9月6日この日は気温が低いものの最高の秋晴れの中、市庁舎での歓迎セレモニーにレクサンド高校での歓迎夕食会が行われた。

朝、ホテルにはレクサンド市からニーゴード議長が迎えに。また、駐日スウェーデン大使館の参事官だったカイ夫妻が合流。さらに在スウェーデン渡邊日本大使が駆けつけるなど、訪問団のテンションが一気に上がった。

私たちが降り立ったアムステルダム空港はストックホルム郊外に位置し、レクサンド市までの道は農地や森林が広がる北海道に良く似た風景が続く。建物の色が赤茶色に見慣れたスウェーデンハウスカラーのため、懐かしく感じる景色でもあった。スウェーデンは自然災害が少なく、何十年、何百年経過している建物や国道を通る車は古く、大量生産大量消費の日本とは大違いだった。

11年前に訪れた時から比べると空港や国道の整備が進んでおり、空港からレクサンド市までの国道は2車線から4車線化になっていた。スウェーデンの市街地郊外の交差点にはロータリーを採用している所が多く、スピードを減速させる狙いや信号機による無駄なアイドリングを抑制する効果もあり環境にも優しい道路が多い。

レクサンド市へ訪問する時に必ず立ち寄るアーベスタという町には世界最大のダーラナ馬がある。地図で言うとストックホルムとレクサンド市の中間に位置し、言わば道の駅のような場所で、観光客が多く立ち寄るらしい。当別にも自称日本最のダーラナ馬がレクサンド公園にあるものの経済効果は限られている。国道337当別太付近に道の駅が出来、国際交流のシンボルとして大きなダーラナ馬があると集客にもなり経済効果も生まれるのだろうと考えてし

まう。

レクサンド市においても公共事業が盛んに進められていた。国道から市街地に入る道路の切り替えや駅舎の建て替え、市庁舎の増築やアイスホッケー場の建設、住宅地の造成など至るところでこの11年間、公共事業が行われているようだった。

レクサンド市街の入口にある大きな橋では「ようこそレクサンドへ」とのプラカードを持つ市民をはじめ、小旗を持って大勢の市民が出迎えてくれた。市庁舎前にはレクサンド市長ほか見覚えのある方々がたくさん出迎えている光景に自分は夢中でカメラのシャッターを切った。庁舎に入ると廊下のショーケースに入れて展示してある当別町からの贈り物が歓迎セレモニー会場の至る所に飾ってあった。当別町がレクサンド市の訪問団を迎える時に良く見える所に贈り物を飾る当別流の歓迎を真似たようだ。

今回レクサンド市側は、両市町の交流を若い世代に受け継ぐ事をテーマに訪問プログラムを組んでいた。その一つとして歓迎夕食会をレクサンド高校のレストランで行いホテルレストラン科の生徒が作った料理で歓迎してくれた。レクサンド高校のホテルレストラン科は各地から一流のホテルマンを目指している高校生が入学しており、週に1度実習を兼ねてレストランを市民に開放し、料理から接客まで実践方式で実習している。この日の料理も接客も高校生と言われなければ分からないほど料理がおいしく、そして堂々とした接客だった。

9月7日この日は、朝から4つのグループに分かれ研修を行った。自分は、企業グループで企業訪問と企業との懇談に参加した。

訪問先のトーモクヒュースは、主に日本で販売しているスウェーデンハウス用の建具とヨーロッパ向けの建具を製造している。品質を大きく分けると節目がない製材は日本の建具に使用し、節目があっても製品として問題ないものはヨーロッパ向けの建具に使用するという。理由は日本向けの建具は木目をそのまま使用するため節目を嫌い、ヨーロッパは色を塗るため節などは気にしないからだという。また、合理的と感じたのは、スウェーデンは交通費の支給は行わないため交通費の係らない地元の方を雇用している所だ。日本は「地元雇用を！」と言いながらも、「交通費は必要経費とし、利益を上げるために人件費や材料コストの削減」をしている。スウェーデンは高賦課・高福祉の国からか人件費は勿論、労働基準も労働者よりの基準のようだ。だからと言って企業がコストを度外視しているのではなく、人件費を削らない代わりに機械化をしてコスト削減を図っている。また、レクサンド市は5人以上の企業が数多くあり、10年前と比べても空き店舗が見受けられないのに関心した。特に伝統工芸品の職人も多く住んでおり、何十万円もする民族衣装を販売するお店が成り立っているのも驚く。スウェーデンの素晴らしいところは古き良き歴史・文化・伝統はしっかり受け継ぎつつも、情報ネットワークやIT化などの技術は他国に引けを取らないところである。

また、レクサンドパンでは、クネツケという硬いパンの製造が主で、硬いパンではスウェーデン王国の4分の1を生産し、4代続く歴史ある企業だ。工場自体は1929年に火災に合うもののパン製造に大切な良質な水がこの地下にあるため、今の場所に工場を立て直した。別の場所で事業を拡大しない理由も良質な水が他に無いかららしい。「伝統を守る」「地元の食材を使用」「環境に配慮した製造を行う」という社訓からも企業精神が伺えた。

昼に行った開窯式と茶道の披露には100名程度の観客が集まり、その中で訪問団員の辻野さん、島田さん、坂本さんが日本文化の一部として茶道を披露した。静かな森の中で行う茶道も良かった。スウェーデンの方々には茶道がどう映ったのだろうか。

その後創立14年目で若者から60歳位の学生が120名通う起業家育成成人学校に立ち寄ることになり、レクサンド市外から通う3名の学生から自分たちの夢を聞かせてもらった。校長先生の話が特に印象深く「スウェーデンは税金だけを見れば高賦課で住み辛い国かもしれないが、「高齢者に対する生活基盤の保障」、「若い人材の育成」、「環境への配慮」など、小さな頃から環境と共生する教育が行われ、夢を持って努力する若者には奨学金が、一生懸命働いて来た高齢者には安定した老後がある素晴らしい国です。」とのスウェーデンの紹介を受け、今の日本を外国人に紹介する時、どう紹介すべきか悩む。

夕食は、前ボーペッテルソン市長宅に招かれてとてもおいしい家庭料理をご馳走になった。食後、私たちに改装中のゲストハウスを見せてくれた。この建物がストックホルムのまだ南に建っていた350年前のものというから凄い。

9月8日この日は、行事は殆どが屋外の行事であった。天候は曇りで気温が低く、気温30℃の北海道から来た私たちにとって結構堪えた。午前中の記念植樹と着物ショーはレクサンド高校から数百メートル先のシリアン湖が見える日本庭園で行われ130名程度参加した。町長や竹田議員はこちらから贈った石灯籠や桜の木を目にして懐かしがっていた。今回の記念植樹は当別町からレクサンド市に贈った桜で、姉妹都市25周年をちなんで高さ3メートル程の桜を25本、日本庭園の入り口から並べて植えた。数年後、レクサンド市を訪問した方がこの桜並木を見て何を思うだろうか楽しみだ。

レクサンド市は歴代の市長自ら送迎車を運転したり、議長が姉妹都市交流事業の先頭になって汗をかいて動いている。この姿が国際交流への理解と市民や若者たちの協力につながっているのだといつも感じる。受け入れにも宿泊業、イベント業、飲食店、お土産など地元で経済効果をもたらす工夫があり、レクサンド市から贈られた記念品も地元家具屋で伝統的な工法で組み立てられた椅子でした。

当別町もレクサンド訪問事業に参加した町民が交流事業に関わりを持ち続け国際交流の輪を広げることが大切で、今後若者同士の感性や発想で国際交流の魅力を引出し、大小関わらず経済効果のある交流に発展することで町民の理解と協力につなげたい。

記念式典は駐スウェーデン渡邊日本大使やダーラナ県知事が参加する中、レクサンド市の入り口に位置する船着き場に設置した屋外特設会場で300人以上の方々が参加し盛大に行われた。司会者には一般市民と地元小学生の女の子。オールレクサンドかつ若い世代への継承という強い思いが込められた式典であった。

夕方の25周年記念パレードはレクサンド市関係者合わせ120名が参加。今回のパレードは2年前、当別町開町140周年事業で行ったパレードにレクサンド市が感銘を受け真似たという。パレードは教会から市街地中心部までの通りで観衆の少ない通りでした。毎回ミサで市民が通る大切な通りを選んだのは大変意味深く感じた。また、市内至る所に日本の国旗や日本語が溢れ、歓迎ムード一色であった。

記念夕食会はレクサンド市内のモスコージェンホテルにて130人規模で行った。この夕食会を盛り上げてくれたのはレクサンド市出身の歌手 Malin Olson さんでした。レクサンド市はスウェーデン王国の中でも伝統文化が色濃く残る心の故郷とも言われる観光地として有名な地方で、国内最大級の夏至祭で大勢の観光客が集まるだけでなく、芸術家をはじめ様々な分野で活躍する人材が沢山生まれている市でもあり、自然という資源と人材という財産を持つ素晴らしい地域と改めて実感した。

9月9日はかなり冷え込み霜まで降りた。レクサンド市民も冬の服装であったのが印象的だった。この日は午前中パークゴルフ交流とシリアン湖観光施策研修の2つに分かれ交流を行い、自分はパークゴルフに参加した。レクサンド市側の選手は非常に上手く、相当練習したと思われ圧倒的な大差でレクサンド市が団体戦を勝利した。スポーツ交流はルールさえ理解出来れば言葉が通じなくても自然に笑顔で片言の英語とジェスチャーでコミュニケーションを取り合え、さらに交流が深まった気がします。

午後には日本の有志たちから贈られたあずまやの贈呈式を行った。場所はレクサンド市の南部位置するインションという地域のホテル前の静かな公園の小高い丘に建設された。テニスコートやメイポールがあり、年中人が集まる場所らしくパークゴルフや夏至祭の時には多くの方にこのあずまやが利用されるだろう。

夕方、最終プログラムのお別れパーティーに関係者80名程度参加し、シリアン湖を運行する船の中での夕食会を行った。中でも八幡さんへの長年の功績に対する感謝状の贈呈や国際交流連絡員をカイレイニウス豊子さんに引き継ぐアナウンスの時には、感極まって涙する方もいた。

レクサンド市には4日間の滞在でしたが、早朝から夜遅くまで素晴らしいプログラムと充実した交流が出来た。2年前から準備に携わった市職員のレーナさんをはじめ、色々な立場から関係してくださったレクサンド市民の皆様方に心から感謝いたします。

9月10日は訪問事業の2つ目の目玉事業である在スウェーデン日本大使館との連携事業だ。ストックホルム市内の高齢者施設や保育所、ハンマルビー地区の環境への取り組みを視察するなど、そう簡単に視察が出来ない場所まで視察出来たのも大使館の協力のお陰でした。また、大使公邸でのレセプションは、渡邊大使のご厚意で実現したもので、大変貴重な経験をすることが出来た。母国語でコミュニケーションがとれる喜びと渡邊大使をはじめ大使館スタッフの気さくで温かな歓迎に羽目を外しすぎて失礼も多々あったことと思いますが、当別町とレクサンド市との国際交流に箔が付いたことに心から感謝申し上げます。

今回の8日間の25周年記念訪問事業で参加者全員が体調を崩さず、また天候にも恵まれ充実したプログラムを無事終えることが出来、事務局側としてホッとしているところです。またレクサンド市との絆の固さを改めて感じさせられました。

既に200名以上の当別町民がレクサンド市を訪問しています。国際感覚と人材育成は十分行って来ました。今後、若者のパワーと斬新な発想で経済効果を上げ、さらにオール当別で国際交流を取り組み「日本国内でスウェーデンと言えば当別町」と誰もが認めるまちづくりを進めたいものです。

この当別レクサンド姉妹都市交流25周年記念訪問事業が実り多く終えた事に対し、レクサンド市民とそしてこの訪問事業に関わる方々に深く感謝申し上げます。

姉妹都市提携25周年記念事業に参加して

随行職員 土井 大輔

当別町とレクサンド市の姉妹都市交流に関する業務に携わり、今年で5年目を迎えたが、今回、姉妹都市提携の盟約を交わしてから四半世紀という記念すべき節目の記念事業に随行職員として訪問することとなり、初めてレクサンドの地を踏む機会を得た。

初めてスウェーデン・レクサンド市を訪れた所感だが、ありきたりな表現ではあるが、「百聞は一見にしかず」この一言に尽きるだろう。ストックホルムの中心部を少し離れると、ファールン・レッドと呼ばれるベニガラ色の住宅と緑豊かな森が現れ、スウェーデンヒルズそっくり(?)な風景が広がっていた。

スウェーデンの方々が来町した際にスウェーデンヒルズを案内すると、必ず驚きの喚声が上がるとは思うが、きっとそれは、遠く離れた異国の地、ここスウェーデンで、日本家屋が建ち並び集落が突如現れ、そこにスウェーデン人が暮らす姿を目の当たりにするのと同じような感覚なのだろうなどと勝手に想像し、納得をした。

レクサンドの市内中心部に入ると、沿道や市庁舎前には多くの市民が集まり、日本とスウェーデン両国の小旗を振り、我々の訪問を盛大に歓迎してくれた。20周年記念事業で当別を訪れた方の話によると、20周年記念の際のスウェーデン大通りでのパレードに感銘を受け、あの時の歓迎に報いるため、多くの市民が集まってくれたそうだ。

記念式典にも大勢の市民が集まり、女性や子ども達による合唱で25周年を祝ってくれた。私はその歌声を聞きながら、今回の記念事業を企画した市職員のレーナ、リリエベリィ市長、ニーゴード議長らが当別町の140年記念式典に参加し、総勢500名の町民による大合唱に甚く感動していた記憶を思い返していた。

この2つの出来事は、当別とレクサンドの交流が互いの住民そして文化にまで広く深く浸透していると私が感じた瞬間であった。

海外では日本のアニメや若者のファッションなどを中心に受け入れられ「日本ブーム」と言われているが、スウェーデンも例外ではなく、書店には日本のマンガが当たり前のように並び、空港や街中には寿司屋があった。

レクサンドでは我々の訪問に合わせ、日本のパンクバンドのライブ、着物を現代風にアレンジして着こなすファッションショーなど、日本の文化を紹介するイベントを数多く開催し、観客を集めていた。

レクサンドの高校には日本語学科があったり、成人学校でも日本式の陶芸技術を教えていたり、我々との交流を生かし、「スウェーデンで日本に一番近いまち」をアピールポイントとし

たまちづくりを戦略的に進め、積極的にPRしていた。レクサンドには、日本との交流が盛んであることを聞きつけ、仕事があるのではと移住してきた日本人までいるそうである。

当別町も、レクサンドとの交流が相互訪問のみならず、スウェーデンヒルズをはじめ、ダーラヘストのあるレクサンド記念公園、ふれあい倉庫のスウェーデン式パン釜など、交流がまちづくりに生かされている点が高く評価され、平成20年度姉妹自治体交流表彰(総務大臣賞)表彰を受賞した。

きっと、これまで充実した交流が継続できているのは、双方のまちがともに、この交流を上手くまちの魅力に結び付けることができているからなのだろうと確信した。

今回の記念事業は、両国大使館、北海道、北海道国際協力総合センター、北海道スウェーデン協会、東海大学、スウェーデンハウス(株)など、数多くの関係機関・団体の協力を得て、盛会裏に終えることができた。

また、ストックホルムにおいても、在スウェーデン日本大使の特段のご配慮により、スウェーデンを理解するために最適な視察研修先を用意していただいたほか、大使公邸でレセプションまで開催していただき、過去に例を見ない充実かつ有意義な訪問とすることができた。これもまた、これまでの交流の成果のひとつといえよう。

25年前の町広報を読み返すと、姉妹都市の提携に向け、スウェーデンを訪問した故・配野元町長による手記が5か月にも渡り掲載されていた。手記の中には、当別と姉妹都市を結ぶのにふさわしい都市を探し各地で要人と面会を重ねる様子やヨブズ社(織物)とダーラヘスト(木馬)の工場を訪れては、当別のご婦人やお年寄りの生きがいになる仕事になるのではないかと思いを巡らす様子が記されており、配野元町長の姉妹都市交流にかける情熱や期待が伝わってきた。

訪問期間中、双方の首長から、この交流を次の世代へ引き継いでいかなければならないという趣旨の話があったが、これまで交流に携わってきた多くのみなさんの手により大切につながってきたこのバトン(交流)を次の世代へどう手渡していくか、我々に課せられたその責務は重大であると改めて感じた記念事業であった。

レクサンド市を訪問して

随行職員 茂 又 規 彰

この度、当別レクサンド都市交流協会及び当別町商工会より随行員として参加させていただきました。

今回は公式訪問団38名及びゲスト訪問団の皆様とのレクサンド市を訪問しました。

スウェーデン到着後、アーランダ空港よりレクサンド市へバスで向かい、レクサンド市街が入ると、沿道に数百人というたくさんの方々にお出迎えいただき、大変感動しました。

その後、歓迎セレモニー等開催いただきました。全ての行事が素晴らしいものでしたが、特に印象的だった視察先等に触れさせていただきます。

「起業家学校」9月7日

起業家学校とは言葉のとおり会社の創業者を育成するレクサンド市が運営する学校で、開校の背景には当地区には大企業が少なく就職が十分ではないため、自ら起業するという風土があるとのことでした。学校の授業料は有料で就業期間は1年～2年間。入学者の選考は面接のみで学歴よりも意欲やアイデアを重視しており、授業には専属の講師はおらず、企業経営者を毎回講師として招いてのグループワーク等の授業を行なっている。

成果として2000年に開校してから、現在までに約200人が起業している。このような創業支援は商工会でも実施しているが、数週間～数ヶ月程度の座学が中心であり、年単位の就学期間となると、当該期間の学費や生活費等を奨学金に頼らざる得ず、セットとして考えていかなければならないと思いました。

日本では新規創業企業の60%が1年以内に廃業するという統計からも、実際の経営者からのアドバイスを聞き、じっくり学ぶということはとても大事なことであると思います。

「企業家懇談会」9月7日

当別町側の参加者は泉亭町長や山田商工会長を中心とする主に経営者の皆様、レクサンド市側は経営者の皆様と行政の方、現地の商工会の事務局が出席しました。

懇談では両市町へのビジネス面でのアドバイスの他、今後、姉妹都市交流をより強いものにし、更には経済交流を推進したいという両市町の思いは一致しており、具体的には当別町は「スウェーデンの町というイメージを定着させ、来町者や居住者を増やしたい」、レクサンド市は「家具やマット等を輸出し経済交流したい」と考えているように感じました。

両市町の思惑が一致する方法としては、当別町への企業の出店（輸出）があると思います。しかし、運賃等のコストを考えると当別町で販売するためには相応の準備が必要で、今後の検討課題かと思えます。

9月10日 ハンマルビー地区

ハンマルビー地区はストックホルム市から数キロある「エコタウン」です。この地区は2004年にオリンピック誘致に失敗した地区に200億クローネ(約2900億円)かけて造成され、現在の人口は約25000人です。

街には車の乗り入れが制限され、居住者の大半は車を所有せずカーシェア(日常的に使うレンタカー)をしているとのことでした。ごみは住人により分別され、大きなごみ箱へ投棄すると地下パイプにつながった廃棄物用シュートがあり、ゴミは地下パイプを通じて中央集積所へ吸引収集され、再分別され、堆肥やバイオガスとして再利用されている。さらに可燃ごみの焼却と廃水の浄化過程で生じるエネルギーを住居の暖房として利用している。

スーパーの入口には自動販売機のような自動リサイクル機があり、ペットボトルを投函すると1クローネ(約15円)返金されるというものでした。

住民のエコに対する意識が強く、車の利用を極力控えているため、車の交通量が少なく、駐車場もとても少なく感じました。

また多くの住宅には太陽光パネルが設置されている。当別町でも「エコタウン」への第一歩として、太陽光パネル設置に関する補助金の制定が必要かと思います。

「最後に」

今回の訪問で1番強く感じたのは国際交流の意義でした。

国外との姉妹都市交流は大変です。資金もかかります。コミュニケーションも英語でしかできません。しかし今回の訪問団の参加者はレクサンド市での歓迎や町並みや各種行事に参加して、レクサンド市やスウェーデンをより身近に感じ、国際的な感覚を磨き、姉妹都市交流に強い熱意を持ったことと考えます。

この経験は何事にも代えがたいものであり、経験は家族や友人、職場の同僚を通じより大きな力となり広がっていき当別町に還元されていくと思います。

最後に今回の訪問団随行員に選出いただき大変有意義な訪問となりました。当別町役場の皆さんやレクサンド市の皆さんと密に接し新たな経験を積むことができました。ありがとうございました。

今回の経験を、夏至祭や姉妹都市交流だけでなく日常の業務に活かしていきたいと思いません。